アコライト・ソフィア

葛城　炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アコライト・ソフィア

【Ｎコード】
Ｎ７７２８Ｄ

【作者名】
葛城　炯

【あらすじ】
聖宝、光の杖を持つアコライトのソフィアは聖宝を持つために家族の記憶を消され、杖を疎ましく感じていた。ソフィアと仲間の四力の精霊の移し身である人形達は竜退治の依頼を受けて山間の村へと向かう。村へ辿り着き、確認すると依頼の内容は竜退治ではなく瘴気祓いだという。ソフィアは瘴気の原因を捜していくうちに村近くの沼に住む亜人類や樹の精霊からも依頼を受ける。さらには傷ついた竜を治したりして敵を捜すが、村人や亜人類の姫達も捕らわれてしまう。敵と戦い、竜を倒し、姫達を救い出して、最後の敵へと

向かうが、敵は神獣を強引な手段で召還する。総ての敵を退けたソフィアは懐かしさと共に村を後にした。杖と共に。

アコライト・ソフィア　1

1．霧の記憶

…ソフィアを…ソフィアを帰してくれ。

…ワシ等の娘を、帰してくれ！

『ならぬ！　あの娘は聖なる杖の継承者。主らのような、平民共とは資質が違う！』

…あの娘は私の娘です！

…たとえ血は繋がっていなくとも

『ほほう。ならば忘れてしまうがいい』

…あたしは忘れないわ！

…ソフィアはあたしの妹だもの。

…絶対に忘れない。忘れないから！

『ならば…』

…何するの？

…ソフィア姉ちゃんに何するの？

『記憶を浄化するのさ。光の杖の継承者として相応しい記憶だけに』

…ソフィア！　…ソフィア？

…ワシ等が判らんのか？

…判らんのか？

……。

…せめて、これを渡してくれ。

…私達の、家族としての証として…

『判りました。今は無理でもいつか必ず。必ずお渡しします…』

…待って。待って！

…お父ちゃん！　母ちゃん！

…お姉ちゃん！　…ちゃん！

…えっ？

…名前が出てこない？

…待ってぇ！　名前を教えてぇ！
…わぁぁぁぁぁぁぁ！
…誰か記憶を返してぇぇ！

2．霧の峠

『☆どないしたん？』
『★せや、汗びっしょりやん？』
『〇また思い出してたん？』
『◎…いつか逢えるよ。きっと』
「ありがと。みんな」
フードの付いた白い僧侶服を着た濃い栗色の長い髪の色白の少女が杉の木の下で上身を木に預けて休んでいた。そこは峠を登りきった所の小さな平場。霧が晴れるのを待っていた間に微睡んでしまっていた。四つの人形が少女の顔を心配そうに覗き込んでいたが、浅い眠りから醒めた少女は含羞みながら眼を擦り、涙の跡を消した。
『★せやけど…』
「何？」
『☆あないに、ぎゅって抱きしめてたから…熱いんちゃう？　ソフィア』
「えっ？」
ソフィアは寝ている間に絹の袋鞄を抱きしめていたのだが、今はその指先や腕からから煙が上がっている。
「きゃあぁぁぁ！　熱ぃぃぃぃぃ！　ウェンディ、水ぅ！」
四つの人形のうち蒼い帽子の人形が呪文を唱えた。
『◎…ウォタル』　…ばっしゃあぁぁん。
空中に滝が出現し、大量の水を彼女達に落として…滝は消えた。手や腕の煙と共に。
『☆多いんとちゃう？』
『◎…ごめん』
『〇ええやん、いつもの事やし』

「ははは…。私の影響だから仕方ないよね」
ソフィアは笑いながら両袖から水を絞り落とし、自分の指の状態を確認する。
「ん！　火傷はしなくて済んだみたい。ありがと」
『★んじゃ、アタイの出番』　『☆アタシの力も必要でしょ？』
二つの人形、紅い帽子の人形と萌黄色の帽子の人形が呪文を唱える。
『★焔よ。淡き熱と態て顕れよ。ファイ！』
紅い帽子の人形の指先にぽうと紅い球が出た。
『☆風よ。彼の力を纏い我らの結界と成れ！　ウィンヴェン』
ひゅう、と風が舞い、紅い球を呑み込み、熱風となって彼女達を包み、衣をはためかせる。
「うぅん。イイ風ね」
二つの魔法で出来上がった熱風は彼女達の服を忽ちの内に乾かしていく。
「ありがと。サーラちゃん、アェリィ」
『★てへ』
『☆ずるいぃ！　サーラだけ”ちゃん”つけたぁ！』
『〇どうでもいいやん』
「…ごめんね。サーラは”ちゃん”つけたほうが言いやすいんよ。でも、今度から気をつけるね」
他愛もない人形達の会話は、ソフィアの心を慰めるため。その事を誰よりも彼女自身が判っていた。
「うわぁっ！　みんな、霧が晴れてきたよっ！」
アェリィの風に誘われたのか、谷底から涼やかな風が湧き上がり、峠を覆っていた霧を吹き飛ばして、霧のベールの下から大樹海が顕した。樹海の向こうにはまだ靄に覆われている湖か沼が見える。沼の全体は見えないが、靄を通して見える深き碧と大樹海の深く軽やかに煌めく緑が谷底からの風を一層涼やかにしているようだ。
「……綺麗。きゃっ！」

ソフィアの呟きが突風を招いたのか、黒髪とも光に透かすと金髪とも見える濃い栗色の軽くウェーブのかかった長い髪をはためかせ、野暮ったい僧衣を吹き付けてソフィアの引き締まったしなやかな肢体を顕す。大地母神を思わせる豊かな胸が引き締まった肢体のコントラスト。麗人と呼ぶにはまだあどけなさが残る端正な横顔を風に遊ばれた髪が隠す。

「ん～。心地よい風だけど景色を楽しんでいる暇はなさそうね。さて？　そろそろ出発しないと。夕方までに依頼された村まで辿り着けないわ」

『〇せや、発と！』

ソフィアは傍らに立て掛けていた鈍く銀色に輝く杖を持ち立ち上がった。その杖は少女の背より高く、表面に微かに細かな紋様が刻まれている。

ソフィアは杖を暫し見つめ、ふうっと息を吐いて諦めたように、悲しげな瞳のままで微笑み、抱えていた袋鞄を背中に背負って、ぽんと叩いた。

「さて、そろそろ霧も晴れてきたし…」

出かけようか、と言いかけた時、突然、空で大きな叫び声がした。

3．峠の空

「何？」

『◎…竜だよ。二匹』

「ギルドの紹介では一匹だったよね？」

空からの叫び声は、はっきりと2つの竜の存在を示していた。一つは、竜独特の万里に届くかという声、もう一つは少しくぐもった地響きのような声。晴れてきたとはいえ、霧の中から空を見やって竜の所在を見つけだすのは難しい。一人と四つの人形はあちこちと見渡し捜すのだが、なかなか見つからない。

『★喧嘩してるんとちゃうか？』

「そうみたいね」

『☆居たぁっ！　あそこ！　向こうの尾根の尖ったところのちょっと左！』
アェリィが指差す方には確かに2匹の竜が居た。が、遠くに霞んでいるために、どういう竜かは判らなかった。
『〇曇った声のするほうは、変やな。なんや、ゾンビっぽいで』
「ゾンビ？　ノーラ、毒を持っているという事？」
『〇ん～たぶん持ってるで』
『★もう一匹の方はなんやキラキラしてるで…金竜？』
「竜は齢を重ねるに従い、色が変わる。赤竜から青竜、青竜から数色へて黒竜。黒竜から金竜に。金竜からは確認されていない…寺院の図書に書いてあったけど。どのぐらい生きてるんだろうね？」
『〇さぁ？　ウチらよりは永く生きとるんやろ』
暫くの間、ソフィア達は竜と竜の戦いを見ているとウェンディが呟いた。
『◎…竜と竜が戦う時…雨になる』
「え？」
程なく黒い雲と共に、雷鳴が轟き始めた。
『◎…特に金色の竜は雷を呼び嵐を呼ぶ』
『★はよ言わんかい！』
「みんな。走るわよ！」
降り始めた雨の下、ソフィアと人形達は村を目指して峠を走り下りた。雨雲の上では、ひとしきり大きい竜の叫び声が響き、そして静かになった。

4．峠間の村

…とんとん…夜分すみません。
雨音の中に戸を叩く音と誰かが呼び掛けている声が、村外れの家に響いた。
「おじいちゃん。誰か来たよ？」
「うむ。ニクシーか、バンジーか…」

蒼い髪の女の子の声に応えて白髪の老人は斧を握り、玄関に向かった。
「おじじ、気をつけて！」
老人の後ろに鉈を持った少年が続く。
「お前は下がって、ノランとミクラを守っておれ」
少年は少しふくれて、それでもおとなしく下がった。
「気をつけて。おじいさん」　下がった少年を抱きしめて、赤い髪の少女が少年に囁いた。
「守ってね？」　少年は少し含羞んで、おう、と小さく応えた。
少年を抱きしめた腕には火傷の跡。少年はその跡を自分の掌で隠す。それを横目で見ていた女の子は小さく呟いた。
「…やらしいの」
「うるさいぞ。ミクラ」
「静かにしておれ、ギゼル」
老人は、振り向き少年をたしなめると、玄関の戸に手をかけて問い掛けた。
「どちらさんかの？　ここは生者の家じゃ。亡霊ならば墓場に、水の精霊ならば水に帰るがよい。クラム・クライ・ク…」
「クライ・クラム・クロウ・クゼイ。者々よ、棲み宿う処に帰れ。霊帰の呪文をご存じということは、木こりさんですか？」
戸の向こうの声は、老人の唱え始めた呪文を言い終えると老人に問い掛けた。
「自ら呪文を唱えて何事も無いとすると、亡霊ではない…旅人かね？」
「アィルコンティヌ寺院のアコライト、ソフィア・フレイアと申します。ギルドの紹介で参りました。」
「アコライト…修行僧か？」
「ええ。私はまだ未熟者で修行の旅をして居ります。一つは白魔法の技を極めるため、いま一つは人々の助けとなるために。ジエルの町に立ち寄ったところ、こちらの依頼を承りました」

「依頼を？　それは失礼した。いま戸を開けるから、ちょっと待ってくれ」
ガタゴトと戸を開けるとそこには白い僧衣の美少女が微笑んでいた。
「夜分に申し訳ありません。夕刻までには訪れたかったのですが、雨に降られて道に迷ってしまいました」
深々と礼をするソフィアを見て老人は尋ねた。
「…雨の中を歩いてきた割には、さほど濡れておらんようじゃが？」
「はい？　あ、ええ。ちょっと魔法で…」
『◎…ソフィア。まだ風の結界が残ってる』
「えっ？　あ、本当だ…」　見上げると、ソフィアの頭上に大きな水玉ができあがっている。
「なんじゃあ？　これは？」
老人は上を見ずにソフィアのフードの中から出てきた蒼い帽子の人形を見つめた。
「おじいちゃん。旅の人なの？　あっ、可愛いお人形さん」
いつの間にか近づいたミクラが目敏くウェンディを見つけた。
「こんばんわ。あたしと同じ髪の色のお人形だ…あっと、帽子なのね」
『◎…こんばんは』
「きゃあ！　挨拶した！　って、…おねえちゃん、人形使い？」
笑っていた顔に怯えの色が浮かび、ミクラは老人の後ろにささっと隠れた。
人形遣いとは堕落した白魔導師。術を改竄し、死霊を操るという。

アコライト・ソフィア　１（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア　2（前書き）

ソフィアが自分のことを語ろうとした時…

アコライト・ソフィア　2

「ううん、白魔法使いの修行僧なの。こら、ウェンディ。出てきちゃ駄目でしょ」
『☆そや、出たらあかんやん』
『★そういうアェリィかて出とるやん』
『〇この際、全員出たらええねん』
わらわらとフードの中から人形達が出てきた。
「こらぁ！　勝手に出てきちゃ駄目でしょっ！」
『◎…でも、ソフィア』
「おじいさん。旅の方なら夕食を…」
にこやかに話しかけたノランだったが、自由に動きまわる人形を見て、表情が停止した。
「きゃあぁぁ！　人形が喋ってるぅぅぅ…」
ふぅぅと、息を吐いてノランは倒れかけた。老人が慌てて支える。
「誰だ？　貴様。ノラン姉ちゃんに何をした？　その人形は何だ？」
ノランを庇うかのように前に出てきた少年はソフィアに凄む。
「私の名はソフィア・フレイア。職業は白魔法使いで、この子達は…」
「僧侶？　司祭なのか？　いや司祭や僧侶が人形使いな訳は無い！」
ギゼルは言葉を遮り、鉈を握りなおして凄む。まるで、親の敵を見るような眼で。
「うぅん。僧侶の資格は取ってないし、まだ修行中なの。さっき山向こうの……やだ違うわ。さっきじゃなくて、今朝ね。今朝、峠向こうのギザーの都、あ、また間違えた。ジエルの町のギルドで…あっ、そうそう。この人形達は私が操っている訳じゃなくて…」
慌てたソフィアは大袈裟な身振り手振りで説明するのだが、かえってギゼルの疑いを深くしていく。
「人形を操っていない？」

「そうそう。この子たちは、自分の意志を持って…」
『◎…ねぇ、ソフィア』
「な・あ・にっ？　ウェンディっ！」
話の腰を折られたソフィアはちょっと額をヒクつかせながらも、笑いながらウェンディに尋ねた。
『◎〇★☆ひゃあっ！　ソフィア、怖い』
「…あ・の・ね・ぇ・っ」
額のヒクつきが大きくなったソフィアに恐怖した人形達は肩から降りて人形達は逃げ回った。が、ふと思い出したようにウェンディが近づいて、ゆっくりと言った。
『◎…結界、壊れるよ』
「え？」
ソフィアが頭上の水玉を思い出して、見上げた瞬間…
ざっぱぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁん
…限界に達し、破裂した巨大な水玉は5人と人形達に滝のように降りかかった。
「…失礼しました」
びしゃびゃに濡れてぼうっと立ちつくす4人に、これまた濡れ鼠になってしまったソフィアは深々と頭を下げるしかなかった。
雨音は何事も無かったように静かに村を包んでいる。
そして、その様子を軒下の蝙蝠が不思議そうに見ていた。

5．村の泉

「あぁぁぁぁ！　生き返るっ！」
湯気の中、温泉につかりながらソフィアは背伸びした。濡れて体が冷えてしまった5人は家の外、少しだけ歩いた所にある温泉に来ていた。
「…おねぇちゃん」
「なぁに？　ミクラちゃん」
「僧侶の人って服着たまま入るの？」

ソフィアは白く薄いガウンのような服を着たまま入っていた。
「この服を着ていないとね…ほら、判る？」
ソフィアは腕まくりをし、すらりと伸びた白い腕を夜の闇の中に伸ばす。と、ぼうっと光を帯びているのが判った。
「あっ！　光ってるぅ！」
「おねぇちゃんはね、法力が強すぎるからこの服で抑えていないと駄目なのよ。この服は聖魔絹というの。聖なる紋章を宿した葉を、聖なる紋を持つ蚕が食べて創ってもらった絹糸で紡いだ物なの。この布で作った手袋をすると白魔導師も刃物が持てるという聖なる布よ」
「…ふぅぅん」
「これを着ていないとね、知らないうちに周りの人に影響出たりするの」　「どんな？」
ノランとミクラは少し後ろに引きながら聞いた。
「やぁねぇ。変な事は起きないわよ。嘘がつけなくなるとか、人に物をあげたくなるとか…まぁ、聖人のような性格になっていくのよ。つまり浄化の魔法がかかってたのと同じようになっていくのよね。お金持ちなら未だ、いいんだけど、それなりの人が影響受けたりすると全財産を人にあげたりしてね。まぁ、それぐらいの事しか起きないわよ。大抵は…」
「…それだけでも十分、悲惨だと思う」
しれっと突っ込むミクラの指摘は正しい。いきなり全財産を失ったら…少なくとも『それぐらい』程度では無いだろう。
「…う。でもね、気をつけている時は、そういう事は無いんだけどね。お風呂なんかで気が緩んだ時はちょっとね」
「わかるぅ！　お風呂って気持ちいいものね」
「だから着ているの。判った？」
「わかった」
ミクラはノランから離れソフィアに近づいてきた。
「おねぇちゃん…」

「なぁに？」
「胸、おっきいね」
「ひゃあぃぃっ！」
ミクラにつんと突かれてソフィアは奇妙な声を上げて、ささっと後退りした。
「む、胸って、乳房はね、年頃になったら、それなりにおっきくなってくるものなのよ」
「でも、ノランねぇちゃんより、背も高いし、おなか細いし、腕とか足も細くてすらっとしてるし…」
「…でも、ポーズ取る必要は無いと思うわ」
離れていたノランはミクラの言葉に煽てられて思わずポーズを取っているソフィアに冷静に指摘した。
「…失礼しましたぁ」
ソフィアは赤面しながら、ざぶんとお湯の中にしゃがみ込んだ。
「さ、じゃ私は御飯、暖めているわ。お先に…」
ノランは微笑み、ソフィアに冷たい視線を投げて湯船から出ていった。
「妬いてるのよ」　ミクラは小声でソフィアに呟いた。
「そかな？　優しそうなお姉さんじゃない？」
「あたし嫌い。だって、あたしやおじいちゃんには普通に話すのに、ギゼルには猫撫で声で話すんだよ」
ミクラの声には棘が在る。それは…？
「けど、みんな姉弟でしょ？　仲良くしなきゃ…」
「姉弟じゃないもん。あたしとギゼルとノラン姉ちゃんは、他人だもの」
淡々と話す言葉に悲しみの色が宿る。
「どういう事？」　ソフィアは悲しみの色を気づかぬフリをして尋ねる。
「5年前にね大火事があったの。あの時…長風邪が流行ってて、お母さんも罹っちゃって…あたしとギゼルとおじいちゃんは山に薬草

取りに行ってたから…大丈夫だったんだけど。村のみんなは…みんなは…」
　涙声になって話が途切れる。
「いまはもう…村にはあたし達しかいないんだもの」
「いいのよ。ごめんね、変な事聞いて」
　ソフィアはミクラをぎゅっと抱きよせると背中を撫でた。
「ここは静かね。町にも近いし、温泉も出るんじゃ、別荘地とか保養所としては最高じゃない。直ぐに賑やかになるわよ」
「無理じゃ」　不意に竹囲いの向こうから声がした。
「えっ？　あ、御老人、聞いてらしたんですか？」
「隣の温泉に居るんだ。『聞いてらした』も無いだろう？」
「これ！　ギゼル。そんなに毒づいてどうしたのじゃ？」
　人形遣いではないことだけは説明し納得してもらってはいたのだが、ギゼルだけは未だ完全には信じてはいないようだった。
「…別に。どうせ、あのねぇちゃんも今までの人と同じ…何もできずに逃げ出すさ」
「ギゼル！　どうしてそういう事を…」
　囲いの向こうで喧嘩が始まりそうになったので慌ててソフィアは声を出した。
「すみません。どうか御気になさらずに…」
「いやいや。さっきは盗み聞きしたようですまんの」
　あっさりと老人が非を認めたせいか、ギゼルの声は不貞腐れたように小さな呟きに変わって聞こえなくなった。
「いいえ。すみません、５年前の火事というのは？」
　ソフィアに聞かれるままに竹囲いの向こうから老人が話し始めた。
「あの５年前の大火事か。なにが原因かは判らんがの。その火事の後から瘴気が村を覆い始めたのじゃ。なんの因果かのう」
「瘴気が？　でも私は此処に来るまで何も感じませんでしたけど？」
「空を御覧なされ」　言われるままにソフィアは星空を見上げた。
　真上の方は先程までの雨が嘘のように晴れ上がって星が瞬いてい

る。が、その周りには無気味に揺れ動く紫緑色の瘴気が…
「さっきまでは無かったのに…」
「いつもの事じゃよ。なぜか瘴気は雨が降る時は薄まっているのじゃ。霧の時も同じ。たぶん、此処の泉のせいじゃろ」
「泉の？」
「そうさね、此処の泉は3つ在るんじゃ。一つはこの温泉。もう一つはこの坂上に在る教会の庭の霊泉。この温泉も昔は霊験があると人気じゃったんじゃ。まぁ、この泉の霊気が湯気と共に雨や霧に溶け込んでるんじゃろ。雨や霧の日は瘴気は消えてしまう。無論、普段もこの家の周りだけは瘴気も近づかん」
「瘴気が消えるほどの霊気がこの温泉に？」
ソフィアにはそれ程の霊気を感じることはできなかった。
「たぶんの。現に瘴気は消えとるからの。この村も以前はこの温泉の湯治客で、それなりに賑わっとんたんじゃ」
「そうなんですか」
「いまは瘴気のおかげで寂れるばかり。大火事の後は移り住むのもおらん。今、残っているのワシとギゼルとノランとミクラの4人だけ。まぁ、ギーゼが帰ってくるまでの辛抱さ」
「ギーゼさん？」

アコライト・ソフィア　２（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア　3（前書き）

人形達の正体とは…
そして、老人の依頼は…

アコライト・ソフィア　3

「ギゼルの兄じゃ。クラフの町に鍛冶屋の修行にいっとる。後1年で年季が明けるんじゃ。それまでの辛抱じゃよ」
「修行なさってるんですか。帰ってくるのが楽しみですね」
「そうじゃ」
老人の声の調子で笑っているのが手に取るように判る。
「自慢の孫じゃ。頑固者での、火事の事を便りにしてもぜんぜん帰ってこん。ま、そのかわり9年の修行を7年で済ますと書いてきよった。まったく誰に似たのやら…」
「来年がその7年目なんですか？　楽しみですね」
「そうじゃ。それまではこの温泉の霊気をたんと吸い込んで瘴気にやられんようにせんとのう」
「大丈夫ですよ。ところで…もう1つの泉は？」
「森の中にある。その泉の名は迷いの泉、別名には帰らずの泉ともいってな、辿り着いたものは森から出てこれんようになるそうじゃ」
「怖い泉ですね」
「ふぁふぁふぁ、正直言ってこのワシも見た事は無い。まぁ単なる言い伝えだけなのかも知れん」
「戒めというわけですか？」
「そうそう。森を大事にしろとな」
そのような言い伝えや伝説の類は多い。だが、何かソフィアには引っ掛かった。
（見た事もない…怪物などをも伴わない伝説…？　変ね）
「ところで教会の泉とはどんな霊泉なのですか？」
「さぁな。なにせワシが若い頃に涸れてしまったからのぉ」
「涸れた？」
「そうじゃ。司祭が消えた直後に涸れてしまったんじゃ」
「司祭が消えた？　行方不明に？」

「さぁな…。噂じゃ森の中の迷いの泉に身を投げたと言われとったな。教会の方は後任が来んので村の領主が司祭をしてたよ」
「領主の方が？　司祭の資格はあったのですか？」
「そんなものはないさ。だが、後任が来んのじゃ。仕方無かろう？」
「…そうですね」
（しかし、そういうことがあるのだろうか？）
ソフィアも専職宣誓をしていないとはいえ、僧侶である。規則では…如何なる宗派であろうと間を置かずに後任が決まるはず。しかも司祭が務めるレベルの教会ならば間違いなく後任がすぐさま赴任するはずである。
（誰かが邪魔した？）
宗教の中に身を置く者としては当然の疑問がソフィアの心の中に浮かぶ。
「ところで…」　「はい？　なんでしょう？」
「そろそろ上がらんか？　ギゼルがのぼせてしまった。」
「えっ？　あ、きゃあ、ミクラちゃん！」
ソフィアの腕の中でミクラものぼせていた。

6．泉の宿

家に戻り、すっかり遅くなった夕食を食べ終わった時に老人が話し始めた。
「そうそう。依頼のことじゃがな…」
「はい。ノランさん、御馳走様でした。あれ？　ちょっとすみません」
ソフィアはノランに一声かけた時、ふと、ノランの手に目がとまった。
「どうしました？　その手…」　ノランの両手には白い包帯が巻かれていた。
「いえ。ちょっと料理を暖めなおしている時に火傷しちゃって」
ノランは振り向かずに応えた。

「慌て者じゃのう。ちゃんと冷やしたのか？」
「えぇ。このぐらい直ぐに癒るでしょ？」　何故かそっけない態度でノランは応えた。
「いけませんわ。直ぐに癒さないと。痕になりますわ」
「いえ。火傷の痕なら、もう…」
ソフィアは席を立ちノランの手を取ると、静かに呪文を唱え始めた。
「聖なる力よ、この者に力を与え賜え…エル・エラ・ライ・リィ・カヴァ」
ソフィアの両手から穏やかな光がノランの両手に移り包み、弾け跳んだ。
「きゃっ！」
「吃驚させてごめんなさい。でも、もう癒りましたよ」
「え？」
ノランは包帯を取ってみると火傷は痕形もなく消えていた。
「…古傷も消えている」
ギゼルも呆然としてノランの手を見つめている。
「これでも白魔法使いですからね。治癒はお任せあれ」
「ねぇちゃんって凄いんだ…」　ギゼルは吃驚した顔で呟いた。
「やっとわかったの？」　ミクラがしたり顔で威張った。
「お前は関係無いだろ？」
「ふ～～んだ」
「こらこら。喧嘩しないの」
ソフィアは二人の間に入って、喧嘩をとめるとノランに振り向き、術法を説明した。
「ちょっと過剰ぎみだから、暫くチクチクするかもしれないけど、許してね」
「…いえ、ありがとう」　ノランはソフィアを見ずに自分の手を見つめながら応えた。
「あ、そうそう。依頼の内容の事でしたね、すみません。勝手な事

をしてお話を中断してしまいました」
「いやいや、ノランの火傷を癒して下さったんじゃ。ありがたいことじゃで。しかも、その腕前ならば、瘴気祓いなどすぐじゃろ」
ソフィアは席に戻ると、ちょっとだけ考えてから尋ね直した。
「依頼の内容は…瘴気祓いなのですね？」
強く確認するソフィアに老人は少しだけ、たじろいで応えた。
「そうじゃ。この煩わしい瘴気を綺麗さっぱりと消して欲しいのじゃ」
「…そうですか。では、瘴気の源に心当たりはありませんか？」
「さて？　沼か、共同墓地か…その程度しか思いつかん。なにせ、司祭をかねていた領主も居なくなってしもうたからな。火事の時のも含めてちゃんと弔ってはおらん」
「なるほど。共同墓地ですね。それで沼というのは？」
「ここの沼にはニクシーという精霊、いや亜人類が居っての。霊泉が涸れてから人間に悪さをするようになったきたんじゃ。瘴気もその悪さのうちかも知れん。困ったものじゃ」
「ニクシーが？　見た事は有るんですか？」
「ワシは無いが、ノランが見たそうじゃ。のう？　ノラン」
話しかけられたノランは振り向かずに、小さく頷いた。
「でも暗かったし。熊と間違えたのかも…」
「そんなこと無いよ」　テーブルの傍らで人形達と遊んでいたミクラが声をあげた。
「だって、あたしも見たもん。河童みたいなの」
『◎…河童。ひぃ』
「ウェンディ泣かないの」
「何でウェンディちゃんが泣くの？　あたし悪い事言った？」
「この子たちはね…」　ソフィアは人形達の頭を撫でながら、説明した。
「それぞれ精霊の意思が繋がっているの。アェリィは風の精霊。サーラは火の精霊。ノーラは土の精霊。そしてウェンディは水の精霊。

ニクシーも水の精霊の仲間なの。で、仲間の事を言われたから吃驚しただけ。そだよね？　ウェンディ」
蒼い帽子の人形は黙って小さく頷いた。
「そなの。ごめんね、ウェンディちゃん」
『〇ええって、ウェンディはおセンチさんやから泣くんが早いねん』
『☆そやそや。気にせんでええから。アタシらの実体は人間離れしとるから容姿を気にするんが間違いやねん』
『★もともと精霊やんか。「人間離れ」は変やで』
『〇そか。人間やあらへんもんな』
きゃはははと人形達は笑いだした。
「さっきから気になっとるんだが…アンタが人形遣いではないとしてもだ…この人形達はなんで動いてるのかね？」
老人は不可思議な面持ちでソフィアに聞いた。
「この子たちは…」
『☆はい、はぁい。説明しまぁす』　ソフィアが説明するより早く人形達が話し始めた。
『☆アタシ達はそれぞれ別々の場所で存在している精霊が本体でぇっす。んで、ソフィアの有り余っとる法力を借りて意思を勝手に繋げてまぁす』
『★勝手に来とるから火と水、風と土と相反する精霊なんやけど、喧嘩しませぇん』
『☆召還されて相反する精霊がいたら、大暴れモノやけどね』
『〇それに繋げとるといってもウチ等の本体の無意識に繋がっとるから、こっちの事は本体が意識せんで済んでるんやけどね』
『☆ほんで実際に声を出して喋っとる訳やないしね』
『★アタイ達の意識をソフィアの法力借りて直接、爺さん達の意識に繋げとるんよ』
『〇せやからウチ等の声は誰が喋っとるんかすぐ判るやろ？　目ぇを瞑って耳を塞いでも判るはずやで』
老人は試しに目を瞑り耳を塞いでみる。

『☆判るやろ？』
「おお。なんかへんな記号が浮かんでから聞こえとるぞ」
『☆それは意識を繋げた時の信号みたいなもんやね』
『◎…んとね、そゆ事』
『☆★○それだけかい！』
「じゃ、ここの沼に棲んでるニクシーがウェンディちゃんの本体なの？」
「それは違うわ。ウェンディも他の子達もこの近くには棲んでいないわ」
『☆★○そうそう』
「でも同じ水の精霊の仲間だから気になったんだよね？　ウェンディ」
『◎…うん』
「ごめんね」
『★ええて。気にしすぎやねん。ウェンディは』
「さて仲直りも済んだようじゃ。ソフィアさん。瘴気祓いをよろしく頼みましたぞ」
「はい。確かに承りました」
ソフィアは立ち上がると深々と頭を下げた。その姿をノランは醒めた目で見ていた。

7．宿の夜

『★変やないか？』
ソフィア達は離れの部屋で寝具の中に潜り込んで何日かぶりの布団の暖かさを感じているところだった。
「何が？」　ソフィアは横になれる喜びに浸りきっていた。布団の中でにこにこしながら何度も寝返りしている。
『☆そないに横になるんが楽なんやったら、野宿ん時も横んなったらええのに』
「寺院の規則で禁止だからねぇ～」

『〇普段は規則なんか嫌いだ〜って言ってるくせに…』
「いいからぁ〜で、何が変なの？」

アコライト・ソフィア　３（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
３／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア　４（前書き）

ソフィアの過去と少女の過去が重なり、否定されるのは…

アコライト・ソフィア　4

ソフィアは白々しく聞き直した。頭から布団を被ったままで。
『★依頼の内容は瘴気を祓うこと』
「うんうん。そうらしいね」
『☆んでも町で聞いたんは竜の退治や無かったか？』
「そだったね」
『〇なんで違うんや？』
「そうね。なんで依頼の内容が違ってるかというと…」
『☆★〇…というと？』
「間違えたんじゃない？」
…ばきっ！
「いったぁ！　…すぐ暴力に訴えるのはよくないと思うよ」
『★ボケるんも善し悪しやと思うで』
『☆幾ら何でも竜退治と瘴気祓いは間違えへんで』
「…確かにね」
依頼文を届けたのは若い女とギルドでは言っていた。この村で若い女といえば…
「ノランさんが瘴気の原因は竜だと考えたんじゃない？」
『〇そやろか？』　『★そうやったとしても、なんで竜と思ったんかや』
『☆そや。お爺さんが知らんと言うことはここいらには竜は居ないということやしね』
『〇ウチ達が峠で見たんもここいらへんに棲んでそうな竜や無かったしね』
「…それは」
『☆★〇それは？』
「女の勘じゃない？」
したり顔で言うソフィアの言葉に人形達は脱力しコケて転がるし

かなかった。

「こんばんわ」

『☆…誰か来たで』

部屋の戸を開けるとそこにはミクラが枕を抱いて立っていた。

『〇ミクラちゃんやん。どないしたん？』

「いっしょに寝ていい？」

「いいけど。どうしたの？」

「さっき、お風呂でね…」

『★お風呂で？』

「おかあさんの事、思い出したの」

『◎…おかあさん？』

人形達はソフィアの方を振り向き、胸をじぃと見てから、顔を見合わせて深く頷いた。

「なによ～。もう！」

「…駄目？」

ソフィアは静かに微笑むと右手をミクラに伸ばして言った。

「いらっしゃい。いっしょに寝ましょ」

8．夜の話

「おねえちゃん。寝た？」

「うぅん。まだよ」

実際、ソフィアは昼に微睡んだせいか寝付けないでいた。人形達は枕許や布団の上で寝ていた。と言うより、いびきを立てていた。

「人形のくせにいびきを立てるなんて変だよね」

『◎…立てて無いもん』

「あ、ウェンディちゃん。さっきはごめんね」

『◎…ワタシもすぐ泣いてごめんね』

「はい。仲直り。よかったね」

ウェンディはにっこりと笑い、ミクラの枕許に潜り込んだ。

「ねぇ。おねえちゃん。おねえちゃんの家族ってどんな人？」
人形達のいびきが一瞬止まった。
なによりも吃驚したのはソフィアだったが、ゆっくりと笑って言った。
「…私の家族はね。何処に居るか判らないの」
「えっ？」
「私はね、捨て子だったの。武器屋さんの前でお母さんの来るのを待って居たけど、いつまで待っても来なかったの。それでね、その武器屋さんに拾われてね。『今日からワシ等が家族だ』って言われてね。嬉しかったなぁ。それで…そこにはお姉さんと妹が居たの。よく悪戯して遊んだなぁ」
「お転婆だったんだ？」
「うん。特に妹なんか悪戯の天才だったな。黒魔法なんかで猫の髭焼いたりしてね」
「いけないんだ」
「でもね、おかぁちゃんが白魔法とか薬草とかで癒しては謝ってたかな？」
「ふぅん」
「お父なんかひどいのよ。男の子と喧嘩して帰ったら『勝ってきたんか？』だって」
「きゃはは」
「女の子なんだから勝てる訳ないじゃない。でもね『勝ってくるまで帰ってくるな』だって」
「すごい」
「でもね、妹とか、おねぇちゃんと二人だったら負けないようになっちゃったけどね」
「ひゃあ。すごいんだ」
「妹は黒魔法覚えてたし、おねぇちゃんは武器使ったら下手な大人より強かったしね」
「ひょぇぇぇぇぇ」

「私だってね、武術大会の子供の部で優勝したんだから」
「ほんと？　お姉さんに勝ったの？」
「うぅん。おねぇちゃんは大人の部に参加してたから。しっかり優勝してたけどね」
「…すごすぎ」
「でも…その優勝がよくなかったな…」
「なんで？」
「大人の優勝者は王宮に招かれて祝福されるんだけど、姉妹で優勝したのは初めてだからって私と妹も一緒に招かれたのよ…それで」
「悪戯したの？」
「ピンポ～ン。妹がね、飾ってあった杖を落としちゃったの」
「どんな杖？」
「あの杖よ」
　ソフィアは部屋の片隅に立て掛けてある白銀色に輝く杖を指差した。
「そんなにすごい杖なの？」
「昔の偉～い人が持っていた杖だって。その杖と一緒に妹が落ちて…杖を仕舞ってあった箱の下敷きになりそうになったの。それで瞬間的に…掴んじゃったの。そしたら大騒ぎ」
「どうして？」
「あの杖は普通の人は掴む事もできなかったんだって。掴むとね、火傷しちゃうのよ」
「ふぅん」
「で、杖の継承者だって言われて、家族とも離れ離れになっちゃった…」
「えっ？　どうして？」
「杖の継承者としてちゃんと白魔法を極めなさいって修道所に入れられちゃったの…」
「でもお父さんとかの住所は判ってるんでしょ？」
「…わからないの」

「どうして？」
「記憶をね…浄化されちゃったの」
「浄化…？」
「お父の話もおかぁちゃんの料理もおねぇちゃんの武術の腕前も妹の黒魔法も覚えてるわ。いつどんな事をしていたのかも」
「……」
「でもね声は思い出せないの。顔も思い出せないの。名前も住所も…。温もりと思い出のほとんどは思い出せるのに…」
「…かわいそう」
「…いまはね、あの杖とこの袋の中の…刃物が家族と私を繋ぐ絆なの」
いつの間にか流れ出ていた涙をミクラがそっと拭った。
「ありがと。やさしいのね」
ソフィアはにっこりと笑ってミクラを抱きしめた。
「…わたしね」
「うん？」
「自分が一番不幸だと思ってた。火事で…一人になっちゃったし。ギゼルとすぐ喧嘩しちゃうし。ノラン姉さんとはなんか馴染めないし。でも、おねえちゃんも不幸だったんだね」
ミクラの言葉にソフィアは真面目な顔になって応えた。
「わたしは不幸じゃないわよ」
「え？」
ソフィアはにっこりと笑ってから言葉を続けた。
「一番不幸なのはね、幸せになろうとしない事よ。わたしはいつか絶対、お父ちゃんとお母ちゃんとお姉ちゃんと妹を見つけるんだもの。不幸じゃないわ」
「そか…そうだね。幸せになればいいんだ」
「そうよ。そのとおり」
「あっ、ひょっとして…旅を続けているのもそのため？」
「ピンポォ～ン。冴えてるわね」

「てへへ」
「さぁ、お話はここまで。もう寝ましょ」
「うん。お休みなさい」
「はい。お休みなさい」
程なく二人は寝息をたてはじめ、そして、人形達も静かに眠りに付いた。
…暫くして
闇の中から伸び出た鱗の付いた腕が杖を掴もうとした。が、その手からじゅっと蒸気が上がり掴む事はできず…やがて闇に消えていった。

9．村の墓所
「ここが共同墓地ね」
寂寥とした草原の片隅。木々に囲まれた墓地には確かに瘴気が漂っている。
『○ここの瘴気はそないに濃ゆくないなぁ』
「瘴気ってなんなの？」
一緒に道案内としてついてきたミクラとギーゼだが、墓地に入るのは怖いらしくソフィアの後ろ、墓地の入り口あたりから辺りを窺いながら聞いた。
「瘴気って…一言で説明するのは難しいけど、まぁ、簡単に言うと霊魂の一種…要するに単純に言えば幽霊の素ね。特に悪意を持って悪霊となった霊魂がばらばらになったものが瘴気…と言ったら判るかしら？」
「わかった」
『○普通の人間が吸い込んだりしたら病気になったりするんやで』
「おねぇちゃんは大丈夫なの？」
二人は温泉の湯につけ込んで乾かしたスカーフをマスクにしている。老人によると、これで瘴気をある程度は防げるらしい。
「大丈夫。私は元々、耐性があるし…このネックレスが瘴気を防い

でいるから吸い込まずにすんでるわ」
ソフィアの胸元にはクリスタルのネックレスが輝いていた。
「ふぅん。綺麗なだけじゃないんだ」
「これもそうなのか？」
ギゼルはスカーフの留め金代わりにしているクリスタルのブローチを指差した。
「そうよ。そのクリスタルはね、特別製なんだから。私の基本法術が封印してあるの。だから、そのスカーフとブローチが在る限り、瘴気にやられることは無いわよ」
ギゼルは信じられない面持ちでクリスタルのブローチを見つめている。
「じゃ浄化するからちょっと下がっててね」
二人が木陰に隠れるのを確認してから、ソフィアは左手を高くあげて呪文を唱え始めた。
「光よ。聖なる光よ。聖なる力を持って祓い賜え。ラ・レイ・ラ・ピュア・リィー」
左手から出た光の宝珠がゆっくりと漂い移動し、ぱっと弾けて光が墓地を包んだ。
うぅおぉぉをぉぅゅゅゅぅぅぅ…
光の中で亡霊らしき声があたりに響き渡り、光とともに消えていった。
「終わったの？」
「終わったわ。完全じゃないけど…」
光の宝珠が弾けたあたりを見つめながらソフィアは応えた。ギゼルとミクラは不思議な顔をして見つめあい、そして聞いた。

アコライト・ソフィア　４（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
４／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア　5（前書き）

ソフィア達の前に顕われたのは…

「完全じゃないって？　どうして？」
「それはね…」
ソフィアは二人に振り向くと微笑んで言った。
「ここは村の墓地でしょ？　ここにはいろんな人が永眠っているわ」
二人は黙って頷いた。
「その中には自分の家族や子供達を心配している想いもあるの。だから『完全』には浄化しないし、できないのよ」
二人は神妙な面持ちで墓場をじぃっと見つめている。
「さ、行くわよ」
「うん」
二人は墓場に向かって、ぺこりと頭を下げると手を繋いでソフィアの後を追った。
そして二人を見送るようにゆっくりと木の枝が揺れていた。

１０．沼の住民

昼過ぎというのに沼は靄を漂わせて音もなく佇んでいる。その靄には僅かながらも瘴気が感じられた。水面に所々に浮かぶ浮島の草も生気がない。
沼の畔、朽ち果てようとしている桟橋でソフィアは辺りを見渡している。
「なにかしら？　あの柱は？」
微かに靄の向こうに黒い柱が立っているように見えた。
『☆なんや、えらい雰囲気持ったモンやな』
『★枯れ木では、なさそうやで』
「枯れ木じゃない。俺達が子供の頃から立ってるよ。しっかし、誰が道標を弄ったんだ？　直しながら来たから、こんな時間になったじゃないか…まったく、旅人の子供の悪戯かな。おじじと明日にで

も直さないと…」
（ふふっ…もう大人のつもりなのね）
精一杯に気張っているギゼルの言葉が可笑しくてソフィアはくすりと笑った。
「何がおかしい？」　ギゼルは憮然としてソフィアを睨んだ。
「いえいえ。それにしても、この沼は深そうね」
ソフィアは水面に視線を移して底を探した。
「ここは底無し沼だよ。少し先に行くと…あの辺りから急に深くなっているんだ」
「ギゼルは溺れた事が在るもんね。よく知ってるのよ」
「うるさいぞ」
事実らしく、ミクラに毒づくギゼルの態度がソフィアの盗み笑いを誘う。
「こらこら。喧嘩しないの」
ミクラはささっとソフィアの影に隠れると、ギゼルに向かって、舌を出した。
「ここは？　涸れ川みたいだけど…」
ソフィアが指差すところには砂と砂利が森の中まで続いていた。
「おじじの話だと、教会の霊泉の水が流れていた所らしいけど」
「そう。霊泉の…かなり質のいい霊泉だったのね」
老人が子供の頃に涸れてなお、未だに草が生えてこないということが質を、そして涸れ川の幅がかなりの水量が霊泉から湧いていたらしい事を顕していた。
「さて…と、そんな霊泉が流れついていたとすれば…この沼はけっこう耐えられるわね」
ソフィアはこの沼全体を思い描いて必要な法力を考えた。
「じゃ、始めるからちょっと下がっててね」　下がったギゼルの後ろにミクラは隠れた。
（仲直りしてきたわね）
二人の位置を確認し、くすりと笑ってから、ソフィアは目を閉じ

瞑想する。そして杖を両手で水平に持ち、両の掌を合わせた。
「…はぁあぁぁぁっ！」
ソフィアが口の中でなにかしらの呪文を唱え、ゆっくりと掌を離していくと間に虹色の光の球、宝珠ができていく。
肩幅ほどの大きさになった虹色の宝珠をゆっくりと手で縮めていった。
「ふぅうぅぅ！」
両手で隠れるほどの大きさに宝珠が縮まるとソフィアは次の呪文を唱え始める。
「光よ。全ての力を聖なる力とし、邪悪と闇を退け、その力を顕し賜え。ラ・レイ・レム・ギ・ピュア・リィ」
虹色の宝珠は輝きを増すとソフィアの手を離れ、水の中に消えていった。
「終わったの？」　ギゼルとミクラは宝珠が消えていったあたりを見つめながら聞いた。
「終わったわ。正確には始まった、だけどね」
「始まった？」
「そう。さっきのは浄化の力を…霊精で固めた宝珠の中に入れたものなの。そして、これから暫くはこの池を浄化し続けるの」
「さっきみたいに、一気に片付かないのか？」
「駄目よ。そういう事すると池の水が蒸発して無くなっちゃうわ」
「そんなに凄い魔法なんだ？」
「そうよ。魔法はね、使い方を間違えたら大変な事になるのよ」
「そう。確かに大変な事になる」　不意に靄の向こうから声がした。
『★誰や？』
水草の向こうの靄の中に姿が影絵となって、ぼんやりと浮かぶ。
続けて声が響いた。怒りのこもった声で。
「どういうつもりじゃ？　こんなものを私達の世界に放り込んで？」
影の手には先程、水の中に消えていった虹色の宝珠が握られているのが見える。宝珠の光に照らされた手は…黒みがかった緑。だか、

ほっそりとした腕と細く長い指の形は美しい。その指先の爪が鋭く、長くなければ…
「お気に召さなかったようですね。ニクシーさん」　ソフィアはにっこりと微笑んで応えた。
「ニクシー？　こいつが？」　ギゼルは影を指差して叫んだ。
「こいつとは御挨拶だね」
指差された影は歩み出、靄の中から今、はっきりと姿を顕した。その姿は半透明の薄い衣を纏った美しく若い娘。さらに後ろに従うのは数名の美しい女性達。その手に握られた三叉鎗が荘厳さを奏でている。
「いや。そんなはずは。だって、俺が前に見たのは…」
「こんな姿じゃろう？」
娘達の後ろから、魚そのものの顔をした鱗だらけの体の亜人間、半魚人がひね曲がった木の杖をもって顕れた。

11．亜人類ニクシー

「きゃあぁぁ！」
悲鳴を上げ立ちつくすミクラ。ギゼルは鉈を構えて、半魚人を睨みつける。
水の中から別の半魚人達が次々と顕れ、ソフィア達を遠巻きに取り囲む。
「何々？　なんなのよ～」
「俺、俺達をど、どうする気だ？」
怯えるミクラを背に凄むギゼルの声も恐怖で震えている。
「この魔宝珠は何なんだい？　この前みたいな毒仕込みじゃあないだろうね？」
宝珠をソフィア達につき出して聞く娘の目に浮かぶ、あからさまな敵意。
「違いますわ。それにしても…」　相変らずソフィアはにこにこしている。

「それにしても？　何だい？」　娘と半魚人達は身構えた。
「ニクシーさん達って性差が激しいって聞いてましたけど、本当なんですね」
　こける半魚人。いや、ソフィア以外の全員が脱力感に襲われ、こけていた。
「今は、そういう状況じゃないだろう？」
　ギゼルとニクシーの娘はハモりながらソフィアに叫んだ。
「あら、そうだったの？」　ソフィアはきょとんとしている。
「どういう状況だと思ってたの？」　ミクラは尋ねた。
「…どうって…単なるお出迎えでしょ？　ニクシーさん達の」
　再びソフィア以外の全員が脱力感に襲われた。
「そこまで怖がらないとは…貴女、私達を知ってるの？」
「御逢いするのは初めてですわ」
「その割には無気味なまでに落ち着いてるけど？」
『◎…ソフィアはワタシと逢ってるもん』
　ソフィアの襟元からひょこっと出たウェンディを見て杖を持った半魚人は合点が行ったような面持ちとなって頷いた。
「ほほう。水の精霊とお逢いした事がお在りか」
「爺。あれは人形だぞ？」　娘は振り返って尋ねる。
「いえいえ、姫様。あれは精霊のミダル。水の精霊の移し身ですじゃで」
「ミダル？　この者がそれ程の法力を持っているのか？」
　ソフィアを振り返り見る姫の目には、まだ不審の色が浮かんでいる。
「では、この魔宝珠に封印したのは？」
　ずいっと虹色の宝珠をソフィアの方に突き出して姫は尋ねた。
「浄化です。正確には過剰浄化。ギガピュアリィと言った方が判りやすいかしら？」
「過剰浄化？　…と言うことは」
「姫様っ！　お手を放しなされ」

ひったくるようにして半魚人の爺は姫の手から宝珠を奪い取った。
「これで、一安心…ではない！　誰か腐苔を持て！」
爺の後ろに顕れた半漁人から干からびた水苔っぽい塊を受け取り、宝珠を包むようにして持ち変えた。
「うぅぅむ。間違いなく浄化の法力が宿っておる」
爺は水苔を見つめて呟いた。
宝珠を包む水苔はすくんだ灰緑色から鮮やかな青緑色に変わっていく。
「幾多の瘴気を吸い込み腐苔となった千年苔が甦りおった…。あのまま姫様が持ち続けていたらどうなっていた事やら…」
「どうなっていたのじゃ？」　姫は持っていた手を摩りながら不安げに爺に尋ねた。
「どうにもなりませんわ」　ソフィアは微笑みながら言った。
「嘘を言うなっ！　あれほどの法力ならば、何らかの影響が在るはずじゃ！」
爺は姫の前に出てソフィアを睨んだ。
「そうですねぇ…ニクシーさん達は魔法に対する耐性が人間よりは遥かに御在りですから…ちょっと若返る程度ですね」
「若返る？」　姫は持っていた手を見つめた。
黒味がかった青だった指が、透き通るような緑がかった青に変っていた。
「おぉ！」　「瘴気で御病みになられていた手が！」
「瘴気の毒素が消えている！」
半魚人達はどよめき、ソフィアの法力を、威力を理解した。
「私の浄化は他の人より強力ですから」　自慢げに言うソフィア。
「凄まじき法力の持ち主…」
半魚人達は苔を見、姫の手を見てソフィアを睨む。その目に浮かぶのは…何故か狂気の色。
「この者を贄とすれば…　我らが神が…」

アコライト・ソフィア　５（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
５／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア　6（前書き）

亜人類ニクシー達はソフィアに…

アコライト・ソフィア　6

「甦るかもしれん…いや、甦る…　さすれば、この瘴気も、この前の毒も…」
半魚人達はソフィア達を取り囲む輪をじりじりと縮め始めた。
「あらあら。仇で返す気かしら？」
相も変わらずソフィアはにこにこしていた。杖を握る手には力が増していたが。
「皆の者、控えい！　この者はわらわと話をしているのじゃぞ」
姫の号令にたじろぐ半魚人もいたが狂気に執りつかれた者は歩みを止めなかった。
『★アタイの力、見せたげようか？』
ソフィアの髪に隠れていたサーラがぴょんと肩に乗って微笑んだ。
「焔の精霊のミダル！」　爺の声に、にじり寄る半魚人達は一斉に後退りする。
『★焔よ。我らが盾となり、灼熱の壁となれ。ヴァン・ウォール・ヴェル』
詠唱と同時に、ソフィアの周りに顕れた焔が唸りを上げて壁となり、襲いかかっていった

12．絶対防御

「あ、熱ちぃぃぃぃ」　半魚人達は一斉に沼に飛び込み逃げた。
その後を追うように焔の壁は広がり…中からの風にかき消された。
『☆まったく、サーラは短気なんだから』
『〇ウチらが防御結界を張らんでたらミクラちゃんとギゼルくんが黒焦げやんか』
『★あ…忘れてた』　ばしっ
人形達のお決まりの突っ込みをサーラが受けていた傍らでギゼルとミクラは石膏像のように白く固まっていた。

『〇どや。ウチの防熱専用コーティングは』
『★…んでも、あのままじゃ二人とも呼吸でけんとちゃう？』
『〇あ、そか』　ばししっ！　今度はノーラがお約束に叩かれた。
ソフィアが二人の頭をここんと叩くと二人の体から石灰がぼろぼろと落ちた。
「ごめんね。痛かった？」　二人を気遣うソフィアには何の変化も無い。
「な、何が起こったの？」
「サーラが焔の壁を作ったの。それでミクラちゃん達を熱から守るためにアェリィとノーラが防御してくれたのよ」
自分の体や服についた石灰を叩き落としながらギゼルはソフィアに聞いた。
「石灰で熱を？　でも、姉ちゃんには何もついてないけど平気なのか？」
「大丈夫。この子達の大抵の魔法攻撃はわたしには効かないの」
きょとんとしている二人に負けずに半魚人達もきょとんとしている。
あれほどの焔の中で火傷一つとしていない。それどころか服にすら焦げ跡がない。半魚人達には信じられない事だった。
「…絶対魔法防御」　爺さん半魚人は頭を水から出して呟いた。
「聞いた事が在る。白魔法を極めた者には一切の魔法攻撃は通用しないと…」
「御主、白魔法使いの聖者か？」
姫はソフィアを指差し詰問した。焔の熱で焦げてチリヂリになった髪が痛々しくも…ちょっとだけ笑いを誘う姿に変貌していたが威厳だけは顕れた時のままだった。
「いいえ。私はアコライトのソフィア・フレイア。まだ修行中の見習い僧ですわ」
「修行僧？　それほどの法力を持ち、絶対魔法防御を習得してもか？」

姫の疑問は当然だろう。目の当たりにした法力と見習い僧という僧位には差がありすぎる。
「いいえ。私の魔法防御は絶対というほどでは。それより、そろそろ名乗っていただいてもよろしいと思いますけど？」
にっこりと笑いながらもある種の攻撃的な気配を漂わせて問い掛けるソフィアに、たじっと下がって姫は名乗った。
「わ、我が名はヌーラ」
「我らの姫様ですじゃ。わしはネゼと申す」
半魚人は水から上がり、ソフィアに平伏した。
「すみませぬ。過日、心無き術者に毒が封印された魔宝珠を数度、放り込まれたばかりに。いや、何を言おうと後の言い訳。誠に相済みませぬ」
「なんか、生贄とか言ってたみたいだけど？」
ミクラの指摘に姫と爺は暫く顔を見会わせ、静かに語り始めた。

13．伝説の沼

「この沼の真ん中に立っているあの柱。あれはヒュドラの牙と呼ばれております…」
ネゼが語るそれは土着の神話といった方が判りやすかった。
天地創造から始まり、この沼の由来、人間との出会い、訣別までを延々と語った。
「…要するに、貴方達の守り神がヒュドラとスキュラという訳ね」
「そうですじゃ」
「で、ヒュドラが甦る時にスキュラが顕れ、貴方達を約束の地に連れていくと…」
「そのとおりですじゃ！」
なんとなく…最近の巷で流行の新興宗教の影響が在るような気がするのは気のせいだろうか？
「今までは生贄をささげると必ず吉祥が顕れたと…」
「それが、ここ数年は何も顕れず…過日の毒の所為で生贄も居なく

なり…」
「違う生贄が必要かと相談していた所じゃ」
「今まではどんな生贄を？」　ソフィア達はちょっと身構えて尋ねた。
「大口魚とか角イタチとか…」
口ごもりながら応えたネゼの言葉にソフィアはほっとして、のほほんとした口調で確認した。
「つまり…私はイタチの代りだったという訳ね」
「…誠に相済みませぬ」
平伏するネゼを余所にソフィアは菱羊羹を一口食べ、苔茶を啜り、考えていた。
数多く居た半魚人達は沼の中に引き下がって、桟橋の上にはヌーラとネゼだけが残りソフィア達と御茶会を開いていた。
だが、ギゼルとミクラはニクシーが用意した御茶と御茶菓子、苔茶と菱羊羹には手をつけずにいた。流石に気味が悪いらしい。
「それにしても…」　ソフィアはヒュドラの牙を見つめながら呟いた。
「それにしても？」　一同は身を乗り出して聞き返した。
「この御茶。美味し～わね」
こけるギゼルとミクラとネゼ。
「そうでしょ？　ここの霊泉の流れの中で十年かけて育った茶苔を煎って作った苔茶だもの。この御茶を飲むとね、三年は寿命が延びるわよ。瘴気も吹き飛ばすんだから」
ヌーラがきゃぴきゃぴと応えた。
彼女も（彼らの年齢では）年頃の娘らしい。話の中身は年寄りじみていたが。
「姫様！　お茶会の最中とはいえ少しは威厳を持って…」
「うるさいわねっ！　爺。今はお茶会、さらに謝罪するのに威厳は必要ないでしょ？」
「…謝罪していない気もする」

ミクラの呟きにギゼルと人形達は深く頷いた。その指摘にネゼは焦って言い返した。
「で、ですから、この残り少なき茶や菓子を我らが貯えも尽きようとしているのをこうやって其方達に」
「なんか、恩着せがましいし…」　ミクラの呟きに再びギゼルと人形達は大きく頷いた。
「わかった」　ヌーラは鋭い視線に戻り、立ち上がると池に向かって叫んだ。
「誰か！　誰か居らぬか？」　「ネダがここに」
水草の影から一人の半魚人が顕れ、片手を胸にあて、近くの浮島に跪いた。
「水糸を持てい」　姫の言葉を聞いたネゼは何故か慌てて、姫の言葉を諌めようとした。
「水糸を？　なりませぬ。あれは姫様が作らねばならぬ大事な…」
「うるさいぞ。爺。このまま瘴気が晴れぬと子づくりも在るまいが！」
『☆なんや、話が見えないんやけど？』
アェリィが尋ねるとヌーラが自分の衣を指差して言った。
「この衣は我が母が作った物。そして、わらわもまた、我が娘に衣を作ってやらねばならぬのじゃ。水糸はこの衣を紡ぐ糸。我が一族の女王の証でもある水衣の材料じゃ」
ヌーラは刺すような視線でソフィアを見つめた。
「瘴気が晴れねば、我らは生きていく事ができぬ。現に瘴気は沼の中に溶け込み、我らの生活の場を侵しつつある。このままでは我らは滅びゆくしか道が無い…」
爺は項垂れ、言葉を続けた。
「この近くには沼や川は無い。この沼に流れ込むあの川も涸れ果て周りは尾根ばかり。この沼から流れ出る流れも最早、無い。水底から湧く水も次第に少なくなるばかり…。ここしか我らが生きていく場所は無いというのに…」

「姫様。水糸をこれに」　先程の半魚人が顕れ、ヌーラに糸束を渡すと水面に消えた。
「こんな物ですまぬが、謝罪の印として受け取ってもらえぬか」
ヌーラが差し出す糸束は透き通って静かに波紋のように蒼く光っていた。

14．ニクシーの依頼

「そんな大切な物は受け取れませんわ」　差し出す糸束をソフィアは断った。
「そもそも瘴気祓いの仕事を依頼されてした事ですから。誤解で受けた仕打ちの謝罪だとしても、そのような大切な物を受け取る訳には…」
「えっ！　では、瘴気を祓ってくれるのか？」　ネダはずいっとソフィアに近づき確認した。
「えっ？　…ええ、こちらの二人のお爺様から依頼を受けていますの」
ヌーラとネゼは顔を合わせ、そして声を合わせて聞いた。
「では、先程の魔宝珠は？」
「その依頼のために沼の瘴気を祓うために作った物ですわ」
「では、尚更に受け取っていただくわ」
「はい？　どうしてですか？」
「この糸はな、沼の綺麗な水を使って作るのじゃからして、瘴気が無くなれば…」
「それこそ」
「いくらでも」
「直ぐにでも」
「作る事が」
「できるのじゃ」
二人は笑顔で交互に言いながらソフィアに詰め寄った。
『◎…すぐって…どのくらいで作れるの？』

「そうさな。一月でこの両手の長さ程かのう」
『☆なんか表現と合ってないような…』
「じゃが、ワシ等の姫様はもっと早く作れるのじゃ」
『★どのぐらい？』
「半月で片手程じゃて」　その言葉にちょっとだけ考えてからノーラが指摘した。
『〇それって、同じじゃないの？』
「細かい事を気にしては…いかん」
　それでも威厳を保ちながら爺が言い返す。姫はそんな事はどうでもいいと言わんばかりに笑顔でソフィアに詰め寄る。
「そうそう。だから受け取ってね」
「でも、ギルドの規則で同じ依頼を受けることは禁じられて…」
「では、別な依頼ならばいいのじゃな？」　断るソフィアにヌーラが確認した。
「えっ？　…ええ」
「では、この霊泉の流れを復活させてくれい。この水糸はその手付。成功報酬は水衣じゃ。よいか？」
「そ、それは…」

アコライト・ソフィア　６（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
６／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア　7（前書き）

ソフィアは森の中で……

にこやかに、しかし、かなりの迫力で詰め寄るヌーラにソフィアはたじろいだ。
「いいのじゃな？」
「…は、はい。判りました」
『☆あ、受けちゃった』
「何か、文句が在るのか？　そこなミダル」
ギロリと睨むヌーラにアェリィはソフィアの後ろに隠れて言った。
『☆ギルドの規則で同時に二つの依頼を受けることはできないんだもの』
「そうなのか？」　問い質すヌーラにソフィアは無言で頷いた。
「うぅぅむ。いや、問題無い！」
ヌーラは何故か自信たっぷりに威張りながら言った。
『★なんでや？』
「そのギルドとは人間達の組織の規則だろう？」
「…え？　ええ」
「わらわ達は亜人類じゃからして人間ではない。従って、規則には違反していない！」
きっぱりと言い放つヌーラに気圧されてソフィアは覚悟を決めた。
「判りました。依頼を御受け致しますわ」
ソフィアとヌーラは固く握手した。その様子を浮島の影からネダが盗み見て、小さく舌打ちをし、そして静かに水面に消えていった。

１５．宿の部屋
『☆ほんまにええんか？』
「何がぁ～？」
『★依頼や。同時に二つ受けられないんはギルドの基本やで』
「そだねぃ～」

『〇確か同じ仕事を二人から受けたらあかんのと同じ理由やったよね。それ』
「そうそう」
『◎…どっちも最初の依頼者を裏切る事になりかねないからだよね』
「そうそう」
『☆…手紙の最後に書く言葉は？』
「草々」
ばきっ！
「痛い～。何で叩くのよぉ～？」
『★布団から出でちゃんと話を聞き！』
あの後、ソフィア達は宿に戻り、疲れを取ることにした。実際にはソフィアはさほど疲れていなかったが、ギゼルとミクラは慣れない体験をしたせいか、疲れたようで夕飯をすませると二人は直ぐに寝付いてしまった。
そしてソフィア達は離れの部屋で今までの情報を整理しようとしてた。
「だって、お布団気持ちいいんだもの」
ひょいと頭を布団から出して幸せそうな顔でソフィアは言った。
「ノランさんが干してくれたのね。日向の匂いが心地いいの～」
『★そないに気持ちええんやったら、布団で服作り！』
「あ、それいいわね」
真顔でソフィアは納得してしまった。
『☆…おいおい』
「さて、少し整理しましょうか」
座り直すとソフィアは真剣な面持ちで話し始めた。
「まず、最初は竜の退治の依頼だった」
『★ギルドでの依頼やね』
「ところが依頼者に会ってみると瘴気祓いが依頼内容だった」
『☆ここの爺さんの依頼はそうやったな』
『〇そしてニクシーに霊泉の復活を依頼された』

『◎…それはなんか、どうでもいいみたいだけど』
「まぁね。この水糸を渡す理由だったものね。でも依頼は依頼よ」
ソフィアはまじめな顔で言った。
『☆まじめな顔をしても似合わんで』
「なんで？」
『★布団を頭巾にして被ったままじゃ、説得力あらへんもん』
「…そかな？」
『○ないなぁ』
人形達は深く頷き返す。
『☆で、どないするん？』
「どうもこうもないわ。瘴気を祓って、竜を（居たら）退治して、霊泉を復活させる（努力をする）。それで全部ＯＫよ」
『★心の中は判らんようにした方がええで』
「あ、判った？」
『○ま、ウチらは心で話してるから判らん方がおかしいけどな』
「とにかくやらなきゃならないのは瘴気祓いよね」
『☆実際、瘴気は在るしな』
「そうそう。じゃ、明日は帰らずの森に行ってみましょ」
『◎…二人は連れていくん？』
「ギゼルとミクラちゃんは置いて来ましょ。なんかあったら悪いし、御老人とかも…道標を直したりするのにお忙しいようだし。明日は私達だけで行きましょ」
『○そやね。そのほうがいいかも…』
『☆しっかし、誰が道標をいじったりしたんかなぁ』
『★それで、昨夜は来るんが遅うなったんやしな』
「いいじゃない。誰でも。迷っても辿り着いたんだし。じゃ、そろそろ寝ましょ」
その深夜。音もなくソフィア達の部屋の戸が開くと、透き通った布で包まれた手が杖を掴み、そして闇の中に消えていった。

１６．帰らずの森

鬱蒼とした森の中は薄暗く、射し込む木漏れ日が岩と苔の地面を眩しく照らす。

『☆杖、何処いったんやろ？』

「…さぁねぇ」

『★ノランさんは何処にいったんやろね？』

「ん～。町に買物にでも行ったんじゃない？」

『〇ソフィア？』　「なぁに？」

『☆素直に事実を認めへん？』

「認めてるよ。杖が無くなった。ノランさんが誰にも行く先を告げずに居なくなった」

『★つまり？』

「誰かが杖を持っていった。ノランさんは何処かに行った」

『〇…おいおい』

『☆ノランさんが持っていったとは考えへんの？』

「考えたくないなぁ」

『★なんでやねん？』

「帰順の呪文で呼び戻す事ができないものね」

『☆持ってたら、ノランさんも呼び戻す事になるからいいやん』

「帰順の呪文の対象は杖になるもの。だめよ。杖を離していたらいいけど呪文を唱えたときに持っていたら一緒に空を飛ぶ事になるのよ？」

『★そか。慌てたりして手を離したら空から落とされる事になるな』

「杖は大丈夫だろけどねぇ」

『☆アタシ達も大丈夫やけどなぁ』

「ノランさんは普通の人間だからねぇ」

『◎…ソフィアは大丈夫だよねぇ？』

「そうそう。私は普通じゃないから…って、何、言わすの！」

『◎…ひぃ。ソフィア怖い』

背中の袋鞄に隠れるウェンディを睨みながらソフィアは立ち止ま

った。
　既に森の中を彷徨い歩いて数時間。教会の霊泉とは別の涸れ川の痕を頼りに森の中に入り歩いていたのだが、幾度が涸れ川の跡が分かれては消えていたり尾根にぶつかったりして森の中にあるという帰らずの泉に辿り着く事は無かった。森の地面は緩やかな斜面では在ったが、それでも少し汗をかき、足は疲れ始めていた。
「ほんとに帰らずの森ね」
　ソフィアは倒れた大木に腰掛け、汗を拭いながら周りを見渡す。草や苔の間に覗く岩は磁結晶と霊結晶が混じっているらしく、時に青白く、時に赤黒く輝いている。
「方位磁石も効かないし、帰還の呪文も効くかどうか判らないわね」
『〇この森自体が結界みたいになってるで』
「確かに。ま、それでも見つけられないという泉を見つけましょうか」
『☆どないして？』
「こうして」
　ソフィアは両手を合わせると、眉間からゆっくりと胸元に持っていき小さく呪文を唱え、両手を離した。
「ウィスプよ。森の霊精よ。我らを泉に導きたまえ」
　両手の間から小さな光がふわふわと浮き出し、そしてソフィアの周りを数回廻ると森の奥に向かってふわふわと移動し始めた。
「さて、付いていきましょ」
『★なるほどトレーサの術を使うんか』
「そそ。ここの樹々の霊精ならば道を間違える事は無いわ」
『☆さすがやん』
「へへ」
『◎…ソフィア』
「なぁに？」
『◎…ウィスプ、先に行って…見えなくなったよ』
「えっ？あ、本当だ。ちょっと待てぇ！」

ソフィア達は慌ててウィスプの後を追いかけた。
『★…必ずオチが在るな』

17．森の泉

ウィスプがふわりと消えた所は小さな泉だった。周りを巨木に囲まれ、一跳びで越えられそうな小さな泉。しかし、何やら近づき難い雰囲気を持っていた。
「ここの泉は、霊気を持っているわ」
『☆ほんまや、瘴気やのうて神気に近いで』
『〇この周りの木もずいぶんと威厳を持っているし』
『★ここが帰らずの泉なんやろか？』
ソフィアは泉に近づき、片手で水を掬った。
「冷たぁ～。でも、心地いいわ。たぶん…村の霊泉と同じ水脈ね」
一方が枯れてもう一方が残っていると言うことは…
（やはり村の霊泉には何かが…）
しかし、そういう事をして何の役に立つのだろう？
『☆なあ、ここの水が瘴気の原因？』
「違うわよ。むしろ瘴気祓いに使えるわ」
『〇なんや、瘴気の元とちゃうんかぁ』
『違うわよ』
不意に…遥か頭上から声がした。
『★誰や？』
『貴方は焔の精のミダルね。また、この森を燃やしに来たの？』
『★なんやて？』　『☆そんなことはせぇへんがな』
『ふぅん。風の精のミダルをも連れているなんて……』
声は頭上で響き続ける。明らかな殺意を伝える旋律で…
『★声はすれども姿は見えずを気取ってるんかぁ？　ええかげん姿を見せぇや』
『焔の精に風の精のミダル…今度は跡形もなく燃やすつもり？』
「私はアコライトのソフィア。ソフィア・フレイア。どちら様です

？」
『ふふん。人間。今度はこの前みたいには行かないよ…ワタシがこの森を護るんだっ！』
声が終わると同時に尖った木の枝が頭上から降り注いだ。
「きゃあっ！」　『★御望みどおり燃やしたるわぁ！』
サーラの手から焔が湧きだし、枝を一瞬に燃やしつくした。
『ふん。かなりの腕前なんだね。じゃあ、これはどうだっ！？』
再び降り注ぐ木の枝。
『☆さっきより太いで』　『★まかしとき！』
サーラが作り出した焔は枝を包み込んだ。が、今度は燃え尽きずに襲い来る。
『★なんやて？』
『百竈の枝で作った槍だっ！　そう簡単には燃えつきはしないわっ！』
『〇ジュエル・ウォール！』
ノーラが叫ぶとソフィア達を包むように地中から極彩色の結晶が飛び出す。木の槍は極彩色の壁にぶつかり、壁ごと四散した。

アコライト・ソフィア　７（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
７／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア　8（前書き）

ソフィアを襲ったのは……精霊

『〇防御はまかしときや』
ノーラは両手両足を踏ん張り構えている。
『土の精霊？　土の精霊を呼び出し、力を使うのならば風の精霊の力は使えない…召喚できないだろう？　…ならばこれはどうだ？』
四方からツタがヘビのように迫ってきた。
『★な、何や？』
『〇ジュエル・ウォールっ！』
たちまちそびえ立つ極彩色の壁。しかし、ツタはそれに巻き付くと一瞬にして破壊した。締め付けられる寸前に辛うじて逃げ出すソフィア達。
『◎きゃあぁ』
『★あかん！　ウェンディが捕まった！』
『☆ウィン・ブレイド』
アェリィが繰り出し投げつける白い円盤。円盤に触れた途端、ツタはばらばらに千切れた。放り出されたウェンディをソフィアは慌てて受け取る。
『☆特大のカマイタチやで。どうや、この切れ味』
『なに！　風の精霊の力？　土の精霊とは同時に力は使えないはず？　…おのれぇ』
上空から投げ落とされる木の槍と四方から迫るヘビのようなツタ。それらを攻撃し防ぐサーラ、アェリィ、ノーラ。
ウェンディとソフィアはどうした？

１８．木の精霊

ノーラ達の攻防の傍らでソフィアとウェンディは頭上の敵を探していた。
『◎…ソフィア。水糸、貸して』　「どうするの？」

ソフィアから水糸を受け取ったウェンディは水糸を輪にして頭上に投げた。
『◎…ん。捕まえた』　ぐぃっと水糸の端を引っ張ると上から落ちてくる人影。
『きゃあああああぁぁぁぁ』　どさりと落ちたのは緑色の髪の少女。
『いたた…』
腰を打ったらしく両手で腰を摩る少女。その左顔から左肩にかけて酷い火傷の痕があった。
『☆…なんや、何で火傷を？』　『★アタシの術は木槍にしか使こうてないで』
言われて左顔を片手で隠す少女。
「あらら。怪我してない？」　駆けつけたソフィアは無防備に少女に近づいた。
『☆ソフィア！　敵やで。そいつは！』
「そうとは限んないでしょ。それに怪我人を癒すのは白魔法使いの義務よ」
『義務のために死を受けとってみる？』
ソフィアの喉元に尖った枝を突きつける緑色の髪の少女。
凍りつく時間。
「貴方は私達を殺すつもりは無いのでしょう？　先程の攻撃だって本当の殺気を感じる事は無かったわ」
『…今はどうか判らないでしょ？』
少女は突きつけた枝を強く握り締め、枝を引き、衝こうとした。が、その瞬間、枝は一瞬に風に千切れて燃え尽きて灰になった。
『★☆自分の立ち位置が判らんらしいな』
『○…あんた、ドリァード。樹の精霊やな』
成す術を総て防がれて、今はただ俯くだけの緑髪の少女は小さく頷いた。
「うん。怪我は無いわよ」　ぽんと頭を叩いてソフィアは言った。
「でも酷い火傷ね。ちゃんと治療しなかったんでしょ？」

少女はそっぽを向いている。その顔を両手で包み、ソフィアは優しく言った。
「女の子はね、顔は大事にしないとね」
『…ふん』
ソフィアの右手にざらりとした肌の感触が伝わっている。
（このままじゃ壊死してしまうわ…ね）
幾つかの術を思い浮べ、精霊にも効きそうな治癒の術を選び出す。
「じゃね、目を瞑っててね」
ソフィアの右手がポォと静かに輝き、火傷の痕をゆっくりと光が動いていく。
「…はい。終わったわ。女の子だものね。何といっても顔の方を癒さないとね。まだ完全じゃないけど、ちょっと時間が経ったら消えるわよ。首から腕の方はもうちょっと時間がかかるけど、それも何れ消えるわ」
少女は指で頬の火傷の痕を探したが、つるりとした肌の感触だけが指先に在った。
『…消えた。癒ったの？』
「ええ。ちゃんと消えたわよ。ほら」
ソフィアが差し出す鏡で自分の顔を見て驚く。
『消えた。癒ったんだ…』
鏡の中の顔は美しく火傷の痕は一つもなかった。思わず微笑んでしまう。が、ふとソフィアと人形達を振り返り見て再び塞ぎ込んだ。自分が攻撃した事がまったくの間違いだという事が彼女の表情を止めてしまった。
強張る少女に微笑みながらソフィアは尋ねた。
「私はソフィア・フレイア。職業はアコライト。貴方のお名前は？」
にっこりと笑っているソフィアからぷいっと顔を背けて少女は黙り込む。
『☆あ…』
『★悪いことは言わんから応えた方がええで』

青ざめたアェリィとサーラを不思議な顔で見つめる緑髪の少女にノーラが後退りしながら忠告した。
『〇…え、ええから。さっさと応えた方がええで』
ふと異様な雰囲気を背後に感じて振り返ると、そこには蟀谷をヒクつかせながらも笑っているソフィアが居た。
「相手が名乗ったら自分も名乗るようにと礼儀を教わらなかったかしら？」
不必要なまでに力が入っている指先からはパチッと火花が跳んでいる。ソフィアの有り余る法力が感情の高まりで溢れだし火花を跳ばしていた。
「名乗る気は無いようね？」
『☆ち、違うて、ソフィア。単に怯えて声が出ないだけ…』
人形達はいつの間にか大木の影に隠れている。緑髪の少女は…本当に怯えて、声が出ずにいた。
「勘違いと間違いは誰にでも在るからさっき攻撃してきたのはちょっと置いておくけど、最低限の挨拶はわきまえる物と教わらなかったかしら？」
にこやかに額の端をヒクつかせながらソフィアの髪が逆立ち…法力をパチバチと放出している。まるで雷の精霊の如く…
『★さ、さっさと応えって。い、今は法力が溢れかえっている状態なんやで。それに礼儀には小うるさい…いや、厳しいんやから。ソフィアは』
今は人形達の忠告を素直に理解した緑髪の少女だったが、怯えて声が出ない。
「さぁ。お名前は？」
『その子の名前はキーファ。まだ子供ですので無礼をお許しください』
振り返ると木陰から長い緑髪の麗人が顕れ、一礼した。
『私の名はアィヒェ。御初にお目にかかります。アコライトのソフィア・フレイア様』

ゆっくりと頭を上げソフィアを見つめる目は静かに緑碧く輝いていた。

１９．精霊の記憶

キーファはそそくさとソフィアの元を離れるとアィヒェの後ろに隠れた。

「貴方は…いえ、貴方とその子はドリァードですね？」

『はい。私は其処の樫の木。この子は横の松の木の精霊ですわ』

アィヒェが指差したのは泉の側の大木とその傍らに在る松の木だった。

『この子はさっきの大火事で燃えそうになったものですから、過敏に応対してしまったようです』

確かに松の木の片側には焼け焦げた痕が在った。

「さっきの大火事？」

『ええ。ほんの5年前の大火事ですけど』

ソフィア達は軽い脱力感に襲われた。

『★5年前が「さっき」か？』

『☆木の精霊やから時間の感覚が違うんやろ』

人形達のぼやきを余所にソフィアは尋ねた。

「ところで先程、人間達が火事を起こしたように言ってましたけど？」

『★せや、今度は焔の精霊を連れて来たとか言ってたな』

皆の視線がキーファに集まった。

『な、なによ。貴方達があのときの人間と無関係だという証拠も無いんでしょ？』

開き直るキーファにアィヒェが無表情のままに諭した。

『キーファ。いい加減にしなさい。この方達が先日の人達と違うのは…もう判っているんでしょう？』

『…うん』　キーファは下を向いたまま頷いた。

『さぁ、キーファ、説明しなさい。そして謝罪するのです。ね？』

こくんと再び頷いてキーファは話し始めた。

その日は霧が深く、人間達が森に入ってきたのも近くになるまで気がつかなかった。

（…木こりかしら？）

実際、以前にも何人かの木こりがこの泉を訪れたが、泉の神気を感じたのか、この辺りの木に斧を入れることもなく立ち去るばかりだったのでキーファは警戒せずに物珍しげに見ていた。

（なんだろ？　斧じゃなくて赤い岩を持って…村の人も居るけど違う人もいる）

人間達は話しながら岩をあちこちに置いていった。もちろん泉の近くにも…

そのうち何故か人間達は言争いを始めた。キーファの耳には全ての言葉が届かなかったので良くは判らなかったが、どうやら赤い岩の数が足りないらしい。

人間達は結局、言争いながら戻っていった。

そしてキーファは赤い岩がなんなのかを知りたくて近づいて…触れた途端に石から焔が吹き出したのだった。

「その岩は焔を封じ込めた魔岩だったのね」

こくんと頷くキーファの髪を撫でながらアィヒェは話を続けた。

『この子が火傷をした時は本当に吃驚しましたわ。私達の治療といえば時の流れるままに任せる事だけですから』

「それで、その魔岩はどうされたのです？」

『ほとんどの岩はこの奥の竜の洞窟に投げ込みました』

「竜の洞窟？」

『ええ。そうは言っても、ここ暫くは…人間達の感覚に直しますと百数十年は竜は棲んでませんけどね』

「そうですか…投げ込んだ魔岩は全部じゃないんですか？」

『一部はこの子が…』

『だって、あの人間達はこの森を燃やそうとしたんだよ！』
キーファは涙ながらに訴えるように叫んだ。

アコライト・ソフィア　８（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
８／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア　9（前書き）

精霊達から貰ったモノは…

『でも復讐することは無かったわ』
「復讐？」
『ええ。この子は魔岩をその人間の家に投げつけたんです』
『…だって』
「その家って？」
『領主とかいう人の家だよ』
「それが大火の原因…？」
『違うわ。だって、魔岩を返したのは大火の前の日だもの』
「前の日？」
『それに投げつけたのは私が触れて壊れた魔岩の欠片だもの。火事だって村人達が直ぐに消してたから小火で終わったわ』
「それが前の日なのね…」
ならば、大火の原因は何だろうか？
『人間なんて私達を切り倒すんだから、居なくなっちゃえばいいのよ！』
『…それは違うぞ。キーファ』
後ろの方から別の声。振り返ると木の杖をついた老婆が居た。

２０．先代のアィヒェ

「どちら様ですか？」
ソフィアが問かけるのと前後してアィヒェが老婆に挨拶した。
『アィヒェ様。御久しぶりです』
「え？　アィヒェさんとアィヒェさん？」
『「アィヒェ」の名はアンタに譲ったはずだよアィヒェ。今はお婆とでもお呼びよ』
老婆は近くの岩に腰掛けると杖によりかかってソフィアを見て目を細めた。

『輝かしいばかりの法力、生命力だね。お嬢さん。まったく年寄りには羨ましい限りじゃ』
『違うってどういう事？』
老婆に口を尖らせてキーファが尋ねた。
老婆はキーファをじろりと一瞥して言った。
『人間共は確かにワシ等を命在るうちに切り倒す。だが、それはワシ等の為になる。知って居るじゃろ。人間は倒した跡にワシ等の子供達を植え、育ててくれる。それはもう自分の子供のようにな。ワシのように倒れ朽ち果てて仲間の糧となるも、人間に切り倒されて子供達を育ててもらうのも大差は在るまい？』
『でも…』
『…他の場所では根こそぎ切り取られ跡は荒れ地に成った所も在る。実際、ワシの娘の一人もそういう仕打ちを受けた。ところが、ここの木こり達はどうじゃ？　一本一本、天寿を見極めて刈ってゆく。そして跡には必ず子供達を植えて育ててくれる。ならば、ここの木こり達に何の恨みが在ろうものぞ』
『……』
『キーファ。お前は若くして精霊となった。ここの神泉の御影じゃろう。だがな、感情に任せて他の生き物の世界に干渉してはならん。よいな？』
キーファは静かに頷いた。歳を積み重ねた言葉の重みには反論できないようだった。
「ところで…お婆さんはどちらの木なのです？」
老婆は、ほっほっほっと軽く笑い、杖でソフィア達が来た方を指した。
『この森の半ばで御前さん方が腰掛けた木が在ったろう？　あの倒木がワシじゃよ』
「えっ！　それは失礼しました」
深々と頭を下げるソフィアを手を振りとめて老婆は言葉を続けた。
『なぁに、腰掛けてくれた時にその溢れんばかりの生命力を少しば

かり貰った。御陰でワシは久しぶりに此処までこれた。それに人間の手で植えられてからこの歳になるまで切られた後なんになるかを楽しみにしていたんじゃ。使ってくれてありがとよ』
『楽しみになさってたんですか？』
『そうじゃ、アィヒェ。柱になって人間の家庭というやつを見守るも良し。家具になって色んな物を仕舞われるも良し。水車の軸になって水の力を人間の力とするも良し。全ては時の流るるままじゃよ』
『私は切られる事は怖いです』
『ほほほ。アィヒェ、お前は実生の木じゃからして人間が怖いんじゃろ？　だがな、考えてごらんよ。ワシ等は生きている間は色んな生き物に恵みを与え、そして恵みを受けている。それが刈られた後も続くのじゃ。それだけの事じゃよ』
　にこにこと笑う老婆はふと寂しそうに目を閉じた。
『ところが、背高を自慢してたワシじゃが、それがいかんかったのう。瘴気を吸いすぎて…あの様じゃ。育ちすぎた体が災いして他の若木を巻き込んで倒れてしもうた。長生きし過ぎたのう』
「そんな。寂しい事を」
『ま、長生きした御陰で御主に会えた。禍福は昼夜の如くじゃのう』
　ソフィアは心に風が吹きぬけたような感じがした。老婆の言葉にはそんな清涼感が感じられた。
　笑顔から真剣な顔でソフィアに向き直り老婆は頼んだ。
『ところで御主に頼みが在る。この瘴気をどうにかしておくれでないかぇ。ワシが倒れたのは寿命としても他の木達も萎れたり、枯れたりしておる。このままじゃ森が滅んでしまう。なんとか、この瘴気を祓って欲しいのじゃ』
　ソフィアはにこりと笑いながら応えた。
「その事ならば既に村の御老人に頼まれました。それで瘴気の元を探しているのです」
『そうか。ならば重ねて頼むのは御主達の世界では迷惑な事じゃったのう』

「ギルドの事を御存じなのですか？」
ソフィアはちょっとだけ吃驚していた。
『ほっほっほっ。ギルドは元々、日雇いの仕事を仲介していたんじゃよ。刈入れとか山仕事とかのな。そうじゃのう。ならばワシ等に聞きたい事は無いかの。人間達が滅多に立ち入らぬ森の中と近くの事しか判らぬが、それしか御主の役に立つ事は無さそうじゃ』
「では、遠慮なく」
老婆の傍らの石に腰掛けてソフィア達はゆっくりと尋ねた。

２１．護符

依頼されたことに関連する疑問…瘴気の原因となる事に対しての情報は得ることはできなかったが、この周辺の地理と歴史についてはかなりの情報を得る事ができた。竜の洞窟は東の尾根。そして西の尾根に村人もあまり知らないという腐泥の池がある事を知った。
『あの池の近くに洞穴がある。以前は硫黄の風を吹き出していたが、近ごろは収まった様じゃのう』
『★近ごろってどのぐらい？』
『七年ぐらいじゃよ。焔のミダル』
「竜は見かけませんでしたか？」
『さて。倒れる前はよく見たが、倒れてからは空はちょっとしか見えんでのう』
「そうですか」
ソフィアは暫く考えた。
（二匹の竜のどちらもノーラの言う通りにこの近くには棲んでいないのかしら？　それとも瘴気のせいで誰も空を見なくなっているからかしら？）
『さて、質問は終わりかの？』
「ええ。お疲れ様でした」
ソフィアを老婆は涼しげに見ていたが、ふと思い出したようにアィヒェに声を掛けた。

『そうじゃ。昨秋はめずらしく碧玉胡桃が多くの実をつけたと言っておったのう』
『ええ。瘴気が多くなってからはあまり実をつけませんでしたが十個ほど生りました。あ…でも…そうですね』
アィヒェは老婆が言わんとしている事が判ったらしく、ゆっくりと神泉に近づき、泉の中から綺麗な緑色に輝く実を拾い上げた。
『瘴気にやられてはいけないと思い、泉に沈めておりました。どうぞこれを御持ちになってください』
差出された木の実からは眩いばかりの力を…生命力を感じる。
『この実はの、人間が食べると七年は長生きするそうじゃ。実際、一個食べると三日は何も食べんでも平気じゃそうな。旅を続ける御主には必要な物じゃろう。持って御行きなされ』
差し出すアィヒェを両手で制しながらソフィアは後退りした。
「そんな。それ程の事をしていただくことは何も…」
老婆はアィヒェの手からから半分の実を手に取りソフィアに近寄り実を勧める。
『いやいや。瘴気を祓ってくれるのじゃろう？　ならばこのぐらい…』
ソフィアとアィヒェと老婆の間で緑色に輝く実が進める言葉と断る言葉と共に行き来しはじめた。
『☆なんや、ニクシーの時と同じパターンになってきたな』
『★そんだけ瘴気が鬱陶しいんやろなぁ』
人形達が呆れている間も木の実は三人の間を行き来していた。
「それではこうしましょ」
ソフィアは地面に枝で護符を描き始めた。
『なんじゃ？　その護符紋様は？』
円の中に七星と文呪紋様の護符を描きながらソフィアは応えた。
「これは聖痕紋様の護符。瘴気除けになります」
『なんと！　これで瘴気が防げるのか？』
「完全には防げませんが、幾分かは防げるはずです。魔法の焔…魔

岩の焔も少しは…」
『便利なのですね』
「そのかわり、あまり力は在りません」
感心するアィヒェにソフィアは一言だけ断った。
『よいよい。力のある護符は掲げ持つ者の命を削ってしまうからの』
「さすがによく御存じですね。さぁ、できました。この護符紋様をそれぞれの木の大枝の一番高い所の葉に…そうですね、一つか二つ写し取ってくだされば充分でしょう」
『コレで森が護れるの？』
「そうよ。でも枝の力が弱まったら、無理せずにその葉を落としてね。そして別の枝の葉に紋様を写して……それで大丈夫よ」
『判ったっ！　ワタシ、皆に伝えてくるっ！』
今まで黙っていたキーファが急に元気よく樹の上に飛んでいった。
『ありがとう。ソフィア。森を護る方法を教えてくれて』
振り向きざまにソフィアに挨拶をしてキーファは瞬く間に見えなくなった。
『まったく、いつまで経ってもろくに挨拶を覚えん』
『いいではありませんか。まだ子供なのですから』
『そうやってお前が甘やかすから…』
老婆とアィヒェのやり取りをソフィアは懐かしげに聞いていた。
（もう何年前だろう。父さん達と別れてから）
ゆっくりと背中の袋鞄に手を置き、それを確かめながらソフィアは目を閉じて微かな記憶を辿った。僅かな思い出が心の温もりに変っていく。
『大丈夫かの？　背に古傷でもあるのかえ？』
目を開けると老婆の顔がどアップで飛び込んできた。
「ぎゃあ！　…って失礼しました。何でもありません」
両手をわたふたと振りながらソフィアは呼吸を整えた。
『では、あの護符を教わったお礼じゃ。今度は受け取ってくれるの？』

「はい。でも半分だけ」
『どうして半分ですの？』
尋ねるアィヒェにソフィアはにっこりと笑って応えた。
「残り半分は植えて育ててくださいまし。それがその実の宿命でしょう」
ソフィアの言葉にアィヒェは驚いた。
『判っていたのですか？　この実をつけた碧玉胡桃の木が枯れた事を』
「なんとなく。でも芽を出し難い木なのでしたら、やはり受け取るわけには」
『それなら心配御無用じゃ。この実をつける木は其処生えておる』
老婆が指差すのは神泉の向こう岸。小さな木が七本生えていた。
『七年前にやっと生った１つの実を一昨年植えましたら去年、芽が出ましたの』

アコライト・ソフィア　９（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
９／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア１０（前書き）

竜の洞窟でソフィアは痛いコトが…

『一個植えて七本芽が出る。ワシ等の仲間でもめずらしい木じゃよ』
「すごい生命力ですね」
『そうじゃ…じゃが、この木は瘴気に滅法弱い。この実を神泉に沈めておいたのも、泉の近くに植えたのも瘴気を避ける為じゃて』
瘴気。それ程までにこの地の生き物全てに忌み嫌われる物がどうして存在し続けるのか。
（なにか、邪悪な意思を感じる）
ぼんやりと感じてきた何者かの存在を今は、はっきりと意識することができる。そして、それでもこの地を守り生きようとする此処に生きる者たちの思いを今はっきりと意識した。

２２．竜の洞窟

『★ソフィア。なんであの胡桃を返したん？』
「受け取ったわよ。三個」
『☆五個やったら、一人一個やったのに』
「やだ。食べる気だったの？」
『〇いんや、ペンダントにしたら綺麗やったやろなぁと思て』
「確かに綺麗な木の実だったわね。でもね、実が生っている姿を見てみたいと思わない？」
『★生っているところ…綺麗やろなぁ』
『〇おっきぃ蛍みたいな実がいぃっぱい生っている木…』
『☆確かに見てみたいわ』
「そうでしょ？　それで残してきたの」
『★せやったら全部置いてきたらよかったのに』
「さっきと違う事、言ってない？」
『★…気のせいやて』
『☆〇そうそう』

「ふーん。ま、そういう事にしときましょ」
話しながら歩きついたのは東の尾根の下。ドリァードの言っていた竜の洞窟の入り口。辺りには焼け焦げた岩が散乱している。焔の魔岩が落ちた衝撃で砕け散り、焔が岩を焼いたのだろう。
「凄い魔力を封じていたのね。魔岩は…。アィヒェさんはツタで絡めて放り投げ込んだから、全部、ここに落ちて砕けたかどうかは判らないと言ってたけど」
『☆それでも凄い命中率やで』
確かに焼け焦げたのは洞窟の付近だけだった。
『〇森の中からここまで投げてこの辺りだけにしか落ちてないとは』
『◎…いつでも槍投げのプロになれるね』
『☆それを言うなら砲丸投げやろ？』
『★そういう問題か？』
人形達のやりとりを余所にソフィアは辺りを調べて溜め息をついた。
「それにしても、全部、砕けてなくなったようね。赤い焔の魔岩は」
『★欠片でもあったらどういう術者とか判ったんにね』
『☆洞窟の中には無いんかな？』
「調べてみましょ」
ソフィアは洞窟の中を探ったが、洞口から急に下に降りていて底はよく見えない。
「深そうね」
『☆洞窟というよりは井戸みたいやな』
『★天井も高いで。縦に細長い洞窟や』
『〇どのぐらい深いんやろ？』
小石を投げ入れてみるとかなり経ってから聞こえる鈍い音。
『〇なんか底は岩や無さそうな音やな』
「でも、落ちたら大怪我する深さのようね」
『☆大怪我ですまんと思うけど』
『★へんなガスが溜まってないやろな？』

落ちていた小枝に火をつけて投げ入れると、小枝は燃えたまま底で燃えている。
小枝の焔で浮かび上がった底には所々、土があるのが判った。
「中に入っても大丈夫そうね」
『〇底は泥というか土みたいやね。砕けていない魔岩があるかも知れん』
「そうね。じゃ、入ってみましょうか？」
『★とは言っても、道があらへんがな』
『◎…ソフィア。こっちに道があるよ』
ウェンディが指差したのは壁づたいにやっと通れるかという岩棚だった。
「ちょっと心許ないけど行ってみましょ」

23．洞窟の底

岩棚をゆっくりと手探りで進むとやがて少し広い岩棚の上に出た。
「ふぅ。これで壁に張り付いて歩かなくても大丈夫ね」
『〇ソフィアが岩蜘蛛の術をちゃんと使えたらいいんやけどね』
岩蜘蛛の術とは手や足を岩肌に吸い付かせる術である。
『☆岩ごと、むしり取ってしまうんやから使えんよなぁ』
「…あんたたち。もう少し表現を…」
ソフィアが笑いながらも引きつっている。
『★斜めになってたから…かなり降りたけど』
素知らぬふりをして話を続ける人形達。
『☆んでも、先があらへん。暗ろうてよう判らんし』
「じゃ明かりを点けましょ」
ソフィアは両手を合わせて呪文を唱えた。
「光よ全ての闇を退け賜え。ヴ・レイ・ライティ」
ほわっとした光の宝珠が両手から浮かび上がり肩の高さで止まった。
「うん。上出来」

『★めずらしくうまくできた明灯やな』
『☆うんうん。この前なんか眩し過ぎて目が開けられんかったし』
『〇その前なんか火花バチバチ跳ばす稲光やったもんな』
「…他に言いたいことはあるかしら？」
ソフィアに笑いながらジロリと睨まれた人形達は慌てて道を探した。
『☆★〇え、え～と先に続く道は…』
『◎…ソフィア。ここにロープがあるよ』
「ロープ？」
ウェンディが見つけたロープは岩棚の端の壁に打付けられた鉄楔に結わえられていた。
「こんな所にロープ？」
『★誰かがここを使ってたんやな』
そのロープを手繰ってみるとほんの数mで千切れていた。
『☆千切れたんは最近やね』
『〇つまり…最近まで使うてたんかな？』
岩棚から下を覗くと千切れたロープが山となっていた。その山の下から白く細長い物が覗いている。
『★アレ何やろ？　大根かな？』
『〇ちゃうで。足やで』
「本当だ。誰か倒れてるわね」
『☆降りて助けんと…でもロープ切れてるで』
「飛翔界で降りましょうか？」
人形達は洞窟の天井を見上げた。遥か上に尖った鍾乳石が幾つも見える。
『〇☆★…まだ死にたくない』
「どういう意味よ。それ」　憤慨するソフィアに人形達は冷静に言った。
『★自分の胸に手をあてて考えてみ。この前、子供が離してしもうた風船とって上げようとして、枝に頭突きを食らわしてたんは誰や

った？』
「わたし…だけど？」
『〇黒城で地下牢から飛び出したんはいいけど、吹き飛ばした天井にわざわざ飛んでいって頭を打った衝撃で気ィ失って屋根で延びてたんは誰やった？』
「わたし…だね」　事実なだけに否定はできなかった。
『◎…ソフィアの魔法は強力だけど、制御できないのが欠点だよね』
『★そうそう。回復や治療系の魔法は数こなしただけに巧くなってきたけど』
『☆他の系の魔法は制御できへんもんね。全部、ウチらのフルパワーレベルやのに』
「いいじゃない。大は小を兼ねるのよ」
　既に開き直るしか道は無かった。
『〇風呂桶はコップを兼ねへんで』
「どゆこと？」
　ソフィアは引きつった笑いを浮かべながら判りきっている意味を聞き直した。
『★失礼やな。それを言うならクラーケンの飼育プールは盃を兼ねへんと言わんと』
「…あのね」
『〇それより、どやって降りる？』
「そうね…ロープの代わりになる物といえば…」
『◎…水糸は？』
「そうだ！　でも持つかしらね？」
　取り出した水糸を引っ張り、強度を確かめる。一本ならば心許なさそうだが、二本ならば持ちそうな強さを持っていた。ソフィアは水糸の端を結び、二本にして岩に刺さっている鉄楔に結んだ。
「さぁ、降りるわよ」
　ソフィア達はとんとんと岸壁を蹴りながら少しずつ降りていった。あと少しで下に辿り着けるという高さになった時、ソフィアの動き

が止まった。
『★どしたん？』
「糸がもう無いの。短かった…」
下まであと十m近く。飛び降りるにはちょっと…というか、かなり高い。
「やっぱり、飛翔界で…」
『☆〇うぅぅ。短い人生やったなぁ』
アェリィとノーラは目を閉じて祈り始めた。
『★飛翔界よりは飛び降りた方が…』
サーラは脂汗をかきながら提案した。
『〇そや、その方がええ。命賭けるよりは腕か足を賭けた方がええ』
「随分じゃない？　そこまで言うなら飛翔界を意地でも使いこなしてあげるわ」
ソフィアは人形達をジロリと睨み、構わず飛翔界の呪文を唱え始めた。
『★☆あぁ短い一生やったなぁ』
『◎…でも飛翔界って確か』
『〇どした？』
『◎…呪文の詠唱が終わる前に両手を広げて指を伸ばすんじゃなかった？』
『★☆〇…あ』
「あ…そか」
気付いた時、既にソフィア達は落下していた。
落下しながらも飛翔界を唱えると…勢いよくソフィアの身体は上昇した。…頭の方向へ。水糸を使って、岩壁を降りていたときの姿勢は…ほぼ水平。そして手を放した直後の体勢は頭を下にして、落下し始めたタイミング。従って…上昇（？）した方向はほぼ水平方向というかやや下方向。結果としてソフィアは反対側の岩壁へと頭を打付けた。盛大に。丁度、そこにあった岩棚を破壊して。
「ーーっ！　ったぁ！」

破壊の衝撃が飛翔界の勢いを相殺したのか、彼方此方に頭を打付けることなく、そのまま下へと落下して地面にふわりと…と言うか、それなりの速度で着地できたのは少なからず飛翔界の呪文の効果だろう。

「ーったぁっかったぁ。しかし、それでも飛翔界の…ぎゃあっ」

痛がるソフィアが呪文の効果を確認しようとしたとき、岩棚の破片がソフィアの頭に落下し、割れ砕けた。

アコライト・ソフィア１０（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１０／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア11（前書き）

ソフィアの法力は…

アコライト・ソフィア11

「あぁ。痛ぁい…」
『★んでも…なんとか着地できてよかったやんか』
「ふぃぃ…まぁ、そうね」
『〇ソフィア。あんな所に祭壇が在るで』
ノーラが指差す洞窟の奥まった所には小さな祭壇。斧と鎌と鎚が象られた装飾からは、その祭壇が鍛冶と木こり達の物だと言う事を示していた。
「それより、あの人を助けないと」
『〇あ、そやった』
ロープの山に近づき、下敷きになっている誰かの足に触れてみるとまだ暖かかった。
「大丈夫。気絶しているだけね。怪我はどうか判らないけど」
『☆女の人やね。誰やろ？』
『◎…ソフィア、これ』
ウェンディが指差しているのはロープの山の下に埋もれている人の右手に握られている半透明の布に包まれた杖。それは…
「…私の杖だわ」
『☆…ということは？』
「ノランさん！」
『★やっぱり…んでも、なんでこんなとこに？』
ノランの右手には、杖を包んでいた薄汚れた水衣がまだしっかりと握られていた。
『☆…これ水衣とちゃうか？』
『〇なんで、水衣を持ってるんやろ？』
「そんなことはどうでもいいでしょ。ノランさん、怪我は無い？」
ソフィアの問い掛けにノランは小さく呟くだけだった。
「…ギーゼ…ごめん…もう…私…耐えられ…ない…もう…」

『★何の事やろ？　うなされとる…なんでや？」
「…打撲傷はあるけど大した事は無いし、外傷も無いし…骨折した訳でもなさそうね」
『◎…気絶しているだけ？』
「ちょっと違うみたい。…杖の法力を浴び過ぎて精神的に疲れているのかも」
『☆しかし、やっぱりノランさんが杖を持って行ったんか』
『★せやけど何の為や？　普通の人間には何の役にも立たへんで』
『○何処ぞの誰ぞに売っ払うとか？』
『★せやったら、その誰ぞは誰やねんな？』
『☆んな事、判るかいな』
『★判らんで済ますなや』
『○普通の人間やったら持っても仕方ないし、精霊の類でもあまり使いモンにはならへんで』
『★せやろ？　なんで持ち出したんやろ？』
『☆せやから判らんと言うとるやろが』
　人形達の声が洞窟の岩に反射してソフィアの頭の中に響いている。ここの岩は精神波というか法力を反射するようだった。
「ちょっとうるさい（ぞ）わよ」

２４．洞窟の竜

「…え？」
『★☆○◎　…へっ！』
　ソフィアの声と重なった声は後ろの岩影、枝に分かれた洞窟の先から聞こえてきた。
「誰かな？」　『☆それは見てみんことには…』
　ソフィア達はノランをロープの上に寝かせ置いて岩影の向こうを覗いてみた。そこは大きな鍾乳石と石筍のホールになっている。その中に大きな蠢く物が見える。
「すみません。明かりを点けてもよろしいでしょうか？」

『…覚悟があるなら点けるが良い』
「覚悟」という言葉に人形達はそれがなんなのか朧気に判った。
『★ソフィア…止めとこ』
「でも…一緒でしょ？」
ソフィアも気付いたようだが、結果がさほど違わない事を人形達に諭した。
『☆せやけど…』
「点けさせていただきます」
ソフィアは覚悟を決めて明灯の呪文を唱えた。
「ライティ！」
ソフィアの手からゆっくりと天井に向かって浮かび上がる光の球が照らしだしたのは巨大な竜だった。
『★☆〇ひゃあぁぁぁ…』
巨大なホールの天井に届くかのような巨大な竜。竜は頭をこちらに向けていたが明灯の光が眩しいらしく目を閉じていた。竜の鱗は黒光りしているが光の当り方によっては金色に見える。
『◎…峠で見た黄金の竜だ』
『ほほう。御主達、ワシが戦っているところを見たのか？』
文字どおり地の底から響き渡るかのような声で黄金の竜はソフィア達に尋ねた。
「ええ。あの時に戦ってらした竜はどうされました？」
『ふふん。ワシに恐れをなして逃げていったよ』
『◎…勝ったん？』
『おおさ。このオロチ・ブラギーヌ・ザジ・ラダギヌス三世に敵う者などそうはおらん。散歩中に不意を衝かれたとはいえ、あの死にぞこないのゾンビ・ドラゴンなんぞにやられるほど老いてはおらんさ』
「でも怪我をなさっているようですね？　治療致しませんと…」
竜の方から漂ってくる血の香りが傷を、しかもかなりの傷を示していた。黄金竜は薄く目を開けてソフィアを見た。

『御主の名は？』
「失礼しました。私はアコライト。ソフィア・フレイアと申します」
『アコライト？　見習い僧侶か。それならば御主には癒せんさ』
「さぁ？　癒せるかどうかは試してみないと判りませんわ」
自信たっぷりにソフィアは応えた。
『ならば癒してみい』
竜は横たわったまま、翼で隠していた右足をソフィアに見せた。
鱗が剥がれ落ち、紫色に変色した皮膚と傷口が見える。
「毒にやられているようですね」
『ふん。あの死にぞこないの竜にも何かしらの特技があると言う事さ』
ソフィアには竜の言葉がただのやせ我慢にしか聞こえずにくすりと笑った。
『★ソフィア。大丈夫なん？』
「うん、大丈夫よ。悪いけど杖を持ってきてくれない？」
『☆杖なら持ってきたで』　アェリィとノーラは二人がかりで杖を運んできた。
「やっぱり、杖が無いと調子でないのよね」
つまらなそうに杖を見ながら呟く。
『その杖は？　誰から譲り受けた物かな？』
竜は大きく目を開き杖を凝視している。
「詳しい由来は知りませんが、今は私が所持しております」
竜はソフィアが杖を掴み、くるりと回すのを見ると目を閉じた。
（まさか、あの伝説の杖にお目にかかれるとは…しかも、使える人間に会えるとは）
竜は一目で杖の素性を理解した。
（杖の力を借りたのならば、解毒ぐらいはできるだろう）
「さて、解毒と治療をしなきゃね」
（ん？　解毒に治療だと？）
解毒はともかく治療の魔法は相手に自分の法力を注ぎ込む術。片

足とはいえ、竜の生命力に人間の法力、つまり生命力が間に合う訳が無い。
『人間。癒すのはかまわんが、それで御主の法力を使いきってしまわんようにな。癒った時にミイラが転がっているようでは目覚めが悪い』
ソフィアと人形達は顔を見合わせて笑いだした。
「それは有り得ませんから、どうぞ御心配なく」
『☆せやせや。心配はいらんで竜のおっちゃん』
『おっちゃん？　…ふん。まあいい』
竜は再び目を閉じて頭を向こうに回した。
（ミイラになる前に術を使えんようになるだろう…その時に助けたらいい）
ソフィアはノーラと一緒に傷口を調べ始めた。
「毒の種類は腐毒で間違いない？　ノーラ」
『〇間違いないで。毒は結構、体に回っているようやから遠慮はいらんで』
「そっか。じゃ、ちょっと離れててね」
『★よっしゃ』
『☆ささっと片付けようで』
『〇今度はえらく過剰になっても構わんし』
『◎…洞窟、壊さないでね』
竜は人形達が石筍に隠れながらソフィアにかけた声を不思議そうに聞いていた。
（竜に治療の魔法をかけるというのに何も心配していないとは…？）
竜は頭を回してソフィアを見た。
（聖者…いや、賢者程度の資質ならば在るようだが…）
ソフィアはうきうきしながら杖をくるりと回して両手で持った。
が、近くの大きな石筍に杖をぶつけた反動で転んでしまった。
「きゃっ。あ痛たたた…」
『☆相変らずそそっかしいな。ソフィアは』

人形達は石筍の影から心配そうに見ている。
（…賢者はおろか司教、いや、司祭にもなれまい）
「あ、そうそう…」
ソフィアは埃を払いながら、思い出して尋ねた。
「念のため御尋ねしますが、この洞窟には以前から御住まいなのですか？」
『いいや。その傷…は大した事は無いのだが、ちょっと疲れたので休んでいるだけ。この辺りは…そうさな。百年ぶりぐらいだな…それがどうした？』
「いえいえ、ちょっとこちらの事ですわ」
（ギルドの依頼にあった竜ではないようね）
ソフィアはくすりと笑った。
（この竜の退治を依頼するのは戦ってた竜ぐらいかもね）
『…何がおかしい？』
「いえ別に。さて、始めましょうか」
ソフィアは再び嬉しそうに杖をくるくるっと回してから両手で持ち呪文を唱えた。
「光よ。全ての力を聖なる力とし、邪悪と闇を退け、その力を顕し賜え。ラ・レイ・レム・ギ・ピュア・リィ」
ソフィアの両手の間から眩いばかりの光の球が傷口に向かって放たれる。光の球は傷口に吸い込まれ、竜の身体全体を一瞬、光らせた。
『おぉおうぅ。解毒ではなく浄化だと？』
竜は傷口ばかりではなく身体中に回っている毒が消滅していくのを感じていた。
「さて、続けて治療ね」
ソフィアは左手で杖をくるくると回しながら、右手を傷口にあてて呪文を唱えた。
「聖なる力よ、全ての力を甦らせ賜え。エリ・ライ・リィ・ディ・カヴァー」

右手から傷口にかけて光が放たれ、ゆっくりと輝きを増していく。
『おぉぉう！』
（この人間。凄まじき法力を持っているっ！）
竜は自分の体に注ぎ込まれる法力が一瞬で尽きると思っていたが、ソフィアの手から注ぎ込まれる法力は尽きかけるどころか、むしろ時と共に増し、しかも洞窟に共鳴している。
（これ程の洞窟を共鳴させるとは…）
ふっと光が消え、ソフィアは竜から静かに離れた。
「癒ったわ」
竜の右足の傷は跡形もなく消えていた。
『…人間。大丈夫か？』
「ええ。久しぶりにすっきりしましたわ」

アコライト・ソフィア１１（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１１／３０話目です。

感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア12（前書き）

竜の試練とは…

アコライト・ソフィア12

『すっきり？　…だと？』
『★ソフィア。良かったなぁ、久しぶりに力を出せて』
『☆ほんまや。んでも物足りなかったんとちゃう？』
『〇まぁ、ストレス解消にはなったやろ？』
「うん。まだまだ力は有り余ってるわよ」
（竜の傷を癒すのがストレス解消程度だと？）
竜はソフィアの法力がまったく消耗していないのを見て呆れてしまった。
（杖の力も使っていない。むしろ杖を法力の緩衝材として使っているようだ）
竜は自分の傷が癒った事よりソフィアの法力の大きさに感心しているとウェンディは天井を見上げながらソフィアに声を掛けた。
『◎…洞窟、壊れなくてよかったね』
「ウェンディ。さっきは聞き流したけど、それはどういう意味？…っ、きゃあっ！」
と、ウェンディに詰め寄ろうとするソフィアの目の前に大きな鍾乳石が落ちて砕けた。
『◎…そういう意味』
『☆危なぁ』
『〇ま、とにかく治療は終わったし…』
埃を払って竜の方に向き直り、ソフィアは深々と頭を下げた。
「それでは、オロチ・ブラギーヌ…えぇっと…ラギダヌス…ザジ…」
『オロチ・ブラギーヌ・ザジ・ラダギヌス三世じゃ。オロチでいいぞ。人間』
「失礼しました。ではオロチ様。私達はこれで失礼いたします」
立ち去ろうとするソフィア達をオロチは呼び止めた。
『待てい。人間』

呼び止められたソフィアはオロチの無礼な物言いにちょっと怒りながら振り向いた。
「私の名はソフィア・フレイアと申します」
『判った。ソフィア・フレイア、そう怒るな』
「それで何か御用でも？」
『人界に棲もうともワシはこれでも神獣の端くれ。黙って帰す訳にはいかん。神獣として、そなたに試練を与えねば立つ瀬が無いのじゃ』
ソフィアと人形達は顔を見合わせて溜め息をついた。
『★…やっぱり試練や。せやから言葉を話す竜と会うのは嫌やったんや』
ソフィアはもう一度、溜め息をつくとオロチに聞いた。
「治療は試練にならないと言う事ですね？」
『すまんがそういう事じゃ。まぁ、そう嫌がるな。さて…白魔法師ならば謎かけは殆ど応えられるだろうからして…』
暫くの間の後、オロチは尻尾を高く振り上げて鋭く振り下ろすと一枚の鱗が剥がれ落ち、地面に突き刺さった。
『★ひぁあ。危なぁ…硬そうな鱗やなぁ』
『〇これが試練かな？』
「これをどうしろと？」
ソフィアは地面に突き刺さった背の丈ほどの大きさの鱗を見ながら確認した。
『二つに、いや四つに切ってもらおうか』
「私は白魔法師。白魔法の道を歩んだ者は剣の類を持てない…故の試練という訳ですね？」
『そうじゃ。まぁ、例え剣士だとしてもワシの鱗を切る事は容易くは無かろうがな。手段は問わん。風の精霊の力を借りてもかまわんぞ』
ソフィアはアェリィと真剣な表情で顔を見合わせて、そして笑いだした。

『☆オロチのおっちゃん。これを切るぐらいやったらアタシの力はいらへんわ』
『〇ソフィア一人で充分やで』
『なにぃ？』
『★まぁ見とき』
ソフィアは鱗に近づくと杖でちょっと叩いた。
「この硬さなら大丈夫ね」
『言っておくが、杖で砕くのは無しじゃぞ』
「御心配なく。ちゃんと四つに切断致します」
ソフィアは杖を片手でくるくると回しながら鱗からちょっと離れた。
（それにしても自分の背丈よりも長い杖をあのように指先だけで扱えるとは……腕力や握力の方も並みの人間ではないな）
オロチがソフィアの力に感心している間にソフィアは鱗の方を振り向き、杖の中程を両手に持ち高く掲げて精神統一して低く呪文を唱え始めた。
人形達はオロチに近づき言った。
『☆オロチのおっちゃん。よく見とき』
『★珍しい物が見えるで』
『ほほう。楽しみにしておこう』
竜の言葉が終わると同時にソフィアの杖の一方が光り始めた。
「霊精よ。我が意思の元に集い姿を顕し、今異なる二つを一つとせよ」
ソフィアは光っている杖の一方を背中の袋鞄の中に入れて呪文を続けた。
「フィジョン！」
杖全体が光り輝き、袋から出された杖の端には大きな刀刃が付いていた。
『な、なにぃ？　なんじゃ？　その刃は？』
問い質すオロチにソフィアはにっこりと笑って応えた。

「私の父の、いえ家族の形見ですわ」
『いや。何故にその杖に刃物がつくのじゃ？』
『★ソフィアのオリジナルの魔法やで』
『〇ソフィアは杖を持っているだけで、杖に刃物が繋がってるだけなんや』
『☆杖とあの刃物を霊精の綱で堅く繋いであるんや。「融合」の術でも繋げんモノ同士やで』
『◎…薙刀は持てないけど刃物が霊精で繋がっている杖は持てる。そゆこと』
白魔導師は短刀はおろかあらゆる刃物を素手で持つことはできない。それは神の力である白魔法を使うために自ら戒めた事。自戒故に逃れる術はない…筈。
『しかし、あれはまるで薙刀…』
吃驚しているオロチに人形達は言葉を荒げた。
『☆ごちゃごちゃ言わんと見てみい』
『★薙刀やったら今頃ソフィアの手は火傷しとるで』
『〇なんにも起きないということはアレは杖という訳や』
確かにソフィアの手は何事も無く杖を掴んでいる。ソフィアはオロチの方を見て静かに笑いながら鱗に近づいていく。ちょうど杖の長さ程度に近づいた時、杖を一気に振り下ろす。鈍い金属音が響きと共にちょっと飛び上がり杖を体ごと水平に振り抜く。ソフィアは鱗に背を向けて音もなく着地すると杖で地面をトンと叩いた。
ず、ずずぅん
鱗はゆっくりと動き始め、見事に四つに分れた。
『★やりぃ』
『☆見事な切れ味やな』
『〇ほんまや。あれ以上の太刀筋は滅多にお目にかかれんで』
人形達が騒ぎ、オロチが驚きの余りに沈黙する中、ソフィアは杖に付いている刀刃を背中の袋鞄に入れて呪文を唱えた。
「レディクテ」

杖と袋が光る。ゆっくりと輝きが消えてから、袋鞄から出した杖からは刀刃が外れていた。
「これでよろしいのでしたよね？」
にこやかに問い質すソフィアにオロチはたじろぎながらも認めるしかなかった。
『ん、む。何はともあれ、確かに鱗は四つに切断された。見事じゃ』
「では、これで失礼します」
たおやかに一礼して立ち去ろうとするソフィアをオロチは呼び止めた。
『ちょっと待てぃ』
「まだ何か？」
振り返るソフィアの眉間のシワがあからさまな嫌悪感を示していた。
『そう嫌がるな。見事に試練をこなした以上、褒美を渡さん事には立つ瀬がない』
人形達は顔を見合わせた。
『★褒美やて』
『☆なんか勝手やな』
『〇まぁええやんか。なんか貰うておこうで』
ソフィアはきちんとオロチの方に向き直り静かに聞いた。
「それで、何を御譲りいただけるのですか？」
『そうさな…何か欲しい物はないか？』
ソフィアの欲しい物は決まっている。しかし、それが適うとは思えなかった。
『確かに、失われた記憶は無理じゃ』
オロチの言葉にソフィアは驚いた。
「何故、それを？」
『これでも神獣じゃ。そのぐらい強き想いならば声に出さずとも判る』
「そうですか…」

ソフィアには想いが判られた驚きよりも、想いが適えられぬ悲しさが大きく、目を伏せた。
『まぁ、ここはミダル達が考えている事を適えることとしよう』
「えっ？　何を考えてたの？」
『☆あのなぁ…』
『★そのなぁ…』
「何よ。はっきりしなさい」
『〇怒らへん？』
「別に怒らないわよ。何？」
きょとんと尋ねるソフィアにオロチが代わりに言った。
『そこなミダル達は「安全に飛びたい」そうじゃ』
「えっ？　安全に？　…ってアンタ達ぃ」
ソフィアがキッと睨むより先に人形達は逃げ出した。
『★だって飛翔界はいつまでたっても巧くならないやんか』
『☆そう何度も頭打ってられへんし』
『〇こんなとこなんかで術使こうたら命が幾ら在っても足りへんし』
「だからって…ちょっと待ちなさい！」
ソフィアと人形達は石筍の間で追いかけっこしながら言い合う。
『まぁ、いいではないか。さっきの様子からして然程には空を飛ぶのは巧くはなさそうじゃしの』
「…見てらしたんですか？」
オロチの言葉にソフィアは立ち止まり赤面した。
『おぉさ。あれほど騒がれたら目を醒まさずには居られまい？』
「失礼しました」
ソフィアは赤面したまま頭を下げた。
『ま、あそこで横になっている人間の所でちょっと待っておれば望みは適えようぞ』
「あ、そうだ。ノランさん！」
『あの人間はワシが寝込んでいる時に来たらしいな。御主達が来るまで全く気付かんかったぞ』

『☆そや。なんでノランさんはここに来たんやろ？』
『★ちょうと様子見てこうで』
ノランの方に駆け寄る人形達の後を追ってソフィアも岩影の向こうに駆け出したが、礼儀を思い出したかのように慌てて立ち止まりオロチに挨拶をした。
「失礼します」
『よい。そうは待たせんが、覗かんようにな』
「判っています。私も神獣への礼儀はわきまえていますから」
ソフィアはにっこりと笑うと岩影に消えていった。
（ふむ。神獣に遭ったというのに落ち着いた娘じゃ。しかもあれほどの法力を持っているとは。あの杖を持つだけは在るか…）
オロチはあの杖をソフィアが持っている事を納得していた。

２５．消えた二人

『☆なんか、戦闘天女みたいやな』

アコライト・ソフィア１２（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１２／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア13（前書き）

ソフィアが戻ると、ギゼルとミクラが…

アコライト・ソフィア13

ソフィアがオロチから貰った物は竜の鱗と竜の髭で編み上げられたブーツと二つの細長い竜の鱗の盾。そして、そのブーツは飛翔界を唱えずとも念を込めるだけで空を飛ぶことができる品だった。

「戦闘天女ってヴァルキューレの事？」

竜の鱗や髭で作られたブーツを穿き、盾を両肩に装備して背丈よりも長い杖を持ち、ノランを背負って夕日を背景に森の上を飛ぶソフィアの姿は確かにヴァルキューレに似ていなくも無かった。

『☆そうそう。その竜髭靴はいい靴やね』

「りゅうしか？　なるほど。竜の髭の靴ね」

『★…結構、空を飛ぶって気持ちええんやな』

『〇空を飛べる神様とか神獣とか多いけど、こんな心地ええんやったら納得やわ』

『☆うんうん。金竜のおっちゃんも空に飛んでく時は嬉しそうやったもんなぁ』

『★先に失礼するとか、再び逢う時には何とかんとか言ってたけど、ほんまは直ぐに飛びたかったんとちゃうか？』

『〇ウチもそう思うわ。こんなに心地ええもんなぁ』

『◎…けど、落ちたら大変…きゃあ』

風圧に耐えかねてウェンディが落ちてしまった。

「あぁっと。また落ちたの？」

ひゅんと方向を変えてソフィアは落ちていくウェンディを掴まえた。

『◎…助かった。ソフィア、ありがとね』

「いいわよ。そろそろ家の近くだから下に降りましょ」

ソフィア達がちょうど家の前に降りた時、老人が飛び出てきた。

「どうも遅くなりました」

「御前さん。空を飛べるのかの？」

「ええ。まぁ、こんなに飛んだのは久し振りですけど」
『★今までは頭打ってすぐ終わってたし』
「こら、サーラ。あっ、御爺様。ノランさんが見つかりました」
「おお。ノラン。ああ、御前さんの杖も見つかったのかね」
ソフィアの背中のノランを見て老人は少し落ち着いたが、また辺りをきょろきょろと探っていた。
「御老人。どうされました？」
「なに、何でも無い。何でも無いが…」
『☆何でも無いようには見えんけど？』
「アェリィ！　でも御老人、何かあったのですか？」
「ギゼルとミクラがな…居なくなったんじゃ。昼飯の時までは居たんじゃが、それから姿が見えんのじゃ」
狼狽する老人にかける言葉は直ぐには見つからなかった。

ぱちぱちと燃えている暖炉の側のソファに寝ているノランをソフィアは看ていた。そして暖炉の脇に老人。幾度となく外に出ては近くを捜し、落胆して帰ってきた。
「何処に行ったのかのう。今までは遅くても夕食までには帰ってきてたんじゃが」
夕食に作ったシチューは暖炉の中で煮詰まっている。
「私、捜して来ますわ。ノランさんは暫くは目を醒まさないと思いますけど、怪我とかはありませんから…明日には元気になると思います」
「すまんの。ノランはわしが看るからギゼルとミクラを…よろしく頼む」

ソフィア達は家を出ると道を森の方へ暫く歩き、立ち止まった。
『〇何処に行ったんかな。ギゼルとミクラちゃん』
「さて、これを使って捜しましょ」
『☆何なん？　それは？』

「ギゼルちゃんとミクラちゃんの髪の毛。さっき部屋を覗いて拾ってきたの。これでトレーサーを作って…」
『★そか。そいつを追いかけると…』
『〇見つかると言う訳やな？』
「でも生者の体の一部を使うから動きも早いし、居る場所に行くとも限らないわよ」
『◎…どして？』
「その人の想いの強い場所。例えばあの家で止まる事もありえるわ」
『★そかぁ。難しいんやな』
「でも何もしないよりは、少しは…」
『☆せや。何もせんよりはええで』
「じゃ始めるわよ。みんな落ちないでつかまっててね」
ソフィアの手から離れたトレーサーは凄い勢いで辺りを回り始めたが、やがて森に向かって素早く動きだした。
『★ソフィア、あっちや』
「判ってる。行くわよ」
ソフィアは竜髭靴に気を送って飛び出した。

森の中をあちこち飛び回り、トレーサーが飛び着いたのは西の尾根の森だった。
「ふぃぃ。まだ…辿り…着か…ないの…かしら？」
まだまだ動きが早いトレーサーの後を飛び続けているソフィアにも疲れが見え始めた。
『☆あぉぅっ…とにかく…ぐぇっ…後を…げへっ…ついていかんと』
小枝や葉っぱに強かに打ち続けられながらも人形達はソフィアにしがみついていた。
『〇しかし…も少し…ぎゃあっ…高く…ひゃぉ…飛んで…ぐへぇっ…くれへんかな？』
「無理よ…きゃ…ひぇっ…子供の…きゃいっ…高さで…飛んでるん…ぎゃっ…だから」

『★しかし…おおっと…なんや…げへっ…いたたた…瘴気が…が、ぎゃっ…強く…ぐふっ…痛ぁ…なって…ひゃっ…来てるで』
『◎…ぎゃっん』
『☆あ、…ウェンディが落ちてしもうた』
「えっ？　止まるわよ！」
ソフィア達は飛ぶのを止め、地面に降りてウェンディを拾うと辺りを見回した。
「ここはどの辺りかな？」
ソフィア達が辿り着いたのは森の西の外れの尾根近く。辺りには何もなく空に二つの月が空高く輝いている所だった。
『○トレーサー…見失ってしもうた』
『◎…ごめんなさい』
「いいわよ。そろそろ限界だったし」
『★ええ事あるかい！　手掛りが無くなってしもうたんやで』
『◎…ひぃ』
『☆…いや無くなってへんで。あそこで光ってるのトレーサーやろ？』
「あっ！　本当だ」
アェリィが指差した場所は大人の背丈ほどの崖の下からひょろりと生えている茶色に枯れかけた木の枝だった。そこにぼんやりと光るのは間違いなくトレーサー。
ソフィア達が駆け寄るのとほぼ同時にトレーサーは光を失った。
「ギゼルくぅん。ミクラちゃぁん。そこに居るのぉ？」
小さな崖の上からソフィアが呼び掛けると下から小さな子供の声。
「ソフィア姉ちゃんかぁ。ここだぁ」
声の主はミクラを背負って歩き疲れたギゼルだった。

26．ギゼルとミクラ

二人が消えたのはミクラが在る事を言い出したのが始まりだった。
「ミクラが…その…腐泥の沼に行こうと言いだしたんだ」

「腐泥の沼に？」
ソフィアがギゼルとミクラを背負い家に帰りついたのは夜遅く、紅き月が天頂にかかり、蒼き月が西の尾根に沈み始めた頃だった。
「どうしてそんな所に行こうとしたのじゃ？」
厳しく問い質しながらもギゼルに煮詰まったシチューを勧める老人の目は優しかった。
「ミクラがソフィア姉ちゃんの杖がそこにあるかもしれないって」
「私の杖が？」
こくんと頷くギゼルには最初に会った時の刺々しい感情は無かった。
「どうして私の杖がそこに在ると思ったの？」
「知らない。ミクラが言い出したんだ」
「ミクラちゃんが？」
そのミクラは疲労が激しいらしく熱を出したまま二階の部屋で寝ている。
「どうしてミクラちゃんはそう思ったのかしら？」
「知らない」
「ギゼル！」
老人は厳しく少年を見据えた。
「知らない。知らないんだ。どうしてミクラがそんなことを言い出したのか」
「ギゼル！　隠し立てすると…」
「御老人！　ギゼルくんは本当に知らないみたいですから」
ソフィアはギゼルに殴りかかりそうな老人を制してギゼルに声を掛けた。
「ギゼルくん。もう遅いから御休みなさい」
「…うん」
力なく頷き、ギゼルは自分の部屋に上がっていった。
「御老人、そう怒られては言える物も言い出せなくなります」
ギゼルの部屋の戸が閉まる音を確認してソフィアは老人を諌めた。

「すまん。すまんの。大事な杖をノランは持ちだすわ、ギゼルとミクラは御前さんに迷惑を掛けても謝らんは…」
「御老人、ノランさんが持ち出したとは決まった事では在りませんし、ギゼルちゃんとミクラちゃんはまだまだ子供ですから。それにあの二人は私の杖を捜しに行ったようですし咎める事は在りませんわ」
「…すまんの。ノランはわしが看とるから御前さんも休むがええ」
「ええ。では御言葉に甘えて。ミクラちゃんの様子を見てから休ませて頂きます」
「ああ。ありがとう」
老人は力なく応えるとノランの額にのせた湿布を取り替えた。

ソフィアがミクラの部屋に入るとそこに居たのはギゼルだった。
「あら。心配無いわよ。明日になったら元気になるから」
「…そうかな。そうだったらいいけど」
ギゼルは振り返らずにソフィアに応えた。ギゼルはミクラの手を握りながらその寝顔をじっと見ている。その様子を見てソフィアは微笑んだ。
「ね、ミクラちゃんとずっと一緒だったの？」
ギゼルは少し沈黙した後、頭を横に振った。
「出る時は一緒だったんでしょ？」
ゆっくりと頷くギゼル。
「何処で逸れたのかな？　西の森？」
沈黙するギゼル。唇を噛み締めていたが、やがてソフィアに尋ねた。

アコライト・ソフィア１３（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１３／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア１４（前書き）

選礼式とは…
そして慣習を悪用されて…

アコライト・ソフィア１４

「なぁ、選礼式ってそんなに大事なのか？」
「選礼式？　そうね、人によっては大事な事ね」
「人によっては？」
「なりたい職業が在る時、それ以外の職業に就くのは嫌でしょ？」
「…うん」
「だけど七回チャンスが在るから、大抵は自分のなりたい職業を示す石が出るまでやり直すのよ。そして好きな職業を示す石だったらそれで終りにするんだけど…」
「七回やり直せる？」
「ええ、大抵の場合はそうよ。一二歳から初めて一八歳まで年に一回、大抵はその人の誕生日に行うの。だから全部で七回よ。もっとも場所によって違うし、特にやり直しの場合のキャンセルする方法なんかはかなり地域の特色が出て、変った方法をする所も在るわ。それがどうしたの？」
「今年、俺は十二歳になるんだ。それでミクラが選礼式をやろうって。俺、選礼式ってそんなに知らなかったから…」
「そう。ミクラちゃんは知ってたの？」
「細かくは知らなかったみたいだけど。とにかく、その儀式に必要な石が領主様の家に在るはずだからって」
「それで領主様の家に行ったの？」
小さく頷くギゼル。
「それで見つかったの？」
「見つかったけど、七つ在るはずの石が六つしか無いってミクラが言って…」
「六つ？　どんな色の石が在ったの？」
「白と黒と青と黄色と緑と…硝子玉が在った」
選礼式に使う石は全部で七つ。そして無くなっている色は…

「ミクラちゃんはどうしてもう一つの色を知ってたのかな？」
「おかあさんに教わったって言ってた。ミクラのおかあさんは教会で巫女をしていたんだ」
「そう。巫女をなさっていたの」
「それで小さい時に真似事をして遊んでたって言ってた」
「ふぅん。それじゃ詳しいわね」
「ミクラは巫女になりたいんだって。だから必ず白い石を選ぶって…」
「それで領主様の家で残りの石を捜したの？」
「うぅん。ミクラは無くなった石は西の森にあるはずだって言い出して」
「それで西の森に？」
「うん。その時ミクラが言い出したんだ。ソフィア姉ちゃんの杖もそこに在るかもって」
「どうして私の杖がそこに在ると思ったの？あっ、それは知らないんだったよね。ごめんね同じことを聞いて…」
ギゼルは黙り込んだ。ソフィアはギゼルの頭を撫でて、もう一度謝った。
「ごめんね。疲れているのにいろいろ聞いて。もう遅いから休みましょ？　ミクラちゃんは私が看てるから。ね？」
ギゼルは黙り込んだまま立ち上がり部屋の外に出ようとしたが、ドアの所で立ち止まり、肩を震わせた。
「どうしたの？」
ソフィアが声を掛けると泣きながら振り返った。
「ごめん。ごめんなさい。お、俺、嘘ついてた。本当は知ってるんだ。でも、俺信じられなくて。だってノラン姉ちゃんはギーゼ兄ちゃんの恋人だし、優しいし、俺好きだったし、でもそんなノラン姉ちゃんがあんな事…」
ギゼルは泣きじゃくりながら独白し始めた。
「どういう事？よく判らないけど、怒らないから、ね。ちゃんとゆ

っくり話して。ね？」
　ソフィアは歩み寄りギゼルをあやすように抱きしめた。そして、椅子に座らせると頭を撫でながら、続きを聞いた。
「領主様の館跡に行ったんだよね」
「…うん。それで残りの石を捜していると暖炉の中から人が出てきたんだ」
「暖炉の中から？　どんな人？」
「黒いマントを頭から被った人と、この前の半魚人の誰かと…」
　ギゼルは肩を震わせて唇を噛み締めた。その様子からソフィアは察して言葉を繋げた
「…ノランさんだったの？」
　言葉無く頷くギゼル。ソフィアはもう一度、ギゼルを抱きしめた。
「そうか。そうだったの」
　ソフィアに抱きしめられてギゼルは無表情のまま、その時の事を語り始めた。

27．館の出来事

「へんだなぁ、なんで無いんだろ？」
　ミクラは燃え残っていた選礼式に使う石の入った箱を見つけたが、中には七つ在るはずの石のうち一個が欠けていた。
「どっかに落ちているのかな？」
「だから何が無いんだよ。ミクラ」
　ギゼルは既に飽きていた。ギゼルにとって興味がない式典に使う石の事など如何でも良かった。
「だめよ。ちゃんと七色無いと選礼式をしちゃ駄目なんだもの」
「だから、何色が無いんだよ？」
　ミクラは振り返るとにこっと笑って応えた。
「ひ・み・つ」
「…じゃあ、捜してやんね」
「あ。うそ。ウソ。嘘よ。ね、一緒に捜して」

「…捜してやるから、どんな色なんだよ。残りの一個は？」
「え～とね。色はともかく、この石と同じ大きさで同じ重さの同じ形の石なのよ」
「…つまり片手で持てるぐらいの丸い石だな？」
「うん」
無邪気に笑うミクラに呆れながらギゼルは焼け落ちた館の床に積もっている灰の中なんかを棒で突きながら捜し始めた。
「あ、盃。見っけ」　「こっちには燭台…でも壊れてるわ」
結局、たんなる宝探し遊びになってしまい、倒れたかけた壁の下を探っていた時。暖炉の方で変な音がした。
「なんだろ？」
「やだ。幽霊？」
二人が暖炉の方を振り返ると…暖炉の床が持ち上がり、中に人影が見えた。
「ミクラ！　ここに隠れろ」
ギゼルは倒れかけた壁の下にミクラを押し込むと自分も潜り込んだ。
「なによ。もう」
「しーっ。静かに」
ひそひそ声でミクラに注意しながら、ギゼルはさっきまで灰の中を探っていた棒切れを両手で握り締めて、暖炉の方を睨んだ。やがて、暖炉の中から黒いマントの人…そいつは頭を黒い頭巾を被っていたので判らなかったが、それに続く人影には見覚えが在った。
「あいつ…この前の半魚人」
「ネゼとか言った…あの爺やさんかな？」
「わかんね。わかんないけど、半魚人の誰かだ…それは判る」
「それって、判ってないって事じゃない？」
「…うるさいなぁ」
二人が小声で遣り合っている時、三人目が中から出てきた。そして、その人は…

「！　…え？」
「何故？　ねぇ、なんでノラン姉さんが？」
「知るかよ。なんでか知るかよ！」
　そしてノランが半透明の布で包んで手に持っているのは…銀色に輝くソフィアの杖だった。
「ソフィアさんの杖だ！」
「なんで…なんでノラン姉ちゃんが？」
　二人が疑問の嵐の中に居る時、ノランは半魚人に突き飛ばされた。
「ふん。何の役にも立たん物を持ってきおって」
「これを…この杖を持ってこいって行ったのは貴方でしょう？」
　ノランは灰に塗れて涙ながらに訴えたが、二人の失笑を買うだけだった。
『ふん。御主が法力が在る杖だと言ったから見せてみろと言っただけ』
　黒マントの声が辺りに冷たく響き渡る。とても人間とは思えない声が。
「そんな…そんな言い方…」
「事実、その杖はワシ等には何の役にも立たん。どれだけ法力が在ろうとも、役に立たんのならば、そこらの棒切れと同じ事」
　半魚人は忌々しげに言い放つとノランを足蹴にした。思わず飛び出そうとするギゼルをミクラは渾身の力で引止めた。
「そんな、貴方だってこの杖を触って火傷して…だから私に此処に持ってこいって…」
「うるさいぞ。小娘ぇっ！」
　半魚人は足でノランの頭を灰の中に押さえつけた。その半魚人の右手には確かに火傷の跡。
「…だから、我が一族の宝、水衣を貸し与えたではないか。それを…このような灰だらけにしおって」
　半魚人はノランの手から杖を包んでいた半透明の布を奪い取ると手で灰を払っていたが、布についた灰と消し炭は綺麗には落ちなか

った。
「えぇい！　先々代の形見をこんなにしおって！　こんな布を持ってかえる訳には行かんわ」
腹立たしげに布を投げつけて言放った。
「その杖と水衣をもって消え失せろ！」
「そんな…こんな仕打ちを受けるなんて」
二人は顔を見合わせて笑った。
『村を焼き払った娘にはまだ優しい仕打ちだと思うが？』
「まったく。自分が選んだ職業が気に入らんと村を焼き払った娘とは想えん言葉だな？」
薄気味悪い声で笑う二人の前でノランは声も無く項垂れていた。
（ノラン姉ちゃんが？　村を焼き払った？）
壁の下でギゼルとミクラは呆然とノランを見ていた。
「…それは…それは貴方がそうしろと…私が選んだのは赤い石だと…その証として…村中の家の前に赤い石を置けと…そう言ったではないですか！　まさか、その石が…その石から火が吹出すなんて…」
灰の中から黒マントを睨みつけるノランだったが、半魚人に再び足蹴にされた。
「それはおまえがドジだからだろう？」
半魚人は灰の中にうずくまるノランを覗き込みながら言った。
『選んだ石が気に入らない場合は…どうするのかな？』
「おら。応えろよ」
半魚人はノランの髪を掴み、無理矢理に顔を黒マントに向けた。
「…誰にも見られずに…西の…西の森の何処かに在る…竜の…彫刻の口に入れる事…」
「そう。それを見られたら…見られたらどうなるんだ？」
「…その職業につく事。さもなくば…その職業の人に…嫁ぐこと」

アコライト・ソフィア１４（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１４／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア15（前書き）

ソフィアの後悔に人形達は…

アコライト・ソフィア15

『そして御主が引いた、いや、選んだのは？』
「どんな色の石を選んだ？」
「…黒い…黒い石」
半魚人はノランの髪を放すと笑いながら言放った。
「そう選んだのは黒い石。つまりお前は黒魔導師か傭兵か風来坊…そういう風に一所に留まる事の無い職業になるか、そいつらの所に嫁ぐしか無い訳だ。俺が…お前が竜の彫刻の口に黒い石を入れるのを見・た・か・ら・なぁ？　そして、見られた時の無効の方法を教えて、やっ・た・ん・だ・よ・なぁ？」
ノランは泣きながら、涙で顔をくしゃくしゃにしながら訴えた。
「それは…それは貴方達が…示し合せて…げふっ」
半魚人はノランをもう一度、足蹴にして静かに言った。
「自分のした事を棚に上げて、他人様を疑っちゃあ、いけないなぁ。ねぇ旦那」
半魚人に呼び掛けられて黒マントはゆっくりと頷いた。
『それから竜が居ると嘘をついて剣士やら傭兵やらを呼び寄せたな？』
「そうそう。その人達はどうなったんだ？」
ノランは二人を指差して叫んだ。
「竜が居ると…竜退治の依頼をしろと言ったのも…その人達を…あの人達の魂を残らず吸い取ったのは貴方達です！」
ちょっとした沈黙の後、黒マントは静かに言った。
『そうだ…魂を吸い取ったのはワシ達だ』
「だが…呼んだのはお前さんだぜ？」
半魚人が続けて言った。ノランに躙り寄り、醜悪な息を吹きつけながら。
「それもこれもお前さんが赤い石。料理人や鍛冶屋を示す赤い石を

選べば無かった事じゃないのかい？」
　言葉も無く項垂れるノラン。
「まったく、鍛冶屋の女房になるのがそんなにいい事なのかね？　許嫁と言うのも考え物だねぇ？　そうだろ？」

　ぱしぃぃぃん

　問い掛ける半魚人を引っぱたいてノランは、ゆっくりと立ち上がり杖を薄汚れた半透明の布で包んで、そしてふらふらと森の中へ歩いて消えて行った。

「いってぇ。何すんだ？　あのアマ」
『フフフフ。引っぱたかれただけで済んで良かったじゃないか。もし、あの杖で殴られたのなら例えあの小娘の力でも只では済まんぞ』
「そうですけどね…」
　笑い続ける黒マントとぼやき続ける半魚人はノランの後ろ姿を見ていたが、やがて暖炉の中に消えて行った。

２８．無力と後悔

「それからどうしたの？」
「俺もミクラも動けなかったんだ。でも、ミクラがノラン姉ちゃんを捜そうって。杖をソフィアさんに返すんだって言って…」
「ノランさんを捜したの？」
　小さく頷くギゼル。
「でも、何処に行ったのか判らなくて、…そしたらミクラが竜の彫刻を捜そうって」
「その竜の彫刻は何処に在るの？」
「西の森の中だって。そうおかあさんに教わったって言って…」
「その彫刻の処にノランさんが居ると思ったんだ？」
　ギゼルはこくんと頷いた。

「でも見つからなくて…そのうち暗くなって…一度、ミクラと逸れたんだけど、探し出して…でも、その時には…ミクラが…」
「判った。判ったわ。ちゃんとミクラちゃんを守ったんだよね。偉いわ。うん、偉い」
ソフィアはギゼルを力一杯抱きしめた。

暗い森の中で力尽きたミクラを背負って彷徨って、それでも歩き続けたギゼル。ソフィアはギゼルに思いっきりの笑顔で言った。
「お爺様には、明日、わたしから説明しておくわ。だから今夜はもうお休みなさい。ね？」
ギゼルは含羞みながら、ソフィアを見、そして不安げにミクラを見て、静かに部屋を出ていった。小さく「お休み」と告げて。

ギゼルがドアを閉めるとソフィアから笑顔が消えた。
（ノランさんが誰かに操られていた…しかもニクシーの誰かも加担している…でも）
ニクシーの全員、少なくともヌーラ姫やネゼがそういう事をしているとは思えなかった。
（領主の館…そこに何かが在るのよね）
キーファが魔岩の欠片を投げつけた翌日に、村が焔に覆われた。
（…だとすれば、ノランさんが選礼式をしたのは、キーファが森で魔岩を見た後よね）
キーファは魔岩の焔を受けて、暫く動けなかったはず…
ソフィアはその時の事を考えていたが、しかし、考えはまとまらなかった。
（どっちにしても二人が元気にならない事には…領主の館を調べるのは明日にしよう）
そう決めて、寝込んでいるミクラに近づき、熱を確かめ、布団を直すと小さく欠伸をした。

（今日は色んな事が在ったなぁ）
森の中で木の精霊と出会い、金竜と出会い、そして苦手だった飛翔術は竜から貰った竜髭靴によってむしろ得意になりかけている。
（私にとってはいい日のようだけど、御老人達にとっては厄日…だった…ね）
ノランは目覚めず、ミクラも熱を出して寝込んでいる。老人、そしてギゼルも憔悴しきっている。
（ノランさんは落ちた事とか殴られた事とかよりも杖の法力の浴び過ぎのようだから、治癒の術も浄化の術もかえって悪化させるだけだし、ミクラちゃんもここまで疲れていると術をかけること自体が命取りになりかねない…）
結局、何もできない。時に任せるしか対処方法は無さそうだ。
（これだけ法力が有り余っていても、何にも役に立たない事があるのよね…）

ソフィアは自分の無力をゆっくりと噛み締めていた。
（もう少し看病の仕方をちゃんとシスターに教わっておくんだった）
賢者や聖者ですら滅多に習得できないという浄化の術を自分の物としたソフィアはあまり治療の方法を憶えなかった。実際、どんな治療でも癒せない毒や病気、呪いの類を簡単に消し去る浄化の術は便利な術。その特殊性と便利さはソフィアを慢心させるには充分すぎた。けれども旅に出てみると実際に必要なのは、そういう派手な術ではなく地味な知識の方。
（もう一度、ちゃんと憶えないと駄目よね）
ソフィアは寺院の膨大な図書を思い出していた。
（でも、あの寺院にも、あまりそういう事を書いてある本は無かったなぁ）
寺院の全ての本を読破したソフィアだったが、やはり看病は体験が物を言うようだ。
（シスター・ルナ・ユイガンはそういう知識が豊富だったな…）

思い出すのはそのシスターとの喧嘩だけ。
（すみませんシスター。貴方の知識は私に必要な物でした）
ソフィアは杖を肩に掛けて両手を握り、目を閉じて静かに懺悔した。

窓の外の月明かりは今のソフィアには明る過ぎる。
（眩しい）
目を明けると月明かりを眩く反射する杖。杖の表面に浮かぶ紋様を指でなぞりながらソフィアは杖に問い掛けた。
（貴方は私にとって疫病神なのかしら？）
杖はソフィアの人生を大きく変えた。
（それとも私が貴方の疫病神なのかしら？）
ソフィアが居なければこの杖は、まだ綺麗に飾られているはずだった。
（…結局、似た者同士よね）
強大な法力を秘めた杖と膨大な法力を持て余しているソフィア。
（私達は周りを不幸にしているのかも）
『◎…違うよソフィア。それ違う』
ミクラの枕許からひょいと顔を出したウェンディがソフィアに言った。

29．仲間
『◎…ソフィアと出会わなかったらワタシは不幸だったもの』
『★そやで。ソフィアがおらんかったらアタイだってつまらん人生やったと思うで』

『☆そうそう、アタシらが逢う事も無かったし』
『〇まったくやで。相反する精霊同士がこうやって話でけるのは間違いなくソフィアの御陰やもんな』
ぞろぞろと枕許から出てくる人形達。
『◎…だからソフィアが周りを不幸にしていることはないんだよ』
『〇せやで。今回の事かてソフィアが居たからミクラちゃんとギゼルちゃんが見つかったやんか』
「そうかな」
『★もっとも、それは金竜のおっちゃんの御陰でもあるけどな』
『☆んでも、そのおっちゃんの試練を乗り越えたんはソフィアやで』
『〇なんや、結局ソフィアは誰も不幸にしてないやんか』
「ありがとう。みんなありがとう」
人形達の暖かさが心に染みた。
『☆そや！』
『★なんや？　急に大きい声出して、ミクラちゃんが起きるやないか』
「なに？　どうしたの？　アェリィ」
『☆あの木の実や。あの木の実が効くんとちゃうか？』
『★あの実て？』
『☆そや。なんやったか…翡翠…』
『〇ちゃう。碧玉胡桃や』
『☆なんでもええがな。とにかくあの木の実は一粒食べたら三日食べんでも平気とか言うてなかった？』
「そうだ。そういってたね」
『〇そうや。それを料理して食べさせたら二人とも元気になるんとちゃうかな？』
「そっか！」
『◎…でも誰が料理するの？』
「私がするわ！　だって、こうなった以上、私が料理するしか無いじゃない！」

『★☆○◎…それは、止めといた方が』
「どうして？」
『★いや、ソフィアが料理が下手と言う訳や無いけど…やっぱりなぁ』
『☆そや。ソフィアが料理したんは不味いという訳や無いけど…お爺さんの方が』
『○そうそう。ソフィアが料理したんを食べたら二日寝込む病人が出ると言う訳や無いけど…お爺さんのシチュー美味かったし』

アコライト・ソフィア１５（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１５／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア１６（前書き）

静かな時が流れる…

アコライト・ソフィア16

「アンタ達…」
ギロリと睨むソフィアと視線を逸らし、知らん振りするサーラとアェリィとノーラにウェンディが言った。
『◎…みんな、それ違うよ』
「あらっ。やっぱりウェンディは私の味方よね～」
『◎…ソフィアの料理で強靱な兵士さんが寝込んだのは、五日間だよ』
「…あら」

30．碧玉胡桃

ソフィアが料理をしようと聖魔絹の手袋を着けながら下に降りたのは東の空が白み始めた頃。ノランを観ていた老人も疲れたらしく居眠りしていたので起こさずに台所に入った。
『★…なんや、爺さんだったらコイツの料理法、知ってると思ぉたんに…』
「いいじゃない。それよりもお疲れなんでしょうから寝てて貰いましょ」
『☆まぁ、生で食べても問題無さそな事、言ってたから』
『〇誰が？』
『☆アィヒェ…の婆さんの方』
『〇んでも、木の精霊と人間とは…』
「まぁ…煮たら、アクがとれるからたぶん大丈夫でしょ」
『〇そやな。出来上がったもんの毒を調べたらええことやし』
昨夜の残りのシチューに碧玉胡桃に砕き入れ、他の野菜を刻み入れる。水を足して煮込んでいると、老人が起きて来た。
「どうなされた？　おや？　何やら変わった香り…これは？」
「碧玉胡桃という木の実です。ご存知ですか？」

「知っているも何も…ものすごく美味いと聞いている。じゃからして、取り過ぎて無くなってしまったと…」
「三個だけ森の精霊達に頂きました。若木も育ってましたから、ギゼルくんとミクラちゃんが大きくなった頃にはまた実を採りにいけると思いますよ」
「そうか。あの森の中になぁ…」
『☆爺さん。なんか思い出でもあるん？』
「あの森の奥の方は行った事がないが手前の方はワシの爺さんとかが植えた森なのじゃよ」
『○…そういや、そう言ってたな』
「誰がじゃ？」
『○アィヒェ婆さん…て精霊やけど』
『★精霊の事、言っても爺さんにはわからんやん』
「ふぁふぁふぁ、お前さん方は精霊が見えて便利じゃのう」
老人の言葉に人形達は顔を見合わせて言った。
『★☆○◎…そうでもないよな』
「どうしてじゃ？」
『○なんか向こうにもこっちが人間やないから目立つらしいし』
『★それで、よく勘違いされて攻撃されるし…』
『☆…まぁ、馴れたけどなぁ』
「ふぁふぁふぁ。まぁ、禍福は昼夜の如しじゃ。いい事も在れば悪い事も在る、じゃが明けない夜は無いし暮れない昼も無い。その時その時を一生懸命に生きていくんじゃよ。これは、ワシの爺さんの口癖じゃけどな。いい言葉じゃろ？」
『◎…うん？』
『★…？　どっかで聞いたような？』
「そうか、お前さん方の世界にもそういう言葉が在るんじゃろうなぁ」
「さて、できたわよ」
話している間に煮込んでいたソフィアが小皿に一口、装ってノー

ラに預けた。
『〇…うん。毒はないで…味はイマイチやけど。不味くもないで』
『★☆◎え！　…不味くない？』
「どれ。ワシにも下さらんか…ふむ。普通の味じゃな。まぁ、人の話は尾鰭がつくからのう。この味で無くなるほど取りつくされるとは思えんから、無くなったのを味の所為にしたんじゃろなぁ」
（★…ちゃうな。元々はやっぱり、ものすごく美味いんやな）
（☆元がじぃさんが作ったシューなのにな）
（〇それをソフィアの腕と相殺して…）
（◎…それでもイマイチなん…凄い）
（★☆〇…なにが？）
（◎…ソフィアの腕前）
　人形達は小声で確認し、頷きあっているのをソフィアは横目で睨んだ。
「…聞こえてるわよ」
　人形達はソフィアのギロ目を振り返らずに台所の外へ逃げた。
『★ノランさぁん。スープでけたで～』
『☆ミクラちゃんもそろそろ起きよ～』
『〇ギゼルくんも起きようで～』
『◎…お爺さんも食べよ』
「ふぁふぁふぁ、いい仲間達じゃな」
「ええ。まぁ…何を誤魔化しているんだか」
「心配無い。そう腕は悪くは無いと思うぞ。その証拠にワシも元気が出てきたからのう」
　笑いながらシチュー皿を取り出して老人は出て行った。後に人形達の会話から自分の料理の腕前が判ってしまい赤面しているソフィアを残して。
　ノランの口にシチューのスープを含ませると、青白かった顔色に薄くピンク色が戻り意識が戻ってきた。そして薄く目を開けてソフ

ィアの姿を確認するとノランは涙をポロポロこぼした。
「あぁ、ソフィアさん。…ごめんなさい。ごめんなさい…私。私、どうしようも無くて…貴方の事…ごめんなさい…」
ノランが何を言おうとしているのかは既に痛いほどに判っている。騙されて人を傷つけ、そしてそれを理由にまた騙され利用されていた。その事を自分で判っていながらも続けていた事…
「いいのよ。わかってる。今は元気になる事が貴方の仕事よ。ね？」
ソフィアはノランの髪を整えながら笑った。
ミクラもシューのスープを少し含ませるように飲ませると顔色が戻ってきた。やがて目を開けてソフィアとギゼルの姿を見、そして壁に立てかけてある杖を見て安心したように笑った。
「ギゼル…見つけてくれたんだ…逸れた時、寂しかったぁ…ソフィアおねぇちゃん…杖、見つかったんだ…よかった…」
力無くも笑いかけるミクラの手を握り締めてソフィアはミクラに笑いかけた。
「うん。ノランさんがね見つけてくれたんだ。布団の間に挟まってたんだって。おねぇちゃんドジだから忘れてたみたい」
ソフィアの言葉にちょっと吃驚していたミクラだったが、ソフィアが目配せすると、やがて判ったようだった。
「そうかぁ。おねぇちゃんてドジなのね」
きゃははと笑い合う二人を見てギゼルと人形達は首を傾げていた。

31．静かな時

昼頃になるとノランもミクラもかなり元気になって来たがまだ寝床から立てずに暖炉の部屋で休んでいた。老人とギゼルは一緒に昨夜の疲れが取れないようで眠っている。
ソフィアはノランの代りになって家の掃除をし、洗濯をすませて洗濯物を干していた。
「よしっ。これで全部ね」

物干場で風にはためく洗濯物は珍しく晴れきった空に映えて心地好かった。
「う～ん。今日はいい天気ね」
『★なぁソフィア』
「なぁに～？」
『☆洗濯した時、浄化の術を使ったやろ？』
「バレてた？　でもちょっとだけよ。それに、その方が綺麗になるし、瘴気避けにもなるし、変な病気にも罹り難くなるじゃない」
『○掃除の時は時元修復の術を使ってたし』
「だって、かなり傷んでたし…廊下」
『★そういうのって確か寺院では禁じられてたんやなかったか？』
「ここは、寺院じゃないからいいのよ」
『☆そういう問題か？』
「そういう問題よ。この物干場にだって浄化の結界張ってるし…」
『○それは瘴気から守る為やないん？』
「違うわよ。洗濯物が埃で汚れないように…」
ばきっ！
「痛ったぁ～。いいじゃない。干している間に汚れるのってショックが大きいのよ」
『◎…ソフィアって、そんなに主婦っぽかったんだ』
「いいじゃない。それが洗濯物の基本原理よ」
『★☆○◎…聞いたことないなぁ』
「…ほっときなさい」
ソフィアは人形達とのやり取りの間もずぅっと空と洗濯物を見ていた。
『★☆○◎……』
人形達はソフィアの横顔に安らいでいる事を感じ、何故か不安になった。
（★☆○◎…旅に疲れたんやろか？）
『☆ソフィアって洗濯好きだったっけ？』

「そうでもないけどね…まぁ料理よりは楽かなと」
『〇掃除は？』
「寺院に居た時は好きじゃなかったけどね。まぁ、料理みたいに難しくないし、綺麗になるのは…まぁ浄化の魔法と同じようなもんだから、私の基本なんでしょ」
ソフィアは椅子に腰掛けて目を閉じた。
「……」
そのまま黙り込むソフィア。
『◎…ソフィア。旅に疲れたん？』
ウェンディが恐る恐る聞く。サーラやアェリィ、ノーラもじいっとソフィアを見ていた。
『◎…ソフィア？』
ウェンディが顔を覗き込むと、ソフィアは目を閉じたまま黙っている。
ウェンディはサーラ、アェリィ、ノーラと見合わせ、そして、決意を固めてから言った。
『◎…そだね。暫く、ここで過ごすのもいいと思うよ。今までずっと旅してたし、お爺さんとか優しいし…』
「……」
『★…ソフィア？』
人形達が黙り込んでいるソフィアの顔を覗き込むと…
「うぅぅん…すぅぅぅぅ…ふぅぅん」
軽い寝息。
ソフィアは転た寝していた。
一斉にこける人形達。
こけた音でソフィアは微睡みから醒めた。
「ふぁぁいっ。うん。ちょっと寝ちゃったわ。あら、どしたの？みんなでお昼寝？」
背伸びをして人形達を見やると皆、倒れていた。
『★…あのね。なんか決意して聞いたんがバカらしいわ』

ソフィアはきょとんとしている。
「なにか聞きたかったの？」

アコライト・ソフィア１６（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１６／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア17（前書き）

強制召還っ！　ソフィアは領主の館跡へ…

アコライト・ソフィア17

『☆えぇっとね…領主の館跡にはいつ行くん？』
「…そうね。ミクラちゃんとノランさんが元気になったら…明日かな？」
『〇明日？』
「そうよ。結局…多分、瘴気はその人達の仕業だと思うけど、今の所、瘴気を出しているしか悪さしてないし。これ以上、ノランさんを呼び出す事も無いでしょ。ノランさんも行かないだろうし」
『★☆〇まぁ、そかなぁ』
「だから、ゆっくり力を溜めてから懲らしめに行きましょ」
ソフィアは空を見ながらゆっくりと指を鳴らした。その表情には静かに決意と気合いが漲っている。
決意の程を感じとって人形達はたじろいだ。
（★☆〇…ソフィアが暴れる気やで）
（◎…また、壊しまくるのかなぁ）
「なんか言った？」
ソフィアのジト目に人形達はびびって話題を変えた。
『★な、なんで、さっきノランさんの事、かばったん？』
「ノランさん？　…あぁ、ミクラちゃんとのやり取りね。別に荒立てる事も無いでしょ。ミクラちゃんもノランさんの立場は判っただろうし。ご老人の気をこれ以上には…」
『☆でも、納得してないんとちゃうか？』
「どうして？」
『〇だって、騙されてたにしても、ノランさんがミクラちゃんの両親を…』
「しっ。誰か来たわ」
ソフィアがアェリィの話を遮って物干場の入り口を見やるとちょうどギゼルが顔を出した。

「あら。ギゼルくん。どうしたの？」
「ミクラが…ノランねぇちゃんが変なんだ。ちょっと来て！」

３２．強制召喚

下に降りて廊下を通り抜けると暖炉の部屋。
その部屋のソファで寝ているノランとミクラの所に辿り着いたソフィアは息を呑んだ。
今朝方、碧玉胡桃のスープで体調を戻した筈の顔色がおかしい。普通の肌色にまで戻っていたが、今は真っ青に蒼ざめている。
「…そんな。あのスープには毒は無かった筈…」
「それは間違い無い。一緒に飲んだワシ等が何にも無いのじゃから…」
老人も青ざめてノランの手を握り締めている。
ふと、ノランが目を醒まし辺りを見回した。

しかし、その表情には恐怖だけがあった。

「ここは？　ここは何処なの？」
「ここはワシ等の家じゃ。どうしたノラン。大丈夫か？」
「違う。ここは家じゃない。ここは祭壇？　おじいさん？　何処に居るの？　聞こえるけど見えない…」
「ここじゃ。お前の手を握っているぞ」
「手…？　嫌だ、何にも感じない。」
「ノラン！」
「ノラン姉ちゃん！」
「ノランさん。気を確かに！」
「あぁ。おじいさん、ギゼル、ソフィアさん。…助けて。　おねがい…」

ふぅっと、まるで空気に溶け込むようにノランの姿は消えてしま

った。後に残ったのは、かけてあった毛布だけ…

「そんな、消えてしまった…」

「そうだ、ミクラ！」

ギゼルの声に弾かれたようにミクラを見ると…

「ミクラ…」

ミクラの体は布団を被ったまま宙に浮いていた。

「ミクラちゃん？」

ソフィア達は立ち止まったまま動けなかった。老人も言葉も無く立ちつくすしかできなかった。

ミクラが振り絞るように叫ぶ。

「おねぇちゃん？　助けて…体、動かないの…変な焔が見える。誰？　…そこに居るのは？」

「ミクラっ！　今、助けるぞ！」

ギゼルとソフィアは浮いているミクラを掴まえようと近づくと同時に、ミクラの体は回転し始めた。

「ぎゃあっ！」

「きゃおっ！」

ギゼルとソフィアが掴んだのは布団だけ。弾かれて二人とも壁に飛ばされてしまう。

「ミクラちゃん。ちょっと待ってて！」

立ち上がろうとした時、ミクラの体は声と共に消えてしまった。

「きゃあぁぁあぁぁぁぁぁ…」

「ミクラぁぁぁぁ！」

ギゼルの叫び声はミクラが消えた後の静寂を際立たせるだけ。そして…静寂を破ったのはソフィアだった。

「…私、取り返してきます」
立ち上がり、自分の荷物が置いてある部屋に向かった。
ソフィアには消えた理由が判っていた。
（…あれは強制召喚法術。嫌がる人を勝手に召喚するなんて…）
召喚術の中では難しい部類に入るこの術を使う以上、相手の力量はかなりの物と推測された。が、それ以上にソフィアは怒りを抑えきれずにいた。
（年端も行かない女の子を勝手に召喚するなんて…）
召喚した理由も想像できた。
（許さない！）
ギゼルが聞いたノランと黒マントの話。
《魂を吸い取ったのはワシ達だ》
何らかの理由で魂を集めている者達。
そのために村を焼き払った。
そのために瘴気を放ち、木や精霊の命を削り続けた。
そのために竜退治の依頼を…
そのために…そのために…
ソフィアの中で様々な出来事が一本の糸になって繋がった。
「許さない！」

ソフィアは荷物の中から袋を取り出すと、様々な装飾品を取りだし、身に着け始めた。
聖魔絹で作られ銀糸で呪紋様が飾られた白魔導師のローブ、ロンググローブ。銀地金に水晶で飾られたブレスレット、アンクレット、胸にブローチとネックレス、ピアス、髪飾り、そして額に一際大きい水晶を飾りたてたブローチ。
ブローチを下げる鎖にも水晶の飾りが下がっていた。
そして、それら水晶の中に刻まれた呪紋様は服の呪紋様とソフィアの法力に共鳴して眩く虹色に輝いている。
最後に金竜から授かった盾と竜髭靴。
杖を持ち、形見の刀身が入っている袋鞄を背負った。

部屋を出ると暖炉の部屋で呆然としている老人が居た。
深々と頭を下げて決意を告げる。
「私の力不足。注意不足で、このような事になりまして…すみません。これから二人を連れ戻しに参ります」
言い終るより早く、ソフィアは家を飛び出した。未だ見ぬ敵へと。

33・領主の館

空を飛び、館の焼け跡につくと真っ直ぐに暖炉に向かう。
暖炉に近づきながら右手で杖を回し、そのまま横殴りに暖炉を叩き壊す。
石の暖炉はまるで脆い土器でできているかのように砕け散った。
ソフィアは無言のまま、杖を握り直すと暖炉の床を一撃で衝き壊す。
壊し開けた穴から飛び降りると、地下の空間にふわりと舞い降りた。
ソフィアを埃っぽい湿った空気が包み、闇の中に無気味な殺気と何者かの存在を伝えた。

「ライティ！」
呪文と共に左手から飛び出した光は火花と光の粉を撒き散らして湿った空気を引き裂きながら突き進み、壁にぶつかり砕け散る。
辺り一面に飛び散った光はソフィアの周りに数多くの巨大な石像や青銅の像を浮かび上がらせる。
像は戦士や禍々しい化け物の姿をしている。
しかし、光は像以外の存在を映す事は無かった。

ならばこの殺気は？

巨大な石像達を一瞥してソフィアはふっと笑って言った。
「…いいかげん動いたらどうかしら？」
その声に反応するように一斉に全ての像が軋みながら動き出した。

動く石像、リビングスタチューとは術者が侵入者を排除する為に擬似的な生命を石像などに吹き込んだ物。当然のごとく攻撃は打撃だけだが力は強く、また、魔法防御も高い。青銅でできた物は内部に油や毒液を仕込まれ、焔や毒を吐き出す場合も多い。

石像の戦士達はソフィアに詰め寄りながら、石の剣を振りかざした。
それを無表情に見つめるソフィア。

石像が剣を振り下ろした時、ぶつかる寸前に小さく呪文を唱えた。
「…ドメイン」

ばきぃぃぃぃん

鈍く響き渡る音。
それは振り下ろした石の剣が砕け散った音。

石の剣はソフィアに届く事なく、粉々に砕け散り、そして、飛び散る石片すらもソフィアに降り懸る事は無かった。
驚く石像達。戸惑いを振り払うかのように別の石像がソフィアの脳天めがけて拳を振り下ろした。

べきぃぃぃぃん

石の拳もまたソフィアに当る前に何か透明な壁にぶつかり脆くも壊れた。
「悪いけどその程度の力じゃ、私の障壁結界を破ることはできないわ」
たじろぐ石像を押し退け、青銅の魔物の像達が取り囲み、その大きく裂けた口から焔と毒霧を吐きつけた。
が、全てソフィアの障壁結界に跳ね返される。
障壁はドーム状にソフィアの周りに在り、全ての方向からの攻撃を跳ね返す。
幾度と無く攻撃する石像達。だが、全ては無為と消えた。

障壁の中でソフィアは静かに辺りを窺っていたが蠢く石像達の後ろに目指す物を見つけた。
（…扉だ。あの向こう側に…）

ソフィアは扉を凝視しながら、石像達に別れを告げた。
「悪いけど、そろそろ終りにしましょう」

ソフィアは両手を広げ、障壁に掌をつけるとゆっくりと呪文を唱えた。
「…障壁よ、光の飛礫となり嵐の中で邪悪を打ち砕け。リィ・ダルーネ・ド」

障壁の外壁が音も無く飛び散り、小さな光の飛礫となってソフィアの周りを回り始め、やがて竜巻となって石像達に襲いかかった。

ごおぅぅぅぅ…

光の嵐の中で石像達は無機質な音を立てて砕け散り、石屑と青銅の板切れに変っていく。

光の飛礫は青銅像に仕込まれていた毒をも蒸気に変えて消していく。

やがて静寂が訪れ…

毒の蒸気と焔と油の残り香だけが石像達の名残となって地下に漂っている。

無言のまま、扉に向かって歩き出したソフィアの後ろで不意に石が軋む音がした。

「……？」

振り返ると石屑と青銅の板屑の中から壊れかけた石像が這い出てきた。

アコライト・ソフィア１７（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１７／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア１８（前書き）

黒幕が姿を顕す…

アコライト・ソフィア18

仲間の破片の中で残った義理を果たすかのようにソフィアを睨みながら這い寄る。
片手片足が肘と膝から先が砕け落ちている石像は残っている腕と足で辛うじて立ち上ると石の剣を振りかざした。
「…どうぞ」
振り下ろした剣は石像が姿勢を崩し倒れかけた為にソフィアに当る事なく地面を叩き、砕ける。再び起き上がろうとする石像の頭に手をあててソフィアは呟いた。
「…忠実なる魂よ。今ここに呪縛を離れ、天に召されよ」
手から放たれた光が石像の中を透り抜けると、石像はバラバラに崩れ落ち、動きを止めた。
「…さようなら」
ソフィアは扉を開け中に入る時、石像達の部屋に紫色の光珠を放ち、扉を閉めた。

34．実験室

扉の中は細長く曲がりくねった廊下。
廊下の壁や天井に微かに光る光苔。淡き苔の光で判るのは廊下の両側に扉の無い小部屋がずっと奥まで並んでいる事だけだった。
ソフィアはすぐ近くの部屋の中を窺う。
部屋の壁一面に棚が設えてあり、棚には大小様々な硝子の瓶。天井と床の光苔の灯に微かに照らし出されているのは硝子瓶の中の透明な液体と、その中で揺らいでいる不気味な生物。
ヘビの頭を持つ鳥。翼を持つ魚。八つ目のトカゲ…
「キメラ？」
『★ほんまや。気色悪ぅ』
サーラが背中の刀身を入れている袋鞄からひょいと頭を出した。

「あら？　居たの？」
『☆居たの？や、あらへんがな。またウチらの事を忘れてたやろ？せやろと思って刀の袋の中に潜り込んだんや』
『★んでも、さっきまでは声もかけられん程、気合入ってたもんなぁ』
『〇ほんまやで。下手に声かけたらウチらまでどっか飛ばされそうやったもん』
『◎…ソフィアとワタシ達は一心同体だからね』
「そう…そか。そだね。ありがとう」
『★ええって。それにしても気色悪ぅもんが置いてるんやな…』
『☆この並んでいる部屋に全部こんなんが在るんやろか？』
『◎…ミクラちゃん達はどっかの部屋に居るのかなぁ』
『〇行ってみよ』
「うん」
部屋の中を確認しながら進むソフィア達。
奥に行くに従って部屋の中の瓶は大きくなり中身は段々と不気味さが増していく。
『〇うぅぅ、気持ち悪さが胸一杯やわ』
『☆今夜の御飯は要らへんわ。こんなん作ったんは絶対、変質者やで』
そして、幾つ目かの角を曲がると…
『★ぎゃあぁぁ』
目の前の部屋に背の丈より大きな瓶。中には一つ目の巨人が不自然な形で押し込まれている。
『☆サイクロプス？』
「…違うわ。サイクロプスならば子供でも、もっと大きいし、仮にも神族だから、こういう風に捕まる訳が…これは…」
『〇ひょっとして人間の…人間を使ったキメラ…？」
『違う』

不意に不気味な声が響いた。

『それはホムンクルスを使った物じゃ。擬似生命という奴だが…』
「誰？」　ソフィアの問い掛けには応えずにその声は続いた。
『そもそも、生命とは何だ？　幾多の生命が生命であるという理屈と作り出された生命が生命でないと言う理屈は相容れない…矛盾しているのじゃよ…それは生命そのものの存在が矛盾しているのと同じようにじゃ』
『◎…奥の方から聞こえる。ソフィア。行こう』
「うん。落ちないように隠れてて」
人形達が襟元や背中の袋鞄に隠れると奥に向かって走り出すソフィア。
廊下の両側の部屋に垣間見える瓶には擬人的な神話的なキメラが見える。双頭のワシの顔を持つ体。腕と足が無数の蛇になったもの。腕の数が多いとか、足が鷲のような鋭いつめを持つだけのものは、むしろまともに見える。そんなもの達が見渡す限り続いている。
ソフィアがその中を走り続ける間も不気味な声は続いた。
『…擬似と言われながらも生命は生命。その生命を無限に作り出せるのならば、生命そのものはとるに足らない物。そう思わんかね？』
「思わないわ！」
『…とるに足らない命を自由に扱える者。それは神ではないか？そして、擬似ながらも生命を自由に扱うワシ等も…神ではないのか？』
「違う！　命を弄ぶ者が神ではないし、神に近い者とも認めないわ！」
『ワシ等は神に近づくために様々な実験を行った。そして、自由に命を扱えるようになり、神と同一となった。そして、その証として不死の力を手に入れリッチとなった』
幾つもの角を曲がって走り続けると、長く真っ直ぐな廊下が顕れた。向こう端に見えるのは重厚そうな扉。

「不死になるのはバンパイアでもゾンビでも一緒よ。自分でゾンビになった者を誰も神とは呼ばないわ」
『神の力を恐れぬ者よ。我が力の前に平伏すがいい』
「平伏すのはそっちよ！」
ソフィアは走り寄った勢いで扉を蹴破った。
「でぇえぃいぃ！」

35．黒法衣

蹴破られた扉はそのまま部屋の反対側の壁まで吹き飛び、バラバラに壊れた。
『ほほう。最低限の礼儀もわきまえぬと見える』
「…アナタには相応しいと思うけど？」
その部屋にはいくつもの本棚が並び立ち、さながら寺院の図書室のよう。
本棚には幾多の古文書、魔導書。本棚が並び立つ奥に小さな机が一つ。そこに黒地に金糸で飾られた法衣を纏い、椅子に座って書物を読みふける人影。その影は本を閉じると、ゆっくりと立ち上った。
『扉を蹴破るという礼儀が存在するとは聞いたことは無いが？』
ソフィアを見るその顔は法衣に隠れ、影になって見えなかったが目だけが鋭く、呪われたかのように赤黒く光っていた。
「悪人にはしてもいいのよ。知らなかった？」
鼻で笑うように言放ち睨みかえすソフィア。影はくっくっくっと喉奥で笑い両手をソフィアの方に突き出した。
『申し訳ないが、既に「人」を超越しておるのでな。そのような事は知る必要も無いのじゃよ』
突き出した掌が光を吸い込み、揺らぎ始めた。
「ならば、これから骨身にしみるぐらい教えてあげるわ」
杖を両手に持ち身構えるソフィア。密かに呪文を唱えながら。
『その言葉が実現されることは無いだろう』
掌から無数の黒き焔が蛇のように吹き出し、ソフィアに襲いかか

った。
「邪悪なるものよ。聖なる光の前に退け！　ルー・ルキュル・ルキュラ」
ソフィアは半身を返して左手を突き出し、呪文を唱えると手の前に光の呪紋様で飾られた盾が顕れ、鈍い金属音を響かせて黒き焔蛇を事も無く弾き返す。焔蛇は周りの本棚や机に喰い付き、黒い焔となって燃え始めた。
『ほほぅ。流石に言うだけの事は在るな』
「お誉めに預り光栄ですわ」
黒き焔の中、対峙する二人。
『黒蛇喰焔に本を喰わせるとはな…先程のように対魔障壁で防ごうとしたのならば壁が消えるまで…いつまでも焔蛇が待って居たものを…』
「対魔法術において白魔導師が間違うと御思いで？」
黒法衣は手をだらりと降ろし、袖の中から黒水晶の数珠を取り出した。
ソフィアは左手の盾を構えたまま、右手の杖を逆手に持ち変える。
『だが、白魔導師の悲しさよ。防御はできても攻撃はできまい？』
「どうかしら？　白魔法は最強ですから」
言い返すソフィアの言葉に、くっくっくっ、と笑う黒法衣。焔に照らし出されたその顔はまるで髑髏。不気味なミイラのような表情だった。
『…そう言えばまだ名乗っていなかったな。我が名はデオレマ・ダッド・ゲバード。リッチとなってから名じゃが』
「”死の誕生の定理”とは随分と気取ったお名前ですのね？」
『くっくっくっ…不死となり真理を追究し、そして神となる。その為に…』
「その為に幾つの命を奪ったのです？」
『奪ってはいない。形を変えただけ…変換したのだよ。ありふれた命を素晴らしき生命体に…ここまでの小部屋の中で素晴らしき実験

成果を見たのだろう？』
「アレが素晴らしい物とはとても思えませんわ」
『ほう。では、その身を持って知るがよい』
黒法衣は数珠を壁に向かって振り上げると数珠から黒い矢が飛び出し、壁に吸い込まれて行き…廊下の方から硝子が砕ける音が鳴り響く。
「…壊した？」
『違う。生き返らせたのだよ。ただし、ほんの少しの命だけでな』
「生き返らせた？」
『そう。そして、生き長らえる為に命を奪い合っている。くっくっくっ…』
廊下から不気味に蠢く音と奇妙な叫び声と…断末魔の叫び声が響き始めた。
『御主がどうやってここを抜け出すのか…楽しみじゃ』
黒法衣の姿は揺らぎ始め、やがて黒き焔の中に包まれた。
『焔蛇も本は喰い飽き始めたようじゃ…廊下にはキメラ達。さて、どうする？　くっくっくっ…逃げ道は無い。くっくっくっ…』
「待ちなさい！　ノランさんとミクラちゃんはどうしたの？　応えなさい！」
ソフィアは焔の中に消えて行く黒法衣に向かって叫んだ。
『くっくっくっ…腐泥の洞窟で儀式が始まるのを待って居るよ。そうそう、君も招待しよう。もっとも、ここを無事に抜け出す事ができればだが…くっくっくっ』
焔の中の声は小さくなって行く。
「招待なさった以上、私が行くまでは始めないのでしょうね？」
『どうかな？　淑女は時間を守るものだよ…』
声は消え、本棚の黒き焔は焔蛇の形に戻り始めていた。

アコライト・ソフィア１８（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１８／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア19（前書き）

腐泥の洞窟にいたのは…

36．焔蛇

「…随分と巫山戯た相手ね」

『★そやな。腐泥の洞窟て、西の尾根にあるとかいう腐泥の沼の洞窟の事かな？』

「そうでしょうね」

『☆ところで、こいつらどないする？』

周りを見ると本棚や机の焔が蛇の形に戻り、ソフィア達を睨んでいる。

「そろそろ、本は食べ飽きたようね」

『〇封じる？』

『◎…凍らせようか？』

「こんな相手にみんなの力を使う事は無いわ」

『★そしたら、どうするん？』

「こうするの！」

ソフィアは竜髭靴に気を送り飛び上ると部屋を飛び出した。文字通りに飛んで。

『★こ、こないな狭いとこを飛ばんでもええやん』

「時間がもったいないでしょ！」　ソフィア達は出口に向かって飛び続けた。

後ろから焔蛇が奇声を上げながら追いかけてくる。

『〇けど、この先にキメラ達が…』

最初の角を曲がるとそこに一つ目の巨人。

「ヴェ・レェイ！」

ソフィアが唱えると同時に杖の先に閃光が走り凄まじく光る宝珠が顕れた。

「ぐゅおぅおぉぉ」

暗闇に馴れた目には強烈すぎる光に一つ目の巨人は目を覆う。そ

の脇を飛びながらすり抜けるソフィア達。
『★なるほど聖火燈の魔法やな』
『〇聖火燈の光には浄化の力も在るもんな』
強烈な光と浄化の力で小さなキメラは蒸発するように消えて行く。
『☆…んでも、アタシ達も目を開けられんけど』
「ここまで来る道はちゃんと憶えてるわよ」
目を閉じながら飛ぶソフィア。
『〇化けモンはどうやって避けるん？』
「気合よ！」
『◎…え？』
青ざめる人形達。気合だけでこの先、キメラ達にぶつからずに飛べるのだろうか？
「あ、違う。気配よ。それと殺気」
『★んでも、こいつら気配、無いで』
「だから、気配の無い殺気が擬似生命のキメラの特徴よ」
『☆なるほど…あ、判ってきた』
ソフィア達はキメラ達の脇をすり抜けて飛び続けた。その後ろで、焔蛇に呑み込まれ燃えていくキメラ達。
『〇んでも、焔蛇はどないするん？　…段々、大きくなってきたで』
焔蛇はキメラ達を呑み込みながら成長していく。数多く居た焔蛇も次第に数が減り今は一匹だけになり既に胴は廊下の幅いっぱいの大きさになっている。
『☆合体しているし…強力になってるな』
「そうね。最後ぐらいは御相手しましょ。やあっ！」
最初の扉の前に辿り着くと地面に降りて、ソフィアは杖の先の光の宝珠を黒き焔蛇に投げつけた。
「どう？　聖火燈の御味は？」
それを事も無げに呑み込み、何事も無く進み来る焔蛇。
「…あら？」
『★「あら？」やあらへん！』

『☆どないするんやっ？』
「こうしましょ」
ソフィアは両手を突き出すと呪文を唱えた。
「…ルキュル」
両手から光の呪紋様で飾られた盾が地下道いっぱいに顕れた。焔蛇は呪紋様の盾にぶつかり弾き返され、地下道で悶えている。そして、向き直っては盾に向かって牙を立てるが、その牙も盾を傷つけることは無かった。
「この盾を霊体のまま、すり抜ける事はできないわ。邪悪な焔蛇さん。霊力がなくなるまでそこにいなさい」
『☆…なんや、こいつ霊体の焔なん？』
「そういう事。さぁ、行きましょ」
扉を開けソフィア達はホールに出た。そこには石像と青銅の像が並び立っている。
『○…あれ？』
『☆さっき、壊したんやなかったん？』
「取り憑かせた魂を浄化したんだもの。像は直しておかないと…」
ソフィアは天井の暖炉の穴の下を目差して歩き始めた。
『★時元修復の術を使ったん？』
「まぁね…それが、礼儀でしょ？　…えっ？」
その言葉が終る前に後ろの扉が燃え出す。振り返るソフィアの目に映ったものは…
『○焔蛇！』
先程まで大きさは無いものの扉を喰い破った焔蛇が、ゆっくりと迫ってくる。
『★なんでや？』
『☆霊体だけや無かったんか？』
慌てて逃げ出そうとするソフィアの前の戦士の巨大な石像が動き出した。
『○な、なんで動くん？』

『◎…ちゃんと、浄化した？』
「したわよ！　その後で直したんだから」
行く手を遮られ立ち止まり石像を見やるソフィア達。ソフィアを見ながら石の剣を逆手に振りかざす戦士の石像。ゆっくりとにじり寄る焔蛇。
『☆あかん、挟まれた…』
『★何で動くんや？　この石像は！』
焔蛇と動く石像に挟まれ動けないソフィア達。そして、焔蛇が狙いすまして飛び掛かるのと石像が剣を振り下ろすのは同時だった…
「あら？」
『★あれ？』
『☆なんで？』
『〇どして？』
『◎…石像さんが焔蛇を？』
石の剣が突き刺したもの焔蛇の頭。焔蛇は激しく蠢き、石の剣と石像に焔を巻きつかせていたが、やがて焔は消えて一匹の蛇へと姿を変えた。
「蛇を媒体にして霊体の焔蛇を召喚したのね」
『☆実体分が…それだけに纏える分だけが対魔光盾を透り抜けたんか』
『★それにしても何で動いたん？　この石像』
『◎…恩を返したんじゃない？』
『〇そかな？　そんなの聞いたことあらへん』
ソフィア達が見上げる石像は剣を地面に突き刺したまま動きが止まっている。
「きっと、この像に取り憑かされていたのは不器用な剣士さんだったんでしょ。まったく…せっかく浄化したのに。天の場所が判らないで戻ってきたんじゃない？」
『◎…まだ憑いてるの？』
「もう居ないわ。天の場所を思い出したんでしょ…」

『★そか、不器用なんか…ソフィアの好みのタイプだよね』
『〇えっ？　そうなん？』
『☆だって、この前、惚れかけたんも…』
ごちっ
『☆いったぁ！』
「無駄口言ってないで。行くわよ。腐泥の洞窟に」
ソフィア達が暖炉の穴から飛び去ると、闇の中から蝙蝠がヒラヒラと飛び出てきた。その蝙蝠が触れた石像や青銅の像は音も無く崩れ落ち…蝙蝠は全ての像に触れると暖炉の穴から飛び出て行った。
後に残ったものは…地面に突き刺さった石の剣だけだった。

37．腐泥の洞窟

腐泥の沼は夜の空からは直ぐに判った。
夕日が伸ばす尾根の影の中に一際黒い場所、そこに湧き出したガスが燃えて鬼火となっている。畔に降りて見渡すと岸壁に洞窟の口が開いていた。空からは洞窟の上の岩が迫り出しているために見つけ難い場所だった。
『★ここが腐泥の洞窟か…』
『〇…硫黄が吹き出すって、この沼の事やな』
「さあ、行くわよ」　洞窟の口に立ち止まりソフィアは呪文を唱えた。
「光よ聖なる力を持て闇と邪悪を祓い賜え。ヴェ・レィ・レェイ」
ソフィアの杖の先に光の宝珠が顕れ洞窟の中を照らし出した。
『◎…さっきより、随分小さいね』
「目眩ます必要は無いし、ゾンビぐらいだったらこの光を恐れて出てこない筈よ」
杖の先の聖火燈の明かりを頼りにソフィア達は歩き出した。しかし、幾つかの枝道を調べながら進むソフィア達はなかなか、先へとは進めない。枝道と思えない道もそれが先に続くかどうかは進んでみないと判らなかった。そして、何度目かの行き止まりに辿り着い

た。
「ふう…ここも行き止まりね」
『○しゃあない。戻ろ』
『☆どっちにしろ、進むしかあらへんし…ぅおっと』
ソフィア達が元の道まで戻った時、何かが襲いかかってきた。頭上から振り下ろされた棒をソフィアは杖で防いだが、その衝撃で聖火燈は落ちて消えてしまった。
闇の中でソフィアは叫んだ。
「何者？　名乗りなさい！」
襲いかかって来た影は何故かすっとんきょうな声で応えた。
「名乗りなさいって…ソフィア姉ちゃん？」
「その声はギゼルくん！　どうしたの？」
『★ゾンビと違うんか？』
「ひでぇ。俺は正真正銘ギゼル・ゼェダー・セドルだぜ」
再び杖の先に聖火燈を点し見るとギゼルが鉢巻き、胴帷子、木の盾、鉈を持って立っていた。さっき振り下ろされたのは棒では無く鉈だった。
『☆…危なぁ。間違ったら脳天割れてたで…』
『★そこまで言わんでも…んでも危なかったなぁ』
「本当よ。どうしてこんな所に？」
「どうしてって、俺、ノラン姉ちゃんとミクラを助け出しに…そういうソフィア姉ちゃんは何処へ行ってた？　俺はてっきりこっちに来たもんだと…」
「うぅん。領主の館の方に…でも、ギゼルくんは何でこっちだと思ったの？」
「だって、竜の石像ってこの中にあるんだぜ」
『★☆○◎…え？』
「竜の石像って西の森の何処かじゃ…」
「俺もそう思ったんだけど、今日、昼前にミクラが調子良くなった時にそういう話をしたんだ。竜の石像は西の洞窟の中にあるって」

ギゼルの話は混乱してる。それはミクラが隠したい何かを示していた。
（ミクラちゃんが？　何故、隠していたの？　そう言えば…）
ミクラの亡き母親は巫女。ミクラがなりたがっているのも巫女。東の竜の洞窟に在ったのは…別の祭壇。もしも、男女別々の選礼式が行われていたのならば、男であるギゼルには知っている総て…女の選礼式の総てを話したくは無かったのだろう。
「…だから、今度、西の森で逸れたらこの洞窟の所に居るって言ったんだ…今日」

アコライト・ソフィア１９（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
１９／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア２０（前書き）

ソフィアは敵の中へと１人で…

アコライト・ソフィア20

「そっか…そうだったのね…」
ソフィアは少し涙ぐむギゼルの頭を撫でた。ギゼルは昼の出来事を思い出し、悔しがっている。身体を、いや、心を震わせて。
『◎…ところで』
「どしたの？　ウェンディ」
『◎…なんで、さっき襲ってきたの？』
「やぁね。いいじゃない、そんな事…」
疑惑の目でギゼルを見る人形達。ソフィアは明るく場を繕うとした。が、ギゼルは人形達の疑惑の視線を全く感じずに事実だけを口にした。
「俺、見たんだ…」
『○なにを？』
「半魚人達がこの洞窟を彷徨ってたんだ」
『☆ニクシー達が？』
あの黒法衣はここで儀式を行うと言っていた。そして今、その場所を彷徨いているという事は…
（やはり、ニクシー達の誰かは…少なくとも何人、いえ、かなりの数のニクシー達があの黒法衣に協力しているのは確実なようね…）
実際、沼で逢った途端に生贄にしようとした事。姫達がそれを暴挙と考えた事。それらからも推し量れる。
「それで、俺、そいつらの後をつけてたんだけど…見失って…それで…」
『★それでアタイ達を半魚人と間違えたと』
「…ごめんなさい」
「いいわよ。それじゃ…」
ソフィアはギゼルを帰そうかと思ったが、敵が彷徨いているのでは却って危険と思えた。

「…それじゃ、一緒にノランさんとミクラちゃんを取り戻しに行きましょう」
「おぅ！」
ギゼルと手を叩きあって握り締め、決意を確かめあった。
「それじゃ、先に進みましょうか」
「待てっ！　俺が先に行く」
ギゼルの決心は…いや、男の見栄は固いようだった。
「はいはい…どうぞ」
ソフィアはくすりと笑って先を譲った。

38．祭壇の上

洞窟の奥…かなり入組んだ洞窟の終端が祭壇の在るホールになっていた。天井も高く横も広かったが、奥行きはもっと広い。ホールの中央、一際高く大きい岩の上に置かれた祭壇。祭壇に続く石段は洞窟内の霊気を吸い込んでいるのか怪しい光を放っている。祭壇の背後には地下の湖。湖に流れ込む川は左側の洞穴から滝のように音を立てて、冷たい水を流し込んでいた。
その中で黒い焔が灯された篝火が祭壇の黒法衣を照らし出している。
黒法衣の動きに合わせて祈る半魚人達。
その中に猿轡をされ十字架に縛り付けられた生贄…ノランとミクラ、そしてヌーラ姫とニクシーの女性達。十字架の下に縛られ転がされているのはネゼだろう。
何語かで黒法衣が叫ぶと半魚人達はその中のニクシーの女性を一人、祭壇に持ち上げた。祭壇上の台に無理矢理に固定されながらも抵抗するニクシーの女性。しかし、黒法衣は何かを呟きながら手にした曲刀を持ち高く振り上げた。
「待ちなさい！」
黒法衣は刀を振り上げたまま声の方を見やるとホールの入口、岩棚が階段上になっている所に裸足で一人立っているソフィアが居た。

（ほぅ…焔蛇とキメラ達を退けたか…そうでなくてはな…くくっ）
密かに含み笑う黒法衣。
「御招待して頂いたのに勝手に始めるなんてマナーに反すると思いません？」
ソフィアは階段を数段降りて、左手に握る杖で黒法衣を指した。
「それに、ヌーラ姫様達もここに居るとは思いませんでしたわ」
黒法衣はヌーラ姫と目の前のニクシーの女性を見てからソフィアを見上げた。
『…ほほう。ヌーラ姫と知合いなのかね？　彼女は私達に協力的でね。侍女達共々、我等の神に命を捧げて下さるそうだ』
「…あまり、協力的な格好には見えませんけど？」
『それは命が変換した時にそう思うのだよ』
「勝手な事を…」
ソフィアの瞳に怒りの光が宿っていく。
『何をそう怒っているのかね？　ああ儀式を始めた事かね？　あまりにも遅いものでな。勝手に始めてしまったのだよ。しかし、確かにマナーに反するな。謝罪しよう』
黒法衣は刀を降ろし、そのまま胸にあて、軽く会釈した。
そして、骸骨に干からびた皮だけを貼り付けたような顔を上げ、ソフィアに提案した。
『どうかね。君も参加しないかね？』
眼窩の赤黒い光がソフィアを睨む。
「謹んで御断り致しますわ」
ソフィアは左足を一段降ろし、左手に握る杖を水平にして半身に構えた。
『それは残念だ。君が参加して頂けるのならば代わりに彼女達を家に帰そうかと思ったのに…』
くっくくくっと笑う黒法衣をソフィアは眉を顰めて見ていたがふっと笑い応えた。
「その言葉は信じられませんわ。だって貴方は嘘つきですもの」

『ふぁははははぁ…どうしてこの私が嘘つきなのかね？』
「…先程、私を『平伏させる』と言いましたけど、まだ私はしていませんもの？」
『ん？　ふっ…ならば、今すぐ平伏せさせよう。捕まえろ！』
黒法衣に指示されて半魚人達は手に三叉槍を持ち、ソフィアににじり寄っていく。
『あふぁはぁはは。どうする事もできまい？　「攻撃は最大の防御」と言うとおり、こちらには手も出せまいが？　白魔術には攻撃呪文はないのだからな？』
勝ち誇るように笑う黒法衣にソフィアはくすくすと笑い出した。
『気でも狂ったのかね？』
「ふふん。『防御は最良の攻撃』とも申しますわ。それに白魔法師でも黒魔法の攻撃呪文は使えますのよ…初級レベルの物ならね」
『ふっ…初級レベルならば問題にもならん。精々、片手ぐらいを痺れさせるだけだろう？』
「どうかしら？　御験しになります？」
ソフィアは呪文を唱えて右手を振り下ろす。指先から術によって生じる風の鞭。鞭は風を巻き、雷を発し、半魚人達に凄まじい電撃を与えた。
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…ぁ…ぁ…ぁ」
叫び、痺れ、崩れ落ちる半魚人達。
『なにぃ？』
「どうです？　私のボォルテ・ウィップは？」
ソフィアの初級黒魔法の電撃鞭は半魚人の一塊を痺れさせ戦闘不能にしてしまった。
（☆凄いわ…今のこの姿でのアタシの天雷撃並みやわ）
（★天雷撃？　テスラって、電撃系の最高級魔法やろ？）
（○静かなようで法力全開…かなり来てるで、ソフィアは）
（◎…さあ、ソフィアが敵の気を惹きつけてる間に早く）
（ちょっと待て。歩きづらいんだよ。この靴）

ソフィアが黒法衣達の相手をしている時、ギゼルは竜髭靴の力を借りて洞窟の天井を歩いていた。鍾乳石の影に背中の竜の盾で隠れながら敵に気付かれる前に祭壇まで行きノラン達を助け出す。それがソフィアとギゼルの戦略。
（しかし、あんな力があるんだったら、正面から行っても良かったんじゃ…）
（★あかんて。いくらソフィアでも人質を取られたら、身動きでけんし）
（☆そうそう。アタシらはノランさん達のロープを切って一緒に逃げるだけでええんやから）
（○そしたら、後はソフィアが敵をシバキ倒すから）
（…なんか、卑怯っぽいなぁ）
（◎…卑怯なんはアイツらだよ。ワタシ達は御姫様を救い出す忍者だよ）
（…そか。忍者か…格好いいな）
（★そうそう。正義の味方はどんな格好でも格好ええんやから…）
（そうか…よしっ行くぞ）
しかし、背に楯を付け鍾乳石に捉まりながら天井を這いつくばって進む姿は良く言って兜虫。悪く言うと…ゴキブリのようだった。
（★☆○◎…男の子って単純やわ）

39．基本魔法

『くっ！　ならばコイツらはどうだ？』
黒法衣がさっと手を挙げると脇の洞穴から不気味な音が響き出した。
ギ…ギシッ…ギ…
やがて、姿を顕したのは骸骨の戦士達。
骸骨達は痺れ転げ回る半魚人達の間をゆっくりとソフィアに向かって歩いて行く。中には骸骨になりきれていないゾンビのような死体の戦士も居る。恐らく、竜退治の依頼に集まり魂を吸い取られ朽

ち果てた剣士達を操っているのだろう。不死の戦士達は動きは緩慢だが不死故の防御の高さに大抵の者は打ち破られてしまう…

『ふあはははは…コイツらには電撃は効かんぞ？　ふぁはははは…』

笑う黒法衣にソフィアは醒めた目で呆れたように言った。

「…あんた、馬鹿ぁ？」

『なにぃ？』

「私の職業は？」

いきり立つ黒法衣にソフィアは問い返した。

『…白魔導師』

何故か素直に応える黒法衣。

「その職業の普段の仕事は？　使う術は？」

『治癒…治療と除霊や鎮魂…悪霊祓い』

「この骸骨の戦士は何故、動いてるの？」

『そりゃ、骸骨に霊を取り憑かせて…あ』

…ぎ

一瞬、動きが止まる骸骨達。

「つまり、除霊したら…ただの骨になる訳よね」

『…そういう…事…だな』

「わざわざ、私の得意な術を使わせて貰えるなんて…なんて親切なんでしょ。見直しましたわ」

ソフィアは黒法衣にウィンクしてから杖を両手でくるくると回し始めた。

『…えぇい。術を唱える前に倒してしまえ！』

「やぁよ。だって、術なんて唱えないもの」

『？　…なにぃ？』

ソフィアは杖を片手で回したまま骸骨達の中に飛び込んだ。

「スケルトン・ソルジャーは打ち砕くに限るわよっ」

まるでダンスを踊るようなステップで骸骨達の刃を躱しながら、敵の間を縦横に動き、杖で砕き壊していくソフィア。戦うというよりも逃げ惑う骸骨戦士達。だが、それでも戦闘自体は本来が戦士や剣士だっただけに長けている。やがてソフィアは骸骨達に取り囲まれ、身構えるだけになっていた。

ソフィアの足元には砕け散った骸骨の成れの果ての骨片。

『…ふふふ。調子に乗り過ぎたようだな…』

「何の事かしら？」

『足元を見るがいい。その骸骨達には再生能力を与えてあるのだよ…』

骨片達はふわりと宙に舞い出し、渦を巻きながらソフィアの周りを飛び始めた。

アコライト・ソフィア２０（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２０／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア２１（前書き）

まだ操られていた…

アコライト・ソフィア21

『骨に包まれて、骸骨戦士の糧と成るがいい。ふぁはははは…
…はぁ？』
黒法衣の笑いはあっさりと止まった。
ソフィアを包んだ骨片は光り始め、やがて雪が融けるように、霧
や霞が晴れていくように消えてしまった。
『な、なにぃ？』
「…そう言えばまだ自己紹介していませんでしたね」
ソフィアは黒法衣が居る祭壇に向き直り、服装を直した。
「我が名は、ソフィア・フレイア。アィルコンティヌ寺院のアコラ
イト。基本魔法はピュアリィ、つまり浄化でございます」
『なにぃ…聖者でもろくに憶える者が少ない浄化の術がベーシック・
マジックだと？』
「…ということで。序でながら、この杖も自ら法力を持つものです
から、私が打ち出す打撃自体が浄化の力を持ってますの」
にっこりと笑いかけるソフィアに骸骨達は後退りをし始める。
今は黒法衣も半魚人達も骸骨達もソフィアを睨むしか仕方がなく
なっていた。

４０．救出
「さて、もう終りかしら？」
ソフィアは黒法衣に問い掛けながら、ちらりと天井の鍾乳石の間
のギゼルを見た。
（そろそろいいかな？）
心で人形達と話すソフィア。
（◎…いいよ）
ウェンディは水糸を出すと祭壇の上辺りの鍾乳石に投げ結んだ。
（○ギゼル。覚悟はええか？）

（おう！　いつでもいいぞ！）
（★おしっ！そしたらやろうで）
（☆ソフィア。頼むで！）
（任せて！）
祭壇上の黒法衣を杖で指してソフィアは叫んだ。
「ところで、貴方の御名前は聞いてませんでしたわ。教えて頂けます？」
『なにぃ？　言った筈だが？　憶えていないのならばもう一度言おう。我が名はデオレマ・ダッド・ゲバード…』
「…の偽者さんね？」
『な…』
指摘され、言葉につまる黒法衣。
その時！　上から奇声を発し、黒法衣目掛けて飛び降りるギゼル。
「おりゃりゃりゃりゃりゃあぁぁぁ…」
水糸に捉まり、振り子のように祭壇めがけて降りていくギゼルは黒法衣に蹴りを出した。
『ひぃっ！』　慌ててしゃがみ込む黒法衣。
「おりゃあぁ……ありゃ？」
ギゼルの蹴りは空を切り、降りてきた反動でそのまま向こうへと振り上がる。
『…なんじゃ？　あれは？』
上へと遠ざかっていくギゼルを見て唖然とする黒法衣。
「…ノランさんとミクラちゃんを返して頂きに上がったのよ」
思わず下を向き、頭を抱えるソフィア。
『…確かに上がったな。天井に…』
見上げる黒法衣に、気を取り直し、髪を振り上げて毅然と問い直すソフィア。
「とにかく、貴方は誰なのかしら？　仮面を取りなさい！」
ソフィアは指先に絡んだ髪に術をかけ、霊精で固めて黒法衣に投げつけた。

『おうっ！』
霊精で固まり水晶のような針となった髪は黒法衣の眉間に突き刺さり、仮面を二つに割った。
「…しまった」
仮面の下から顕れた顔は間違いなく普通の人間。初老の…不自然ながらも若々しい雰囲気を持った…ただの男だった。
どよめく半魚人達。
『誰だ？』
『人間だぞ！』
『デオレマ様はどうしたのだ？』
「…少なくとも、リッチ、つまり幽体では無いわね。どなたかしら？」
「ううっ。憶えておれ！」
祭壇の裏に飛び降りようとした時、ギゼルが天井から帰ってきた。
「おりゃあ！」「ぐぎゃ」
今度は見事に蹴りが決まり、祭壇を転げ落ちる偽黒法衣。はしゃぐギゼル。
「やりぃ！」
が、蹴った衝撃か、水糸が結わえてあった鍾乳石がポキっと折れてしまった。
「あ？…ひゃあいっっ！　てっいたっ！　痛ぁたたぁぁ…」
偽黒法衣に続いてギゼルも壇上の侍女共々祭壇の階段を転げ落ちてきた。
偽黒法衣は勢いよく岩壁まで転がり頭を壁に打ちつけて気絶している。そしてギゼルと侍女が転げ落ちた所は祭壇下のノラン達が縛られている十字架の所だった。
「いててて…ん？」
気絶した侍女の胸の下敷きになっていたギゼルは…何故か真っ赤になる。
「…あっ、ミクラ。大丈夫か？」

ギゼルは頭をさすりながら、侍女の下から抜け出してミクラが縛り付けられている十字架に近寄り声を掛けた。
ミクラはギゼルを涙いっぱいの目で見ているが猿轡のためか声が出ない。
「…不可抗力だよ」
何故か変な釈明をするギゼル。
「ギゼルくん！　縄を切るのよ。早く！」
「おぅ！」
ギゼルは気を取り直して素早くミクラ達の縄を切っていく。
「よしっ、これで…ぐふっ？」
ギゼルが最後の縄を切った時、背後から首を絞めたのは…ミクラだった。

41．呪縛

「な…なに？…げふっ」
驚き、そして呼吸ができずにもがくギゼル。
「ミクラちゃん。何してるの！」
ソフィアは祭壇下に近寄ろうとしたが半魚人と骸骨達に阻まれて行く事ができない。
「ギゼル…お願い…逃げて…体が…いう事を…きかないの…」
泣きながらもその手をギゼルの首に食い込ませていくミクラ。
近づけないソフィアは人形達に声をかける。
「サーラ、アェリィ、ノーラ、ウェンディ！　何してるの？　早くギゼルくんを助けるのよ！　…どしたの？」
人形達は階段の途中で気絶している。どうやら、ギゼルが祭壇から転げ落ちた時に離れてしまったらしい。
「しょうがないわねっ！」
ソフィアは両手を頭上で交差させながら呪文を唱えた。
「死ね！」
この時をチャンスとばかりに襲いかかる半魚人と骸骨達。

「やぁぁぁぁ！」
がごぉぉぉん。
「ぎゃん！」
透明な壁に顔面を打ちつけ、もんどり打って地面に転がる半魚人達。
「やぁね。障壁結界ぐらい既に張ってるわよ」
障壁の中から外で蠢く半魚人達を横目にソフィアは両手を振り下ろした。
「届け！　ボォルテ・ウィップ！」
両手から振り出された風の鞭は、障壁を透り抜け、半魚人達を包むように左右から迫った。
「槍を地面に立てろ！」　半魚人の誰かが叫ぶ。
びしゅゅゅゅゅぅぅぅぅぅ
電撃鞭の威力は三叉槍を伝って地面に逃げ、半魚人達が痺れることはなかった。振り向くと一際長い三叉槍を持った半魚人。
「あら？　一昨日御会いしたばかりなのに懐かしいですわ。ネダさん」
半魚人はにやりと笑う。
「ほほぅ。俺達を見分けることができるとは素晴らしい。だが、得意の魔法はもう効かないぞ」
不敵な笑みを浮かべるネダにソフィアも負けずに笑い返した。
「あら。風の術は得意な方では在りませんし、ちゃんと届いて効いてますわよ。ほら」
ソフィアが指差したのは、気絶しているギゼルとミクラ。さらに奥には電撃のショックで目覚めた人形達。
「途中で皆さんが程よく威力を削って頂いた物ですから、ミクラちゃん達を傷つけずに済んだようですし、サーラちゃん達をちょうど目覚める程度になりましたわ」
「うぅぅぬ。ならば、もう一度、生贄達を取り押さえろ！　ミダル達もだ！」

半魚人達に命令するネダ。時を置かずに半魚人達は罵声を張り上げて気絶しているギゼル達に襲いかかる。その罵声が響いている中、ソフィアはネダにゆっくりと聞いた。
「あら？　ひょっとして御偉いのですか？」
「おぅよ。我が地位は将軍。ここに居るのは全て我が配下の者達だ」
ソフィアは小首を傾げた。
「将軍が姫様を亡き者にしてよろしいので？」
「ふん。あのような平和ボケた姫やネゼ侍従長なぞに従う謂われは無い！　この地の人間共を根絶やしにし、我らがニクシーの王国を築くのだ！　その為に生贄になって頂くのだからな。我が一族への忠義はちゃんと尽くしているのだよ」
「…随分と身勝手な忠義ですのね」
「ふん。貴様に言われる筋合いは無い。…しかし、随分と落ち着いているな？　あの人間共はもうじき捕まるというのに。諦めたのか？　ふん。殊勝な心掛けだな」
ふふんと鼻で笑うネダ。そのネダにソフィアは笑い返した。
「ちゃんと確認なさったら如何でしょう？」
ソフィアが後ろの十字架の方を手でひらりと示す。
ネダがソフィア越しに見ると…半魚人達は全員、伸びて山になったり、岩壁に張り付いてたりしていた。
「なにぃ？」
目を丸くして驚くネダ。
「サーラは火の精霊。アェリィは風の精霊。ノーラは土の精霊。ウェンディは水の精霊。貴方達、ニクシーさんが束になってかかっても、物の数では在りませんわ」
ソフィアの説明を聞いてもネダは俄には信じられなかった。
「しかし、どうしてこんな…あっさりと」
『★判らんおっちゃんやな』
半魚人の山にちょこんとサーラが乗っかって説明した。
『★アンタらニクシーの弱点は火やろ？』

『◎…水の術はワタシが無効化できるし』
『〇槍なんぞの攻撃はウチの結晶結界で防げるし』
『☆まとめて放り投げて壁や地べたに叩きつけたり、電撃で気絶させるんがアタシの得意な術やし』
そこまで言うと人形達は勝ち誇ったかのように腕組みしてネダを見下ろし、声を揃えた。
『★☆〇◎…ということで、当然、こうなる訳やね』

アコライト・ソフィア２１（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２１／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア２２（前書き）

敵達は互いに…

「うぅぬぅぅぅ」
「それでは、引き上げますわね」
悔しがるネダに別れを告げ、十字架の元へ向かうソフィア。その時、ホールに地響きのような声が響き渡った。
『そうは行かぬ』
『★誰や？　…ぐむっ』
サーラに水衣を被せて包み締め付けたのはヌーラ姫とノラン。
『☆何？　なんで…ぐふ』
アエリィ、ノーラ、ウェンディ達も侍女達に水衣に包まれて捕われてしまった。人形達は術を繰り出そうとしたが、水衣は法力を弾いてしまうらしく、ただもがく事しかできない。人形達を掴まえる彼女達の目は虚ろで意思の輝きはそこに無かった。
『くっくっくっ…彼女達は既に私の僕なのだよ…如何かな？　我が呪縛の術は』

42．黒幕

「どこっ？　姿を見せなさい！　デオレマ！」
『…ここじゃよ』
辺りを見回すソフィアに気絶したままの偽黒法衣が立ち上り、そして前のめりに倒れ…岩壁に映った影がそのまま黒法衣となって顕れた。その足元で呻く偽黒法衣。
『…ふん。御主が領主としてこの地に着た時から目をかけ、不老の術を掛けてやったのに…ここまで無能とは。もう…御主を生かす価値は無い…』
黒法衣が手をかざすと、偽黒法衣の体から黒い焔が立ち上る。
「う…ぅえっ？　や、やめてくれっ！　アンタが永遠の命をくれるというから従ったのにっ！　森を焼き、村を焼き、さらに道標を変

えて旅人達を…竜退治の餌につられた剣士達を…全部、アンタに差し出したのに…」
命乞いをする偽黒法衣の身体から燃上がる黒き焔は消えない。
『騒がしい。今、御主に永遠の命を授けよう。我が命の糧となって…永遠に』
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ……」
叫び声が消えると黒き焔は黒い霧となり、一塊の黒い球になってデオレマの手に収まった。
『…ふん。腹黒い奴は魂まで黒いわ』
デオレマは黒い球をゆっくりと呑み込んだ。
『…不味い…これ程に不味い魂は食ろうた事が無い…おぇ』
幽体のくせに吐き気をもよおし、しゃがみ込むデオレマ。
「姫様達、ノランさん。御免っ！」
その隙にソフィアはヌーラ姫達の元に一気に駆け寄り、杖で鳩尾を打って気絶させた。
『★ふぃぃ。助かったぁ』
水衣の中からもがき出た人形達は素早くソフィアの肩に登る。
『☆やぃ。幽霊の出来損ない！　他人を操るんはやめんかい！』
『…くっくっくっ』
不気味に笑うデオレマにネダが駆け寄って見得を切った。
「はん！　このデオレマ様はヒュドラを復活し、この地に我らニクシーの王国を築いてくださるのだ！　その為に…うわっち」
喚くネダの口にサーラの焔の球が放り込まれた。
『★うるさいで。脇役は黙っとき』
サーラは焔の球を片手で御手玉しながらネダを下目で睨んだ。
「…ふぁい」
ソフィアはデオレマを上目で睨みつけた。
「つまり…ヒュドラを甦らせる為に形振りかまわず魂を集めたのでしょう？　瘴気を放ち樹や草達の命まで削り集めて…沼に毒を放って動物達の命も…竜退治の依頼を出させて集まった人達を…その前

には何の罪も無い村の人達を！」

ぴくんと肩を震わせるノラン。

無意識ながらも自分の罪の深さに怯えているようだった。

『…そういうことだ。全ては神の力を…この私が神になった事を証明する為…神獣の中でも神に近いヒュドラを甦らせる…その為に大量の魂が必要だったのじゃよ』

デオレマは片手で懐から黒水晶の数珠を取り出した。

「…生きている人間のみならずニクシー達のような精霊に近い亜人類をも自由に操れるとは敬服致しますわ。かなり研究なされたのでしょう？　元司教様？」

『★なんやて？』

『☆コイツが元司教やて？』

『〇司教のくせに黒魔術…しかもえげつない死霊系の術を使うんか？』

「操る術は…噂に聞く『人形遣い』達が使う術に幾らかの手を加えた物。その術の根本は白魔術にある治癒の術の基本スペル。ならばアナタは元来は白魔術の使い手。つまりはこの村の元司教。違います？」

『くっくっくっ…確かにワシはこの村の司教じゃった…庭先に湧く霊泉の水を研究しているうちに気付いたのじゃよ。命の…生命の真理と言う奴にな…』

数珠を両手の指に絡ませるデオレマ。

静かに身構えるソフィア。

『…暫くの間は有頂天じゃった…あらん限りの法力を使い、法術の真理を追求し、そして極めた。極めた後に残ったのは…ただの虚無じゃった…』

デオレマはゆっくりと祭壇に向かって歩き出した。

『いかに術を極めんとも人の…ワシの命には限りが在る。そして、

それを…真理を書物に記述しても…次にそれを、その総てを理解し、さらに極められる人間が顕れるかどうか…』
「判らないじゃない」
『いいや、顕れる筈が無い！　このデオレマ・ダッド・ゲバードを越える者なぞ顕れるわけがないのじゃ！』
『〇…結局、ただの自慢かいな』
『黙れ！　ミダル』
振り向きざまに黒い焔を投げつけたが、それはソフィアの光の盾に阻まれた。
デオレマはにやりと笑い、そしてゆっくりと祭壇の階段を上り始めた。
『そしてワシは神になることにした。ヒュドラを復活させ、その力を我が物とし、神界へ移り住むのじゃ…そこのニクシーがヒュドラの復活を頼みに来た時に理解したのじゃよ。ワシは神となる運命だと言う事を』
「…なにぃ？」
デオレマの後に従い歩き、祭壇の階段の途中のネダはデオレマに問い質した。
「…ちょっとまて、お前がヒュドラの力を我が物とする？　…つまり、そうなるとヒュドラが導くスキュラは…そしてスキュラが実現すると言う我が王国はどうなる？」
その答は…ネダも気付いているらしい。既にデオレマを『お前』呼ばわりしている。
「ヒュドラがスキュラを導くのならば、その時、神界への扉が開く…その道を通って神界へ行くと言ってた…だから俺は協力したんだ…違うのか？」
『神界へ入るには資格が居る。つまり、神の力を手に入れる必要があるのじゃよ…その為にヒュドラの力を我が物とするのじゃ。その後の事はこの世での事。神界へと赴くワシには関係無い事じゃ…そうじゃろ？』

「つまり…つまり、スキュラの復活は…どうなるのだ？」
『ワシが興味があるのはヒュドラの復活とその力だけじゃよ…』
「つまり、スキュラの復活には興味が無いと言う事でしょ？」　ソフィアが先を促した。
『そのとおり。御主達の御伽話には興味が無い』
「なんだって？　じゃ何の為に俺は沼に毒の宝珠を投げ入れたんだ？　何の為にアンタのいうことを…」
『自分がニクシーの王と成りたかったからだろう？　高望みじゃよ…御主のような輩には』
心の底を侮辱されてネダは逆上した。
「おのれぇ！」
ネダは三叉槍をデオレマに突き刺した。が、槍は何事も無く通り抜ける。
『我が幽体の体にそのような物は何の意味も無い…』
デオレマはネダに片手を向けると短い呪文を唱えた。
バチッ
「ぐわぁ！」
階段を転げ落ちるネダ。それを取り囲むのは…気絶から目覚めた半魚人達。
「皆の者。アイツを倒せ。アイツは我が神を侮辱した…どうした？」
「『どうした？』だと？　さっきなんと言った？」
「沼に毒の宝珠を投げ入れたのは貴様か？　瘴気も貴様が放っていたのか？」
仲間達の鬼気迫る追求に言葉がつまるネダ。
「貴様が毒を投げ込んだのは人間だと言った」
「瘴気も人間共が居なくなったら無くなると言ったな」
「全部、嘘だったのか…」
じわりと迫る半魚人達にネダは汗を浮かべて立ちつくすだけだった。

４３．攻防

「…うぅ…うわあぁぁぁ」
思わず逃げ出すネダ。後を追う半魚人達。
「待てぇぇぇ！」
「貴様を八つ裂きにしてやるぅぅぅ」
「逃がすなぁ…」

後に残ったのは、ソフィアと人形達、そしてノラン、ミクラ、ギゼル、ヌーラ姫と侍女達と…まだ縛られているネゼ。そして、何人かの半魚人達。
そしてデオレマと動きを止めている骸骨達。
「貴方達は追いかけないの？」
ソフィアが残った半魚人達に声をかけた。
「裏切り者を捕まえるのは追いかけて行った者達で充分だろう」
「我らは姫様の近衛兵。裏切り者に騙されたとはいえ、姫様を裏切った罪はこの場で晴らす」
「…貴方達への借りもある」
半魚人達は凛々しかった。が、やせ我慢を張っているような声の細さが感じられた。
「悪いけど、貴方達の歯が立つ相手ではないわ。姫様達を連れてこの場を離れて…」
その言葉の先を遮ったのはデオレマの声。
『…時は満ちた。いま、この時よりヒュドラの召喚を行う…』
「させないわっ！」
薄笑いを浮かべながら、デオレマは両手を広げた。糸が切れて飛び散る数珠の黒水晶。
『出でよ。我が眷族！』
黒水晶が割れ、黒い霧が吹き出す。霧の中にゆらりと顕れる赤黒く光る眼。
「え？　そんな…」

アコライト・ソフィア２２（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２２／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア２３（前書き）

最大の防御結界の中でソフィアが…

アコライト・ソフィア２３

黒い霧は、ソフィア達を取り囲んでいる骸骨に重なり…そして実体化した。その姿は対魔呪紋に飾られたフルアーマーの剣士…重戦士達。

『この者達はな、ワシが甦らせた古の竜を倒した者達。剣の腕が立つばかりか、魔法をも自在に操る…言わば、不死の魔剣士デュランヌ。この者達には御主とて敵うまい？』

（デュランヌ？…伝説の魔剣士。古の書物に「…人であり人では無く剣士を越え魔導師をも越えて神に疎まれし者…」と記述されていた…伝説にしか存在しない者をも創り出したというの？）

ソフィアの脳裏に浮かぶ寺院で読みふけった書物の知識。知識は恐怖だけを連れていた。

「どうかしら？」

強気に言い放つソフィア。

『くっくっくっ…御主の弱点はすでに判っている…』

「私の弱点？」

『くっくっくっ…直ぐに判るさ…者共、かかれぃ！』

デュランヌ達は右手を高く掲げ、呪文を唱えると手に禍々しい形の魔槍が顕れ、即座にソフィア達に向けて投げつけた。唸りを上げて、魔槍が襲いかかる。

「光よ聖なる壁となり、邪悪を退けよ…メィ・ルキュル・ドメイン」

ソフィアが唱えると同時に張られる透明な障壁結界。

魔槍はその表面で跳ね返され…なかった。

剰え、障壁に深々と突き刺さった。

「なんですって？」

『くっくっくっ…それ、槍が変化するぞ』

魔槍はゆっくりとうねり、形を変えていく。

「いけない！　邪悪なるものよ。聖なる光の前に退け！　ルー・ル

キュル・ルキュラ」
障壁結界の内側にもう一つの光る呪文で飾られた壁が張られるのと、魔槍が…変化した焔蛇や氷蛇が襲いかかってくる寸前だった。
光魔障壁で防がれた焔蛇達。
しかし、再び形を…蛇に変えていく。
『くっくっくっ…御主の障壁は2種類ある…一つは物理的な障壁、もう一つは魔法を防ぐ障壁。つまり…物理的な障壁は魔術を通し、魔法を防ぐ障壁は物理的な攻撃を防ぐことはできないのだろう？くっくっくっ…もうすぐ、その魂が我が物となる…くっくっくっ…』
ソフィアはくすりと笑い、杖で地面をトンと叩いた。
「申し訳ありませんけど、この魂を差し上げる事はできませんわ」
『…その強がりももうじき終る…そら、蛇が頭を出してきたぞ…くっくっくっ』
ソフィアの頭上の光魔障壁から顔を出した蛇が焔蛇となり襲いかかると、ソフィアは片手をかざして呪文を唱えた。

44．迷宮

「…聖なる力よ、邪悪を封じよ。ロー・レキュル・ク・ラ・イン」
掌に虹色に輝く宝珠が顕れ、焔蛇を呑み込んだ。
『なにぃ？』
驚くデオレマを横目にソフィアは虹色の宝珠に障壁の中に入り込もうと蠢く蛇達を全て呑み込ませてしまった。
『…なんだ、その魔宝珠は？』
「結界宝珠…歪空間結界というのが正式名称らしいですけど？」
『歪空間？　だからなんだ、それは？』
「たぶん、私のオリジナル・マジックだと思いますわ。書物にも基本構造呪文だけが記述されてましたもの」
『…ベース・スペルだけだと？　それを何処で…いや、どうやって完成させたのだ？』
「…その基本構造呪文に浄化の呪文を足し付けただけですの…確認

なさったら？」

ソフィアは手の上の宝珠をデオレマに投げつけた。

易々と障壁を通過した宝珠を餓えた獣が突然に餌を見つけた時のように慌てふためき掴まえようと手を伸ばすデオレマの様子を冷やかに見つめていた。

（自分で…ミクラちゃん達を強制召喚した時に使ったのはこの術の応用術でしょうに…基本魔術を知らずに応用魔術だけを知っているなんて…随分と歪な知識。いや、歪だからこそ…）

ソフィアは地下の実験室を想い出した。

（…だからこそ、あのような実験を繰り返していた？）

ソフィアの疑問を余所に、デオレマは両手で宝珠を掴まえると…まるで子供が新しい玩具を手にした時のように嬉々とした様子で、繁々と眺めた。

『…これが…どうやって？　…こうか？　…いや。違う…』

デオレマは宝珠を解析しようとしたが、訳が判らないようだった。

『通常の魔宝珠は魔法を実体化する時に結晶化させ、固めた物だが…これは、宝珠自体が一つの呪文で出来上がるとは…』

デオレマの両手から白い煙が上がっている。

「ところで、デオレマさん？」

ソフィアがデオレマに尋ねた。

『…なんじゃ？　今、忙しいのじゃ。後にせい…』

「構いませんけど。手が浄化されてますが…よろしいのですか？」

デオレマの両手から激しく白い煙が上がっている。

『…なに？　…ん？　ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ』

デオレマは宝珠を放り投げた。

宝珠はデュランヌの一人に当たり、脆く割れ、壊れる。

と、中から出てきた光の蛇がデュランヌの甲冑の中に潜り込み…

『ぐぅえぇぇぇぇぇぇぇぇ…』

デュランヌの断末魔の叫び声の響きと共に光に包まれ、崩れ落ち…中の骸骨も光の塵となって消え、鎧だけが後に残った。

「…どうやら、デュランヌさんの弱点を教えて頂いたようですわ。ありがとうございます」
ソフィアは深々とデオレマに頭を下げて一礼した。
『…うぬぅぅぅ。者共かかれ！』
ソフィア達の周りにはまだ数十体のデュランヌ。
それらが一斉に呪文を唱えながらソフィア達に襲いかかった。
「…パレス」
一礼したままのソフィアが呪文の最終句を唱えると周りに透明な宮殿が一瞬、顕れ、直ぐに消えた。が、見えない壁や柱に遮られてデュランヌ達はソフィア達に近づく事ができない。
『えぇぇい、呪文で攻撃せい！』
デュランヌ達の手から焔の槍や氷の槍などが次々と放たれる。
「…ド・クノッソス」
透明な壁や柱の表面に光の呪紋が顕れ、魔法の槍を弾き返す。
そして…光の呪紋が飾られた壁や柱、床さえも静かに位置を変えていく。
壁に遮られずにソフィアを攻撃する位置に移動しても、また遮るように壁が顕れる…まるで生きているかのような防御結界。変化する槍の攻撃も突き刺さった壁が外に移動し、その内側に別の壁が顕れ、弾き返し続ける。さらに床も外に向かって動き続け、実体化した蛇を外に放り出す迷宮殿。
デュランヌ達の攻撃は全て無為と消えていく。
「どうですか？　私の対魔迷宮殿は？　どこの御城にも優る防御でしょ？」
『うぅぅぅぅぬぅぅぅ』
「前にも言いましたけど、白魔法は最強なのですから。このクリスタル・クノッソス・パレスを破る事は誰にもできませんわ」
（★んでも、広い場所でしか張れないのが欠点やけどな）
小声で呟く人形達。
（☆それにアタシらも出れんし…）

（〇相手が諦めるのを待つしか無いのも欠点やで）
（◎…でも、諦めそうにも無いけど）
周囲で剣や槍、さらには幾多の魔法で攻撃しているゾンビの魔法剣士。不死にして疲労はおろか、感情自体が無い。
（★☆〇…だよねぇ）
感情が無い以上、諦める事は無い…
「…いいじゃない。この間にノランさん達の様子を見ましょ」
今は迷宮殿の結界に守られて一息つくソフィア達だった。

45．不意打ち

『☆ほい。ソフィア。竜髭靴持って来たよ』
「あ、ありがとう。やっぱり、裸足は心許ないわよね」
『◎…ミクラちゃん達は、どうなの？』
「電撃の傷は無いし身体の異常は無さそう。だけど、操られているのが問題なのよね」
『☆ところでミクラちゃん達は気絶させたままにしとくん？』
「…うーん。その方がいいんじゃない？　起こしてアイツの言いなりになっても困るし…浄化の魔法で『糸』は切れると思うけど。耐えられるかどうか…」
『〇そんなら、ヌーラ姫さんは大丈夫なん？』
「そうね。姫様は魔法耐性が高いから…かけときましょ。ネゼさんのロープを解いてね」
『☆おっけぇ！』
周りではデュランヌ達が攻撃の手を緩めてはいなかったが、攻撃の全ては対魔迷宮殿に阻まれて、ソフィア達には何も影響は無い。
「姫様。ちょっと失礼しますね」
ソフィアはヌーラ姫を抱き起こして蟀谷に手をあてて暫く念じていた。手を盆の窪に移して…首の後ろ、うなじの辺りを両方の中指で挟んで念を込めた。
「はっ！」

ビクンとヌーラ姫の体が痙攣し、やがて、ゆっくりと目蓋を開けた。
「う、うぅぅん。なんか、体がだるい…けど…おぉぉっ、ちゃんと動くぞ！」
「良かったですね」
にっこりと笑い、ほっとするソフィア。周りを取り囲み、薄笑いする半魚人達。
その時っ！　人形達にロープを解かれ、猿轡をとったネゼが叫ぶ。
「ソフィア殿っ。後ろを！」
「え？　きゃあぁぁ！」
近衛兵と名乗っていた半魚人達がソフィアに襲いかかってきた。
「その者達は近衛兵なぞではありません！　姫様の近衛兵は、侍女達の事でございますっ」
「ヤット、隙ガデキタ」
「スベテハ我ガ神…我ガ神…でおれま様ノタメ…すきゅらガ導ク楽園…」
肩の盾と杖で応戦するソフィアだが多勢に押されて呪文を唱える時が無い。
「ぎゃあぁ！」
右肩に突き刺さった三叉槍。
苦痛に堪えかねて地面に倒れるソフィアの純白のローブが血で赤く染まっていく。

その瞬間…

迷宮殿の結界の外壁が一つ消えていった。

アコライト・ソフィア２３（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２３／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア２４（前書き）

敵の波状攻撃が始まる…

４６．反撃

『くっくっ。はぁはっはっ。どうかね？　切り札というものは最後まで隠しておく物だよ。やはり、結界の中では自分の防御結界は張る事ができぬようだな？　くっくっ…』

祭壇でデオレマが嘲笑する。その声に苛つきながら、人形達は自分達の不甲斐なさを相手への怒りに変える。

『★おのれぇ…』

『☆操られとったんかいっ！』

『〇仲間のとこに行けやっ！』

『◎…包んであげる…氷で』

駆けつけた人形達の容赦無い攻撃の前に敵となった半魚人達は一溜まりもなかった。火で焙られ、氷や岩で固められ、風で飛ばされた半魚人達は、迷宮の動く壁に突き飛ばされてデュランヌの足元に転がった。その半魚人達を剣で切り裂き、踏みつぶすデュランヌ達。敵味方の区別無く襲いかかる姿はまるで殺戮機械のようだった。

『☆味方も容赦なしに殺すんかい…』

『〇なんちゅうことや…』

『◎…この結界が無かったら』

『★アタイらも…』

人形達は呆然と結界に遮られながらも中に入り込もうと蠢くデュランヌ達を見つめた。その間にも、また一つ…結界の壁…迷宮殿の外壁が消えかけていた。

「ソフィア殿！　気をしっかり！」

「爺。何か無いのか？　このままでは…えぇい！」

ヌーラ姫は自分の水衣を引き裂き、包帯を作った。

「ソフィア殿。槍を抜きますからな。御気を確かに」

槍に手をかけて引き抜こうとするネゼを止めてソフィアは人形達

を呼んだ。
「…ちょっと…待って。サーラ…お願い…来て」
『★何？　ソフィア、何したらええん？』
「…傷口…焼いて…血を…止める…から」
『☆そしたら…跡に残るで』
「…いいの…自分で…癒せない…けど…誰か…白魔導師に…癒して…もらう…から」
『〇ソフィアの法力を上回る力を持った白魔導師でないと巧く癒せんで…』
「…いいから…焼いて…お願い…」
『★…判った』
「…では、サーラ殿。抜きますからな」
『★おっしゃあ！』
ネゼが槍を引き抜くと同時にサーラの手が傷口に当てられ、焔が傷口を焼いていく。
「ぎゃあぁぁぁぁ…」
ソフィアの悲鳴がサーラの意志を、力を挫けさせる。だが、未だ…
『★ソフィア。ソフィア…もう一回、背中の方も…堪忍…堪忍や』
サーラが泣きながら背中の傷口に手を当て、もう一度、焔で傷口を焼いた。
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…」
ぐったりとしたソフィアの傷口を泣きながら水衣の包帯で巻いていくヌーラ姫。
「すまぬ。こんな馬鹿げた事の為に…馬鹿な部下達の為に…どうして…こんな…」
ヌーラ姫の頬に手をあててソフィアが言った。
「…いいのですよ。みんなを守るのが私の、白魔導師の仕事なのですから……」
ゆらりと杖を支えにして立ち上がったソフィアの右腕は力無くだらりと下がっている。

『くっくっくっ…その傷では結界を維持する事もままなるまい？
結界が消える時…その時が御主達の最後じゃよ…くっくっくっ…』
祭壇で笑うデオレマをキッと睨みつけてソフィアは言った。
「その前に…貴方達を倒してあげるわ」
『くっくっくっ…無理じゃよ。御主にはワシ等を攻撃する手段があるまい？　ミダル達の攻撃も御主に接近した時しか使えんようだしの。御主の攻撃は杖による打撃と初級魔法だけ…デュランヌ達は叩き潰すことはできんぞ。…たかが初級魔法如きは呪紋の鎧で総て弾かれる…くっくっくっ』
ソフィアは杖を正面に見据え、呟いた。
「御願いね…」
杖を結界の中心に突き立て念を送る。杖は虹色に輝き、周囲の結界と結びつく。ソフィアは迷宮の上の結界を少しだけ開けた。次の瞬間、竜髭靴で飛び上がり、上空から結界の外に出て、開けた結界を即座に閉じる。だが、結界を残し外に出たソフィアは無防備に近い。この時とばかりにデュランヌ達は容赦無い魔法攻撃を仕掛けた。
『なにぃ？　外に出てどうやって結界を維持しているのじゃ？　…あの杖か？』
魔法攻撃を避け、飛び続けるソフィアは右肩の痛みに耐えながら気を練り、左手に虹色の宝珠を創り出す。
「…ク・ラ・イン。はぁっ！」
虹色の宝珠でデュランヌの黒い焔の球を吸収すると、くるりと地上に降りて虹色の宝珠を右手に掴み直して次の呪文を唱え始めた。
（お願い…動いて）
両手で掴んだ虹色の宝珠をデュランヌに向けようとするが右腕が動かない。
（…いいいえぇい！）
無理矢理に左手の力で右腕を動かし、両手を突き出す。
「カーマ・カノン！」
虹色の宝珠から放たれた銀白色の焔の球がデュランヌを襲い焔に

包み燃やす。
『無駄無駄…そんな焔なぞで…ん？　…なに？　何だと！』
銀白色の焔はデュランヌを燃やしつくし、後に残ったのは地にガランと転がる鎧だけ。
「…やっぱり。きゃ！」
別のデュランヌの魔法攻撃を辛うじて避けて、手に気を集め、宝珠を作るソフィア。
（早くしないと…杖の法力が…）
幾度と無く繰り出される敵の魔法攻撃を全て手の中の虹色の宝珠で吸収し、即座に攻撃してきたデュランヌへと放つ。ソフィアの魔法攻撃は確実にデュランヌ達をただの鎧へと変えていった。
『…どういう事だ？　何故？　何故じゃあぁぁぁ？』
悩み戸惑い叫ぶデオレマを横目にソフィアは虹色の宝珠を掲げながら最後のデュランヌに向かって飛ぶ。デュランヌから投げつけられる氷の槍。氷槍を虹色の宝珠で吸収し、そのまま身体ごとデュランヌにぶつかって行った。
「だやぁりあぁぁぁぁ！」
飛び散った虹色の宝珠の中から放たれた銀色の氷はデュランヌを瞬間に凍りつかせ、氷の柱を作った。そして…氷柱の中に在るのは鎧だけ。
「…やった。…間に合った」
氷柱の傍らで疲れて座り込むソフィアが呟きと共に結界の宮殿が消え去っていった。
『★ソフィアぁぁぁ』
『☆大丈夫かぁぁぁぁぁ』
『〇傷口、開かんかったぁぁぁ？』
『◎…ソフィア。ソフィアぁぁぁ』
「はぁはぁ…ははは、大丈夫よ」
泣きながら駆け寄る人形達に笑い返すソフィア。
「…すまなかった」

杖を袖で包み持ち走り寄り、ソフィアに渡すヌーラ姫。その肩を借りて立ち上りながらソフィアは微笑んで言った。
「いいんですって。守るのが私の仕事ですから」
「…ありがとう」
涙目の顔を伏せてヌーラ姫は素直に礼を言った。

47．神への資格

『…どういうことだ？　どうして、デュランヌ達が…あんな…ただの魔法攻撃で？』
祭壇の上で一人悩み続けるデオレマにソフィアは静かに言った。
「御一人になりましたね…」
『一人？…そんな事はどうでもいい。あの魔法は何だ？　何なんだ？』
ソフィアは少し溜め息をつくと説明を始めた。
「どんな対魔法呪紋でも自分自身の魔法には効力を発しないでしょ？」
『…そうだ。そうでなくては魔法を使えん。そのように呪紋は刻まれている…』
呪紋だけでは無い。対魔法障壁でもそうなることはソフィアがデオレマに浄化の宝珠を投げつけた時にも証明している。その事をも見逃し、自分の歪んだ知識だけで総てを推し量ろうとするデオレマをソフィアは悲しげに…哀れんだ眼で見つめ、言葉を続けた。
「…あの魔法、カーマ・カノンはクラインで取り込んだ魔法を返す。しかも、浄化の力を付加して。元が自分の魔法なのですから、どのような呪紋も無意味。違います？」
『…そうか。そうなのか？』
まだ悩むデオレマを哀れむようにソフィアは言った。
「…まだ、この世にも判らない事ばかりでしょう？　結局、貴方が神になる事は無理なのですよ…誰一人として。悟りを得ることはできても、例え、神の力を手に入れることはできても神自身にはなれ

ないのですから…」
ソフィアの言葉に両手で頭を抱え、悩むデオレマ。
『…神に…なれないのか？』
無言でソフィアは浄化…ピュアリィの宝珠を左手に作った。
「願わくばその魂が天に召される事を…」
宝珠をデオレマに投げつけようと高く掲げた時、祭壇の後ろの水面が黒く盛り上がった。
「え？」
『★なに？　なんや？』
『☆あれは…』
『◎…ゾンビ…ドラゴン』
『〇腐竜やっ！』
水面に姿を顕したのはドラゴン。所々の皮が腐り落ちているその姿はゾンビと呼ぶに相応しかった。
『ふっ…くっくっ…そうだ。ワシにはまだ御主が居た…くっくっくっ。甦らせ、デュランヌ達と戦わせ、倒れては甦らせた御主が』
デオレマはふわりとゾンビドラゴン、腐竜の頭上に飛び移ると高らかに声を張上げた。
『我が名はデオレマ・ダッド・ゲバード。神の力を手に入れ、神となる者。ドラゴンを甦らせ、ヒュドラを甦らせる者』
「…ドラゴンを甦らせた？」
『おぉぉ！　そうじゃ、霊泉の下に眠るこのドラゴンの骨を掘り出し、霊泉の総てを費やして甦らせた…このワシに不可能は無い…無いのじゃ！』
『★チリ紙のような自信やな』
『☆自分で自分に言い聞かせてるし』
『言うがいい。今、ヒュドラが甦る。その時まで…』
「ヒュドラを甦らせる？」
デオレマは腐竜の折れている角の中に手を入れ、取り出したそれは…灰色の塊。その表面には何やら蠢く紋様が見える。

『〇なんや？　あれは？』
『くっくっくっ…よく見えるようにしてやろう…』

アコライト・ソフィア２４（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２４／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア２５（前書き）

腐竜と白魔術最強攻撃呪文の戦い…

アコライト・ソフィア25

灰色の塊はゆっくりと大きくなって、一抱えほどの大きさになると表面の模様がはっきりと判った。それは亡霊の顔。苦悶の顔。虚ろな顔。叫ぶ顔。泣く顔。顔、顔、顔、顔…

『◎…怖い』

「霊魂の塊…そんなに霊魂を集めた？」

今まで、デオレマ達の手にかかって無くなった人達…いろいろな命達。それらの霊魂が一つの塊になっている。怨みと呪いが混沌となって塊となっている。

『くっくっくっ。あの牙からヒュドラを甦らせるにはまだ足りん…』

その時、背後の洞穴の中から断末魔の声が響き渡った。ネダの最後の声だった。

『くっくっくっ…また一つ魂が増える』

デオレマが何事か呟き、空中を掻き出すと、その手に顕れる黒い塊。

『ふん。あ奴の魂も黒い。腹黒い奴の魂はどうしてこんなに黒いのか…』

『★お前の魂はもっと黒いんやろな』

『くくっ。それよりも、もっと魂を集めんとな…』

デオレマはネダの魂を灰色の塊の中に放り込み、指を鳴らすと…背後で響き来る殺戮の声。

「…なに？」

『くっくっくっ…殺しあっているのじゃよ…ニクシー共がな…くっくっくっ』

「なんじゃと？　そんな…やめろぉ！」

振り返り叫ぶヌーラ姫。姫の叫びの残響が消えると…一際大きい断末魔の声が響き渡った。

そして…静寂の中、天井の鍾乳石から落ちる水滴の音だけが殺戮の終焉を知らせていた。

「ああ…どうして…どうしてこんな事が…」

泣き崩れ落ちるヌーラ姫。

『くっくっくっ…どうやら一人残らず死んだようだな…くっくっくっ』

デオレマの手にできていく灰色の塊。二つの灰色の塊を一つにして嬉々とするデオレマのくぐもった笑い声だけが洞窟に響く。

「…許さない」

ソフィアは杖をデオレマに向け叫んだ。

「絶対に。絶っ対に貴方を許さない！」

『くっくっくっ…許そうが許すまいが好きにするがいい。それよりも…まだまだ、魂が足りん。ほう…そこに在るな…くっくっくっ』

デオレマが見つめる先には…気絶しているノランとミクラと侍女達とギゼル。

『くっくっくっ…どれ、いただくとするか…くっくっくっ』

「させないわ！」

ソフィアは素早く光魔障壁結界をノラン達の周りに張った。

『…ふん。無意味じゃよ。『糸』はまだ切れていない…くっくっくっ』

デオレマが指を鳴らすと、ノラン、ミクラ、侍女達の体から白い蒸気のような物が立ち上り結界を抜けて一つの塊になった。

『くっくっくっ。こっちに来い…』

「くっ！　…ノランさん、ミクラちゃん耐えて御願い！」

ソフィアの手から投げ出されたのは虹色の宝珠。その虹色の宝珠は白い塊を吸い込んでふわりと浮かんだ。

『★ソフィア。アレは？』

『☆ひょっとして…歪空間結界？』

「そうよ。ミクラちゃん達の魂をアイツになんか渡さないわ！」

しかし、虹色の宝珠はデオレマの方へ飛んでいく。
『くっくっくっ…その決意は無駄なようじゃな。…先程、触った御陰でその術を解除する方法は判ったよ。くっくっくっ…』
「…どうかしら？」　強がるソフィアの表情も何処かしら硬い。
『…ほれ。此処をこうすると…』
宝珠をその手に取ったデオレマは何かしら弄り始める。その両手からは白い煙は上がっていない。デオレマは嬉々として虹色の宝珠を操作し…顔をソフィア達に向けて言った。
『くっくっくっ…ほれ。これで解呪じゃ』
デオレマは片手の指を鳴らすと虹色の宝珠の表面が割れ、中から白い…白銀色に輝く光がデオレマと腐竜を襲った
『ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ』

その光はギガピュアリ、過剰浄化の魔法だった。

48．白魔法の攻撃呪文

『ぐわぁぁぁぁぁ…なにぃぃぃっ！？　浄化だとぉ？』
悶え苦しむデオレマと腐竜。
『☆やりぃ！』
「ウェンディ！　水糸！」
『◎任せてっ！』
繰り出した水糸はひゅんと白銀色の光の中に浮かんでいる虹色の宝珠を捕まえた。
『…そうか二重に包んだのかぁぁぁ…逃がさんんんん』
『◎…渡さない。アェリィ！　飛ばして』
『☆おっしゃあ！　ガスティ・ウィン！』
デオレマは腐竜を操り、虹色の宝珠を掴まえようとしたが、それより早く人形達は水糸を持つウェンディを後ろに吹き飛ばして宝珠を強引に引き寄せる。
『◎…いたぁっ』

ウェンディは石筍を二、三本叩き折って止まった。
『☆大丈夫かぁっ？』
『◎…それより宝珠はっ？』
頭をさすりながら尋ねる。
「ここよ。奪い返したわ」
ウェンディが握っていた水糸に捕まえられていた虹色の宝珠はソフィアが掴まえていた。しっかりと。
「…これで、もう遠慮することは何も無いわ。…その竜共々、叩き潰してあげる」
ソフィアの身体が静かに輝き始め、ソフィアの服の装飾も虹色の輝きを増していく。
『ぐっ…クソッ…。ならばっ！　この洞窟諸共、死ぬがいい！』
腐竜は長い尻尾を振回し、洞窟の壁を叩き壊していく。頭上から降り注ぐ槍のような鍾乳石。
「ドメイン！」
落下した岩塊が透明な壁にぶつかり砕けていく。
『〇けど、このままじゃ生埋めに…』
『くっくっくっ…白魔法に攻撃呪文は在るまい？　この竜を止める事はできんじゃろ？　そのまま、生埋めになるがいい！』
「断るわ。悪いけど、私は竜退治の依頼を受けて此処に来たのよ。知らなかった？」
『…何ぃ？』
「退治する事ができなけりゃ最初から此処には来ないわ」
『何だと？』
「みんな、力を借りるわよ！」
『★☆〇◎おう！』
ソフィアは左手で支えながら右手で濃い栗色の長い髪をかき上げ、高く掲げた。
「霊精よ。此処に集いて、その身に…」
『★焔の力を宿し…』

指先に絡んだ髪の一本が霊精で固まり水晶の針となり、その中に焔を宿して紅く染まった。
『☆風の力を宿し…』
『〇土の力を宿し…』
『◎水の力を宿し…』
人形達が詠唱すると髪は淡黄色と茶色と水色に染まり水晶の針となって固まっていく。
「光の力を宿して一つの矢となり…」
最後の一本が銀白色に染まり、他の四本と一緒に一本の虹色の矢となった。
「邪悪なる者を源初の塵へと…」
ソフィアは虹色の矢を杖に当てると杖の両端から矢に伸びる霊精の糸。
糸は重なり弦となる。
今や強弓となった光の杖を構え、弦を引き絞ろうとするが右腕が肩の傷の所為で動かない。が、それを無理矢理に引き絞る。
「ぐぅぅ…還せぇっ！」

解き放たれた矢が結界を抜け、腐竜の胸に突き刺ると全身に広がる光の五芒星。

『ぐぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ…』
断末魔の声と共に腐竜は光の塵へと変っていく。最後の足掻きで洞窟を叩き壊しながら…
『…な、何だその術は？』
消え去ろうとしている腐竜の頭上でデオレマが叫ぶ。
「五芒星矢撃…ペンタグラム・アローは古の魔導書に書かれていた白魔法の攻撃呪文。数少ない白魔導師専用の攻撃呪文ですわ」
『〇ウチらの得意法術やで』
『ぐぅぬぅぅぅ…ならばこの霊魂の魂だけでヒュドラを甦らせてや

る！』
　デオレマは瞬く間に蝙蝠へと姿を変え、天井の小さな穴へと姿を消した。
「…逃げられた」
『★んでも、アタイ達も逃げんと！』
『☆けど、もう来た道は塞がってるで』
　既に外へ繋がる洞穴は崩れ塞がっていた。今、居るのは既に自壊するまでに破壊された洞窟。上からは絶え間なく落ちる岩塊。
「ソフィア殿。あの湖へ！」
　ネゼが祭壇の後ろの湖を指差す。
「あの湖は水中でワシ等の沼に繋がっております。ちょっと息を止めて頂ければ、ワシ等が岸までお連れします」
「判ったわ。湖まで結界を伸ばしますから、ノランさん達を御願いします」
「ソフィア殿は？」
　心配するヌーラ姫にソフィアは笑って応えた。
「障壁結界を張った術者はその場から動けないのです。結界を維持する間は…」
「…では、どうやってここから…」
「心配要りません。こういう結界を張っていない時は、私の周りに防御結界が創られますから…最初に御逢いした時の事を思い出して下さいな」
「…あぁ。確かに絶対防御が…けど、落石には…？」
「大丈夫です。私一人だけなら落石にも耐えられますから」
『〇伊達に頭衝きで色んな物、壊してないもんな』
『★そうそう、この前なんか鋼岩犀と頭衝きして引き分けたもんな』
「…余計な事は言わないの！　ですから姫様、ノランさん達をよろしく御願いします」
　ぺこりと頭を下げられヌーラ姫とネゼは顔を見合わせ承諾した。
「判った…だが、気をつけてな」

「ええ。では、これを」　ソフィアは虹色の宝珠をヌーラ姫に手渡した。
「この中にノランさん達や侍女の方々の魂が。もう『糸』は切れている筈ですから、岸に付いたらこれで衝いて宝珠を割って下さい」
髪を芯にした霊精の針を受け取り、髪に挿してからヌーラ姫は両手でソフィアの手を固く握り締めた。
「…すまぬ。この礼は後で必ず。…じゃから、じゃから。必ず無事で。良いな？」
「御心配なく。楽しみにしてますわ。では、結界を伸ばしますから…パセージ！」
透明な曲壁が水面まで伸ばされ、その中をヌーラ姫と、ノラン達を背負い、侍女達をも脇に抱えたネゼが通って無事に水中へと消えて行った。
「…さて？」
『★…結界消して』
『☆…あの蝙蝠を』
『○…捕まえて』
『◎…二度と悪さできないように』
「懲らしめに行きましょうか！」
『★☆○◎おう！』
落石の中、結界を消すとソフィアは蝙蝠が消えた穴を目掛けて飛び上がった。

アコライト・ソフィア２５（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２５／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです

アコライト・ソフィア２６（前書き）

悪しき穢れた手段で神が甦る…

アコライト・ソフィア２６

４９．甦生

足に灰色の塊を掴んだ蝙蝠が沼の黒い柱を目差して飛んでいく。空の満月が沼の霧を白く輝かせ、黒い柱、ヒュドラの牙を照らし漆黒さを際立たせている。風も無く音も無い深夜。ただ、蝙蝠の羽ばたきだけが空気を震わせていた。

突然、西の岩山の中腹あたりの岩壁が爆発し、その爆煙の中からソフィアが姿を顕した。

「げほっ、げほっ。なんだ、最後の壁って薄かったのね」

『★…それでも厚さは２ｍは在ったで』

『〇しかし、ソフィアの掘削速度は早いな』

穴はソフィア達には小さく、掘削しながら進んできたのである。

『☆掘削って、ただ岩を杖で叩き壊してるだけやんか』

「いいじゃない。それより此処は？」

『◎…あそこにヒュドラの牙が見えるよ』

「…え？　あ、本当だ。…ん？」

牙を目差して羽ばたく蝙蝠が月明かりに照らされた霧を背景に浮き上がって見える。

「見つけたっ！　行くわよ。みんな！」

ソフィア達は即座に空を飛び、蝙蝠を追いかける。素早く飛べない蝙蝠に追いつくのはすぐかと思えたが、遥かに離れた距離は如何ともし難く、追付いたのはヒュドラの牙だった。やっとの思いで辿り着いた蝙蝠はデオレマへと姿を変え、牙の上に腰掛け、ソフィアを睨み待っていた。

『くっくっ…やっと来よったか…』

「…負け惜しみかしら？」

ソフィアは空中に停まり、デオレマを睨み返した。

『★何か考えとるん？』
確かに未だ何かあるのかもしれないという疑念がソフィアを止まらせた。
『…いやいや、ヒュドラの復活には、是非とも御主に同席して欲しかったのだよ』
「御断り致しますわ」
ソフィアは杖を両手で握り念を練り始めた。全身から淡く光が輝き出し、水晶の装飾の品々が虹色に輝き出す。まだ動かない右肩では在ったが、その先の右手の握りは力強かった。
「…覚悟はよろしいかしら？」
杖を右手に預け、左手をデオレマに向けて半身に構え、掌に念を集め始めた。
『くっくっくっ…魂の塊をこの牙に吸わせるだけで儀式が終る。そこで見ているがいい…』
デオレマの左手に握られた灰色の魂の塊。
「断った筈よ！」
ソフィアの左手から放たれた虹色の宝珠が灰色の塊を吸い込んだ。
『おぅっ！』
「それでもう、どうする事もできないでしょう？　特別に浄化の術を多めにかけましたから先程のようには解除できませんわ。その魂は貴方を倒した後、丁寧に祓わせていただきます」
魂の塊は歪空間結界の中に閉ざされた。浄化の光の中に…
『くっくっくっ…かっかっかっ…はぁはっはっはっはははは…』
虹色の宝珠を握り締める手から白煙を上げて、デオレマは狂ったように笑い出した。
『☆…なんや？』
『〇死期を覚ったんかな？』
『…これを、この状態を待って居たのだ』
「何ですって？」
『くっくっくっ…さっき確信したのじゃよ。今まで魂をこの牙に吸

い込ませようとしてきたが、うまくいかん。せいぜい草木の魂を削りとって与えた時だけ、この牙は活性化した。他の魂を吸い込ませた時は吸い込んだ分だけ瘴気を発するだけじゃった。悩み続け…その杖を見た時に鍵が見えた』

「…この杖を見た時？」

それは多分、ノランが持って行った時。

『その杖が纏う光は神気そのもの。リッチとなったこの身には毒。だがヒュドラには？　ヒュドラとて神獣の端くれ。しかも神界で生れながらも獄界との狭間で彷徨う神獣。竜如きよりも遥かに神に近い。ならば吸い込ませる魂は神気でなければならん…のではないかとな』

「神気？　…え？」

『つまり、これじゃよ。浄化の結界に包まれた魂。これこそがヒュドラを復活させるマナ。神々への贄。このワシを神界へと導く道標』

「…何ですって！」

しかし、その宝珠の中はデオレマが穢れた手段で集めた魂。怨み、呪いが混沌となった穢れた魂の塊。

幾ら浄化の術で包んでいるとはいえ…神獣への贄としては剰りにも穢れている。

穢れすぎている。

『…見ているがいい』

デオレマは虹色の宝珠をゆっくりと牙へ近づけると、ヒュドラの牙は宝珠を砂に水が染み込むかの様にすうぅっと呑み込んだ。

「…まさか！」

『くっくっくっ…ほれヒュドラが復活するぞ…くっくっくっくっくっ』

ヒュドラの牙に亀裂が走る。中から揺らぐような光が漏れ始め…

突然！　数本の触手が弾きでた。

「きゃあ！」
辛うじて触手から逃れたソフィアを別な場所から弾けでた触手が襲う。
「…くっ」
数本の触手がソフィアの法力に引かれるのか、デオレマを襲う事なくソフィアだけに襲いかかる。誤った手段での召還を…それを見過ごしたことを咎めるかのように…狂ったかのように襲い来る触手。見る間に牙の亀裂から、いや牙全体から無数の触手が弾け出て来た。
『ぐっぐっぐっ…やはり、魂が足りんようじゃの…では』
デオレマは片手を森に向けて呪文を唱え始めた。
「くっ…そんな事は…あぅっ！」
襲い来る蠢く触手から身を護るだけで精一杯になったソフィアはデオレマを阻む事ができない。
『…ノワーディ・ボア・レム』
掌からでたのは無数の黒蛇喰焔。黒い焔の蛇達は空を飛び、森に襲いかかると樹を食い散らし燃やしていく。
「…くっ…しまったっ」
ソフィアが森の方へ近づこうとした時、背後から触手がソフィアを襲った。
「きゃあぁぁぁぁぁ」
触手は容赦なくソフィアを沼の浮島へと叩きつける。
「…ぐっ…うぅむぅぅぅ…」
頭を打たれ、法力を奪われ、消えかけようとする意識を繋ぎ止めるだけで精一杯のソフィアにデオレマの歓喜の声が絶望を告げる。
『ぐっぐっぐっ…そこで森が燃え尽きるのを眺めているがいい…くっくっくっ』
「…う…くぅっ…うぅぅ…そんな…」
ソフィアは朦朧とした意識の中で森に向かって呪文を唱えようとしたが、立ち上る事もできなかった。

５０．約束

焔蛇は樹を喰いつくすと次の樹へと移り、燃やしていく。その焔から発せられる生気を貪らんと空中で蠢き打ち震える触手。やがて牙が…ばぎぃんという鈍い音を立てて割れ裂け、中から無気味な本体が姿を顕した。

「あぁぁぁ…こんな事が…」

朦朧とした意識の中で誰かが話しかけた。

《ソフィア、負けたと思った時が負けだぞ》

「…負けたと思った時？　父ちゃん？」

《…負けたのか？》

「…負けて…無い…」

《だったら、立ち上がって…》

「立ち上る…」

両手に力を込めて身体を起こそうとするが、がくんと力が抜けて草の中に突っ伏してしまう。

「…あかん…立ち上がれん」

《立ち上がれんかったら…負けだぞ》

「うぅっくっ…」

再び立ち上ろうとするソフィアの目に信じられない光景が映った。焔蛇が呻き声を上げてぼたぼたと地面に落ちていく。

「…え？」

『…なにぃ？　どうしたというのだ？』

驚くデオレマとソフィア。

ソフィアの目に映ったのは…樹の上で焔蛇達を百竈の樹の槍で叩き落とし戦うキーファの姿。既に幾つかの火傷を負いながらも懸命に戦う姿。よく見れば…キーファの全身と周りの樹々の葉に…全ての葉に飾られた七星と文呪紋様の護符。

聖痕紋様の護符が湖畔の全ての樹の全ての葉に飾られていた。

一枚一枚の護術力は小さくてもそれが集まった事で、護符の葉を大量に食べた事で焔蛇が退けられたのである。樹々の命を取り込めなくなったヒュドラは触手を絡ませ身悶え始めた。
(樹が…そんなに護符を纏ったら樹が枯れる。キーファ、貴女が幾ら精霊だとしても無事には済まない…いや…湖畔の樹が自らの命を犠牲にして…後ろの樹々を…森を護っている？　…自己犠牲なん…
…やな)
こちらに気づき見つめるキーファの瞳に宿る光。その光が、煌めきが湖畔の樹々の覚悟がソフィアにある決心をさせた。
「…あの子ったら…加減をわきまえへんのやから…」
くすりと笑うソフィアの目に桟橋近くの岸に上がるヌーラ姫とネゼ、そしてノラン達の姿が映った。
「…無事やったんやな。よかったぁ」
ふっと力が抜け、何故か…ソフィアの口調が変り、ふらりと立ち上った。
何かを覚悟したかのような澄んだ瞳。
ぞっとするまでの美しさを浮かべて。
『★…う、あ…ソフィア、大丈夫か？』
気絶していた人形達が起き出した。
「…大丈夫や。アンタ達は？」
『☆…大丈夫やで』
『○…ソフィア言葉が…変ってるで』
「うん？　そぉかぁ？」
『◎…そだよ…始末つける？』
ソフィアが言葉使いを変えた時、それはキレた時。
その時の口癖が『始末』だった。
《ソフィア…自分の始末はちゃんと自分でつけんとあかんよ…母ちゃんと約束や》
「そやな…始末つけよう…」
『★☆○◎おっしゃあ！』

ふらつきながらも人形達を拾い上げるソフィア。そして、左手の上に人形達を集めた。
『★ソフィア？　どうしたん？』
「みんな、ありがとな…今まで…」
『☆ソフィア？　何言うてるん？』
「…ここで、さよならや…」
『〇いややなぁ…そんな冗談…』
ひゅんという乾いた音と共に人形達を歪空間結界が包んだ。
『◎…ソフィア？　どしたの？　ねぇ？』
中から結界の壁を叩きながら人形達が叫んでいる。
「あのヒュドラを甦らせたんはウチやから、ウチが倒さんとあかんねん…それに、神獣の中でも神界で生まれ落ちた神獣やから…神さんに近いんやから並みの方法では倒せへんから…せやから…堪忍。ここでお別れや…」
『☆認めん！　アタシはそんなん認めんから』
『◎ソフィア。みんなで倒そう。なぁ？』
「ありがと…ガスティ・ウィン」
風に吹き飛ばされて人形達を包んだ虹色の宝珠は桟橋近くへと飛ばされ、脆く割れた。

アコライト・ソフィア２６（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２６／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア27（前書き）

白魔導師の最強呪文。それは結界の中で放たれる…

アコライト・ソフィア27

『★ソフィアぁぁ！　そこで待っとれ！　嫌でも一緒に戦ったる！』
「…ウォール」
近づこうとする人形達の前、桟橋ぎりぎりに張られる結界の壁。

ばちっ！

『〇あ痛ぁ…何するんや？　なぁ？』
ソフィアは応えず、静かに微笑む。
頭上から…新たな贄を、命を、法力を求めて狂ったように荒々しく襲い来るヒュドラの触手を危うく躱すと、空へと飛び上がった。逃げるソフィアを追い、ヒュドラの触手は縦横に、猛々しく振るわれていく。
『☆あんな…神さんに近い獣をどうやって…一人で倒すんや』
『◎…あ』
『〇どした？　ウェンディ』
『◎…ソフィア、死ぬ気だ』
『★なんやて？　なんで死ななあかんねん？』
『◎…あの魔法、使う気だ…五芒星崩壊。アレなら神様でも悪魔でも倒せる…』

五芒星崩壊、ペンタグラム・カラブスとは光、焔、風、土、水の精霊の龍を一度に呼び出し、自身の命と引き換えに全ての敵を打ち倒す最強の自己犠牲呪文だった。
相反する精霊の龍が一同に呼ばれる。互いに喰い合い、滅ぼし合う。
その龍が外に出ないが為の障壁。
障壁の意味を悟ったウェンディの洞察は……正しかった。

『〇五芒星崩壊って…そんな、なんでそんな、あんな奴に…そんな』
『☆認めん！　アタシは絶対認めんから！』
壁を叩き続けるアェリィ。ノーラ、サーラ、ウェンディ達も無駄と知りつつ壁を叩き続けた。それしかできなかった。

51．破壊

「…どうした？　人形達？」
後ろの草陰から声をかけたのは老人。
『★あ、爺さん。なんで、こんなとこに？』
「なんか凄い岩音がしたもんじゃから外に出たら森が燃え始めたんじゃ。それで消そうと来たら…もう消えとるからの。お？　ギゼル！　御主、一体、今まで何処に…おおっ、ノラン！　ミクラ！　無事じゃったか。ところで…御前さん達は？」
「この沼に棲んでおりますニクシーのヌーラと申します」
「ネゼと申します」
「御前さん達…ニクシーか？　初めて見るが…礼儀正しいのじゃなぁ」
『☆★〇◎自己紹介はええから！　はよ、この壁、壊して！』
老人とニクシー達に叫ぶように人形達が頼む。泣きながら。
「だから何がどうしたというのじゃ？」
『☆ソフィアが…ソフィアが死のうとしてるん』
「何？　どうして、そんな事に？」
驚く老人とヌーラ姫達。
『〇ヒュドラが、神獣が復活しかけてるんよ。その責任を取るて言って…』
「ヒュドラが？　おぉ…何じゃアレは？」
老人達が見やると沼の霧の中の黒い柱、ヒュドラの牙から伸び出ている触手が飛び回るソフィアを襲っている。
「あの…アレがヒュドラなのか？」

『★せやから、はよ。はよ、この壁、壊して。なぁ、頼むから。ソフィアを助けたいんよ。一緒に戦いたいんよ。なぁっ』
「おしっ！　判った！」
老人は桟橋の先に進むと渾身の力で斧を振るった。

がぃん…がぃん…がぃぃん…

「…こんな…堅い…のは…千年樫を…伐った…時…以来じゃ……が…それより…堅い…」
幾度となく斧を壁に叩きつける老人。やがて…

べきしっ

「おっ！　亀裂が入ったぞ…もう一息！」
『★☆○◎…頼むで…』
しかし…それは無駄な期待に終った。

べきぃぃぃん…

「いかん！　柄が折れた…」
斧の刃が宙を舞い、後ろの草陰に飛んでいった。折れるまで叩いても壁には亀裂が入っただけ。
『○…そんな…』
その時、ざばんと水音がして桟橋に上がってきたのはネゼ。
『☆ネゼじぃさん！　水の中は？』
「…水中にも壁は続いております…中に入ることはできませぬ…」
ネゼはがっくりと項垂れた。
『★…ソフィアぁぁぁ』
人形達の声だけが夜の闇に響き渡った。

『☆…あきらめん。諦めてたまるかい！』
アェリィが壁に近づき叩き始めた。続けて他の人形達も…
『★アタイはまだ借りを返しとらん』
『☆アタシかて、まだ恩返ししとらん』
『○ウチかて、助けて貰うた義理がある』
『◎…ワタシは命を助けてもらった』
壁を叩き続ける人形達を押し退けて鉈を叩きつけたのはギゼルだった。
「俺も…俺は、まだ礼を言ってない」
壁を叩き続けるギゼルと人形達を見て老人は折れた斧の刃先を捜し始めた。
「ふん。まったく諦めの悪い奴じゃ。まったく誰に似たんか…どれ、早く斧を直してやらんとワシも目覚めが悪い…孫達の礼も言うてない…」
刃先を捜す老人に声をかけたのは老婆だった。
『…これを御捜しかえ？』
その手には柄が折れた斧の刃先。
「…おぉ！　それじゃ。　…ところでどなたさんかの？」
『ふん。斧を壊してしまうなんぞ…それでも御前さんは木こりかい？』
「なんだと？」
憤慨する老人の声に振り向いた人形達は叫んだ。
『★アィヒェ婆さん！　どうして此処まで？』
『ほほほ…話はキーファから聞いたよ。その壁を壊せばいいんじゃろ？　みんな、ついといで。アィヒェ。其処の髭を生やした若造を担いどくれ』
『…はい』
木陰から顕れた若い女性が老人を背負ろうとしたが、老人は断った。
「ワシが若造？　アンタの方がずっと若い。それに、まだまだ背負

ってもらうほど歳はくうておらん」
『申し訳ございませんが、私は貴方より年上です』
「あんたの方が年上じゃと？」
アィヒェに言われて老人は目を丸くした。
『ぐずぐず言いなさんな！　年上の言葉は素直に聞くもんだよ！』
アィヒェ。構わんから担いでついといで』
『はい！　婆様』
アィヒェがひょいと老人を担ぎ挙げると凄まじいスピードで森の中に入って行った。
『〇ウチらも追いかけよ！』
『★おう！』
『☆って、みんな早すぎ…きゃあっ』
キーファが人形達を拾い上げ、奥へと走る。
『◎…ありがと』
『気にしないで。早くソフィアを助けよう』
『◎…うん』

52．槌

『ほら着いた』
アィヒェ達に連れられた所は巨大な千年樫の樹の倒木だった。
『★婆さん。ここで何するん？』
『ほほほ…この樹を槌にしてあの壁を壊すんじゃよ』
『〇婆さんを槌にして？』
『そうさ、それぐらいじゃないと壊れんじゃろ？　あの壁は？』
「何を言っているのかよう判らんが…兎に角、それでワシの役目は？」
尋ねる老人に老婆は一瞥して応えた。
『この樹をちゃんと根から切り離して、先を尖らかすんじゃよ！』
「婆さん…あんた何者じゃ？」
『あたしゃ、この樫の木だよ！　あんたが切り倒さんかったからこ

ういう無様に倒れとるんじゃないか！　まったく、御主の爺様が見たら嘆き悲しむぞ』
「ワシの爺さん？　あんたがこの樫の木？」
『あたしゃ、あんたの爺さんの爺さんの…兎に角、あんたの御先祖さんに植えられたんじゃ…それより腕の方は確かじゃろうの？』
　老婆は斧から折れた柄を取り外すと自分の腕をその中に入れて、そのまま斧を老人に渡した。
『ほれ。直したぞ。千年樫の柄じゃから折れたら御主の腕の所為じゃぞ』
　老婆の片腕が無くなっているのは柄になったからだろうか。
「婆さん…あんた…」
『いいから早く削らんか！　其処の小さいのは無駄な枝を切り落とすんだよ』
「わかったぁ！」
　嬉々として鉈を振るうギゼルに負けじと老人は斧を振るい始めた。
「…おぉ…いい斧じゃ。ありがとよ」
『★婆さん…ありがと』
『なあに、やっと人様の役に立てるんじゃ。礼をいうのはこっちの方じゃよ』
『☆腕…無くなったね…』
『別に気にする事ぁないよ。これからあの壁に大穴開けるんじゃ。それから先は頼んだよ』
『〇うん…ありがと』
　涙ぐむ人形達。それを優しく見守る老婆にヌーラ姫が尋ねた。
「それで私達は何を？」
『おぉぉ！　そうじゃ忘れとった。アンタ達はあの沼のニクシーじゃろ？　それならば途中から波でワシを出迎えてくれないかい？』
「波を？」
『そのほうが速くなれるじゃろ？』
「…判りました！　速い方が壁を壊しやすいですものね。では、急

ぎ沼に戻ってお迎えする準備を」
『頼んだよ』
沼に駆け戻るヌーラ姫と侍女達の姿を見て老婆は人形達に言った。
『…ここまで精霊達が助けようとする人間というのも珍しい。ワシ等は普段はお互い知らん振りしているのに…御前さん達が一緒に旅しているのが判ったよ』
『◎…うん』

53．決意の時

ヒュドラの牙の触手の攻撃は次第に激しくなりソフィアが避け続けるのも辛くなってきた。
幾度となく叩かれては水面に落ちそうになる。叩いた時に法力を吸い取るのだろう。ソフィアの身体から力が抜け…虚脱感にも襲われながら、躱し、逃れ、飛び続ける。最初の一撃のように不意を襲われていないということだけがソフィアを飛び続けさせていた。飛びながらもソフィアは念を集中しようとするが触手の攻撃を避けるのが精一杯だった。
そして、幾つかの呪文で応戦してもそれは触手にはほとんど損傷を与えず、ヒュドラ自身をさらに活性させるだけ。
『くっくっくっ…森を焼く事ができんように結界を張ったようだが、御主の命一つでこの神獣は甦るだろうよ。その在り余る法力を吸い込んで…くっくっくっ』

アコライト・ソフィア２７（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２７／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア２８（前書き）

神界への扉が顕れ、ソフィアの最終呪文が発動する…

アコライト・ソフィア２８

（誤った方法で召喚された神は狂い、悪魔となり、災いをもたらす…）

それは召喚術の初歩であった。相反する精霊を同時に呼び出しては為らないという基本と同程度の初歩の中の初歩。

（ヒュドラとて神獣。このまま完全に召喚されたら…この村は、いや近くの街だって…）

壊滅してしまうだろう。

（あの術を使うにも時間が無い…一か八か）

「…フィジョン」

飛びながらソフィアは杖に刀身を融合させて襲い来る触手に向かって振り下ろした。

「でぇい！」

ばずっ

鈍い音と共に刃は触手を見事に断ち切った。

「やった！」

（これで暫くは…）

しかし、期待は恐怖へと変った。

断ち切られた触手は即座に再生し、切り落とされた触手も再生して…別の一体のヒュドラ…触手だらけの醜い身体へと変った。

「…どうして？　…そんな」

『くっくっくっ…凄まじき再生能力。まさに神獣の力。礼を言うよソフィア。ヒュドラを甦らせてくれただけではなく、増殖させてくれるとは。くっくっくっ…』

「くっ…」

しかし、ソフィアには降りかかる触手を断ち切るしか逃れる方法が無くなっていた。

それはヒュドラ達の攻撃を激しくさせるだけと判っていても…

そして、ついに…

ばしぃぃぃん

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ…」

触手に浮島へと叩きつけられた。

「うぅぅ…ぅん…」

朦朧とした意識の中で立ち上るソフィアの目に映ったのは触手から再生したヒュドラ。

「う…逃げんとあかん…あ…」

よろめきながら振り返ったソフィアの目の前にもう一匹のヒュドラ。その横にも一匹。

「…あかん。逃げられん…」

三匹のヒュドラに囲まれてソフィアは立ちすくむ。たじろぐ間にヒュドラの触手がソフィアに向かって振り下ろされた。

「きゃあぁぁぁぁ」

しかし、襲い来た触手はソフィアにあたらずに、水面を激しく叩きつけただけ。

「え？　…何故？」

見上げると頭上で触手が絡み合い、ヒュドラ同士が叩きあっている。見渡すと再生し、増殖したヒュドラ同士があちこちで戦い、喰い合っていた。

「同士討ち？　何で？　でも…助かった」

水面ぎりぎりに飛び出し、その場から逃れたソフィアはヒュドラが居ない場所を捜し始めた。

（あの呪文を唱えられる場所…あった）

それは沼の外れ、背の高い水草に囲まれた浮島。

「あそこで…ぎゃあぁぁぁ…」

が、その手前で振り下ろされた触手に激しく水面に叩きつけられ…水面に弾かれて水草に突っ込んで止まり…ソフィアは気絶してし

まった。

『何故じゃ…何故に共喰いを？』

デオレマが眺めている間もヒュドラ達の共喰いは続いていた。が、やがて触手を絡め始めた。

『…何じゃ？』

共喰いし巨大化したヒュドラが六匹。ヒュドラの牙を中心に正六角形の位置に居た。他のヒュドラを無視し、触手を絡め合う。そして…絡み合った触手は光を帯び始めた。

『何が起こるというのじゃ？　…まさか』

触手の中心の水面に映った紅き月。満月の紅き月を無気味に照らし出している。

その時！　水面が盛り上がり空中に巨大な光球を作った。光球の表面に映し出された辺りの景色が中心に吸い込まれ…虹色の光を輝かせ始めた。

『…そうか。これが神界への扉、回廊…伝承は真だったのか…』

「うぅぅんんん…」

気を取り戻し、ゆらりと立ち上ったソフィアにも、今がどういう事態かは直ぐに判った。

（…こうなったのは、ワタシの所為やもんね…責任は取らんと…なぁ、父ちゃん…母ちゃん…ワタシちゃんと始末つけるから見てて…なぁ…）

ソフィアは両手を合わせて念を集中し始めた。その脳裏に浮かぶのは家族の記憶。

《ソフィア…女の子はな、料理と化粧が巧かったらええんや…大きくなったら教えたるから…楽しみにしててな…》

（結局、料理、教わらんかった…教えて欲しかった…化粧も…教わりたかった）

額からつうぅと流れ落ちる血を指で拭って唇につけた。
（死に化粧や…こんなんでええんかな？）

《ソフィア　なんで武術が好きなん？》
（お姉ちゃんかて、好きやんか…）
《ウチはな、この店継ぐからええの！》
（ワタシ…剣士になるて約束した…ね）
《そん時はこの店で一番上等な剣売らんと取っとくからな…ちゃんと腕前あげんと》
（腕前、鍛えてくれたんお姉ちゃんや…けど…剣士になれんかった…御免。ゴメンな）

《お姉ちゃん。ウチなぁ、また魔法覚えたんよ》
（…あんたの黒魔法はキツいて）
《でも…何処でも試せへん。つまらんわ…せっかく覚えたんのに…》
（お姉ちゃんな。魔法結界、覚えたんよ。強力な結界やからあんたの魔法ぐらいじゃ壊れんから、そん中で試したらええわ…けど…けど…）

ソフィアの眼から零れでる涙が決意を顕していた。
「…けど、もう逢えへん…御免な」

《ソフィア。喧嘩はな気合じゃ。気合で負けたらあかん》
（うん…気合は負けへんで。お父ちゃん）

両眼をかっと見開き、一気に呪文を唱えた。
「我が名は、ソフィア・フレイア。アコライト。プラチナ・クリスタルの称号を持ち、浄化を基本魔法とする者。この我が身の全ての法力を持って霊龍に召喚を命ず。山の焔龍。空の雷龍。地の激龍。

海の凍龍。天の光龍っ！」
ソフィアの周りに五つの大きな虹色の宝珠が顕れる。その中に無気味に浮かぶ霊龍。
「霊龍に今、命ずる。全てを滅ぼし…我を…」
杖を握り直し、思いっきり地面に叩きつけた。
「我を…滅ぼせっ！」

途端にソフィアの回りの虹の宝珠が割れ、五つの霊龍がソフィアに襲いかかった。
飛び上がって霊龍達を躱すと、ソフィアはヒュドラ達が創った神界への回廊を目差す。
「デオレマ！　アンタだけはアタシが斬る！」

５４．精霊

「できたぞ」
老人は額の汗を拭い、老婆に声をかけた。
『…ふん。まぁまぁだね…アィヒェ、キーファ。よろしく頼むよ』
老婆は巨大な槌となった樫の大木にひょいと飛び乗ると、人形達に声をかけた。
『お前さん達も乗りな。壁を壊しに行くよ！』
『★☆○◎おう！』
人形達が樫の木に飛び乗ると、アィヒェが森の樹々達に呼び掛けた。
『この森の全ての樹々よ。我が意思に共鳴したる樹々よ。この森を救いたる人間ソフィアを助けんとする樹々よ。その身を震わせよ！』
だが…アィヒェの声の響き終ると、動きの無い森。しぃんと静まりきったままの森。
『☆…婆さん…』
『しっ…ほら、聞こえてくるじゃろ？』

遠くの方で樹々がざわめき始め、その音が徐々に近づいてくる。やがて…風の無い深夜の森で樹々が、枝が、折れんとばかりに震えている。
『★婆さん…ありがと…ありがと』
『ほほほ…ちゃんと掴まっておれよ』
『★☆○◎うん！』
近くの樹の上でキーファが叫ぶ。
『樹々よ。ツタよ。あの樫の木を沼へと導け！』
森の樹という樹からツタが伸び樫の木に伸び絡まると、ゆっくりと、しかし、確実に木を沼へと引っ張っていく。そして、徐々に速さを増して行った。
『★☆○◎…凄い』
『…後はニクシー達の仕事だね』

沼の水辺、結界と岸とに挟まれた所に身を置き、ヌーラ姫は侍女達と祈りを捧げていた。
「姫様！　あの樫の木が動き始めましたぁ」
森の中から走り戻ったネゼが叫んだ。
「…皆の者。頼むぞ」
「はい」
侍女達と声を合わせてヌーラ姫が静かに呪文を唱え始めた。
「我ら棲まいし水よ。我らの世界たる水よ。何者にも束縛されずに自由なる水よ。我らの心に応え、我らの意思に応え、ひとときの動きを我らに与えよ…」
結界の外の水が静かにヌーラ姫の回りを周り始め…渦となって盛り上がっていく。
「…水よ。水よ。水よっッ！　川を上り、樫の木を此処に導けっ！」
ヌーラ姫の声に従い、渦となった水は川を逆流し始めた。凄まじき勢いで。

『◎…水の音がする』
『☆婆さん！　水がこっちに来る！』
『ほほほほ…ニクシー達もやるものだね』
既に涸れた川を沼に向かっていた樫の木を水が出迎え、ツタがさらに引っ張っていく。水に乗り、速度が一気に増す。水が逆流を止め、沼へと流れを変えると共に、速さを増して川を下り、沼へ…いや、壁へと向う。その正面にヌーラ姫が居た。
『〇姫さん！　どいて！』
ヌーラ姫は目を閉じたまま、その場を動かない。樫の木の速度を増す為、逆流させた水を引き戻す為に意識を集中させていた。水の流れに加速する樫の木。その切っ先が姫の身体を貫かんとばかりに速度を増した。
『★姫さん！　危ないぃぃぃぃ！』
樫の木がぶつかる寸前、ヌーラ姫は後ろに仰け反り、水の中へと消えた。姫の身体を、喉元をかすめて樫の木が壁に衝突した。

アコライト・ソフィア２８（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２８／３０話目です。

投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア２９（前書き）

神界の扉が開かれ、霊龍と人形達との戦いが…

アコライト・ソフィア29

がっしいいいいいいいいん

轟音と共に水飛沫が空高く上がり、そして雨となって降り注ぐ。
…雨が収まった時、樫の木は…壁に深々と突き刺さっていた。
『…あいたたた…壁を壊せなんだか』
岸辺で老婆が立ち上りながら呟く。水の中からヌーラ姫と侍女達が老婆に謝罪した。
「…すみませぬ。我らの力が至らないばかりに…」
『いやいや、そんな事は無いよ。なぁ、アィヒェ、キーファ』
老婆の言葉に黙って頷く二人のドリァード。
「どうしたら…いいんじゃ？」
ネゼは落胆し、膝を落とす。それを見た老婆が一喝した。
『決まってるだろ？　燃やすんだよ。そうすれば穴が出来上がるさ。さぁ焔のミダル…おや？　何処へ行った？』
人形達は木と壁の隙間を調べていた。
『おや、そんな所に…さぁ、早いとこ、燃やしちまいな…』
『★燃やさんかて大丈夫や！　この隙間が広いから』
サーラが笑って応えた。その指差す隙間から他の人形達が中に入ろうと、もがいている。
『☆ん…くっ。ほら。此処の隙間から中に入れた！』
『○ウチらは小さいから大丈夫や！　んしょっと。ほら入れたっ！』
『◎…後は任せて…ありがと』
手を振り、壁の中に入っていく人形達を見送りながら、老婆は呟いた。
『しっかりおやりよ。…まったく、また死に損なったわい』
口調とは違い、老婆の目には優しさが燈っていた。

55．決戦

壁の中に入り、改めて見渡すと五つの霊龍がヒュドラ達を襲っていた。

霊龍達に触れたヒュドラは瞬時に燃え、引き裂かれ、石化し、凍りついていく。が、ヒュドラは再生し、また新しいヒュドラを産み出していく。その中を飛び回り、霊龍とヒュドラを避けながらデオレマを狙うソフィアの姿。既に服には焼け焦げや引き裂かれた跡が見えた。

『★みんな、本体、呼び出しや…』

『☆言わんでも…』

『〇判ってる…』

『◎…遅いわよ』

人形達の姿が揺らぎ、サーラを核に火焔が舞い包み、アェリィを風が舞い包み、ノーラには石飛礫が、ウェンディを氷雪が舞い包む。瞬く間に…それぞれがある姿へと実体化して行く。その姿はとても人間とは、いや、人間達が空想する精霊とはかけ離れた姿。半獣人に近い霊獣の姿だった。

『★ええか？　一人一龍や。んで余力の在るもんが残りの霊龍を倒す。できんかったら、灰も残らんようにアタイが燃やしたるからな』

『☆そう言うて、アンタができへんかったらアタシが刻んだるからな』

『〇約束や。約束、破ったら、ウチが石に変えたる』

『◎…凍らせて塵にしてあげる』

人形達、いや、焔と風と土と水の精霊達は顔を見合わせて、静かに笑うと霊龍に向かって飛び上がっていった。

『くっくっくっ…早く開け、早く開くのじゃ。そしてこのデオレマを神界へと導け』

虹色の球の中心に白く光る点。その点が大きくなり神々しい姿…杖を持つ女性の後ろ姿へと変った。

『おおぉぉぉぉ！　そなたがスキュラか？』
ゆっくりと振り向く女性。その姿は顔は神々しいまでに美しい。片手に持つ金色に輝く杖にある碧色の宝玉が透き通る光を放っていた。
『おぉぉぉぉぉ！　正に神々の美しさ…』

が、その瞳がデオレマを見た瞬間…
その顔は恐ろしく歪み、憎悪と怒りに満ちた表情へと変っていく。
憎悪の権化の如く、凄まじき眼光で睨み付ける。

『…ひぃぃぃぃぃ…何故じゃ？　何故そのような顔に…まさか、このワシが神界に相応しくないと…まさか…』
ゆっくりと女性の口が開かれ、そこに光が集まり始めた。その時っ！
ソフィアが下からデオレマ目掛けて飛び上がってきた。

「デオレマぁぁ！　光の灰塵となって消滅せよっ！」

切りかかる刃に宿された浄化の力。ソフィアは一刀の下にデオレマを両断した。
『ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ……』
さらに両袈裟懸けに切り倒す。
『ぁぁぁぁ……』
デオレマの身体は銀白の浄化の光の中で光の塵へと変り、消滅した。デオレマが消えると、女性の顔は元の穏やかな表情へと変り、そして…

突如っ！
杖の宝玉から碧色の光を放った。

「ぅあっ！」　光はソフィアの首元を射抜き…一瞬、全身を眩い光に包ませる。
「何っ…今の…？」
　呟くようなソフィアの問いには応えずに…静かに虹色の宝珠中へ消えて行った。宝玉が消えた杖だけを携えて…

「…笑ってた？」
　ソフィアには宝珠の中の女性が消える寸前に振り向き微笑んだように見えた。
「どうして？　…きゃあぁぁぁぁぁ」
　ヒュドラと五龍が再びソフィアに襲いかかり、逃げ惑う。
「くっ…うっ…きゃあぁぁぁ…」
　デオレマを倒して気が緩んだせいか、光で射抜かれたせいか、ソフィアの動きは俊敏ではなく…すぐさまヒュドラの触手に叩き落とされた。幸いに余りにも即座に叩き落とされた為に霊龍達はソフィアを見失った。
　そして、今、ソフィアを探す霊龍達に精霊獣と化した人形達が立ち向かっていった。

『★おりゃあ、こっちや。そこの氷の蛇！』
　サーラが立ち向かったのは凍龍。凍龍はサーラに向かって氷の息を吹き掛ける。避け切れなかったサーラの右手が凍りついていく。が、サーラは躊躇せずにそのまま、龍の口に凍りついた右手を突っ込ませた。
『★それでも氷の霊龍かい？　ウェンディの水の方がよっぽど涼しいでっ！』
　左手で頭を押さえ、力任せに龍を二つに引き裂く。
　が、傷口が凍りつき、即座に再生してサーラの身体に絡み付き、じわじわと凍りつかせていく。
『★ええぃっ！　灰になるまで燃やしたるわっ！　鳳凰変化ぇっ！』

サーラの身体の焔が一際大きく燃え上がり、焔の鳳凰へと姿を変える。凍龍をその翼の中に包み、溶かし、燃やし、灰へと変えた。が、その焔が消えると共に落ちていく人形。纏う焔も消え、水面へと落下した。

『★あかん…ガス欠や』

『☆それが石化かい！　当らんかったら無意味やで！　さぁ！　かかってこんかい！』

アェリィは強がりを言いながらも激龍の攻撃を避けて近づく隙を窺っていた。が、近づくことはおろか、激龍の爪に引き裂かれた足が石化していく。

『こうなったら…おりゃあぁぁぁ！』

捨て身で懐に飛び込み、その爪を激龍の肩に突き刺し、斜めに切り裂く…が、爪はバキンと折れてしまった。

『☆しもうたっ！　…何がおかしいっ！』

激龍が吹き掛ける石化のガスを全身に浴び、石化していきながらも残った片手の爪を顔に突き刺し、雷を走らせ一気に爪を引き下ろす。

一瞬の間に激龍を切り裂いた。

『☆アタシに切れんもんは無いんじゃあぁ！』

千々に切り裂かれた激龍と共に落ちていく人形。

『けど、固められてしもうた…動け…ん』

『○そんな電撃がウチに効くと思うとるんかいっ？　肩こりも取れんでっ！』

雷龍に巻き付かれ、電撃を浴びながらもノーラは強がっていたが、電撃を受けるたびに漏れる悲鳴は次第に大きくなっていった。

『○ぅぅぎゃあぁぁぁ…念が集中でけん』

しかし、雷龍の電撃も次第に間隔が空いてきていた。

『○ぅぅぅぎゃあぁぁぁ…我慢比べやぁぁ』

やっとノーラの手に念が集まり、巨大な七枝鎗へと姿を変えた。
『〇…ウチの勝ちや』
雷龍の頭を押さえ鎗を突き刺し、そのまま水中へと引きずり込み沼底に突き刺す。
もがく雷龍の断末魔が水面に雷を走らせ、一面に激しい水柱が上がる。
そして…静かになった水面に浮かぶ人形
『〇痺れてしもた…あかん、力が出ん』

『◎…そのぐらいの情熱じゃワタシを溶かせないわ』
焔龍に巻き付き、巻き付かれて全身から蒸気を上げながらも、ウェンディは焔龍の頭に両手をまわして引き寄せた。
『◎…凍らせてあげる…永遠に』
ウェンディが焔龍の首に口付けするとそこから凍りついていく。が、焔龍の口から吐き出される焔がウェンディの肩を焼いた。
『◎…そんなに嫌なの？　でも、だめよ。離さないわ…貴方が死ぬまでは！』
ウェンディが両腕で抱きしめていた焔龍の首が凍りつき、硝子のように脆く折れた。
『◎…だらしないわね。そうだ。ソフィアぁぁあぁぁ…』
凍り、崩れ落ちる焔龍を離し、ソフィアに向かおうとするウェンディだったが途中で人形へと変り、燻りながらポトリと落ちた。
『◎…火遊びって焦げたら駄目よね』

浮島に叩き落とされたソフィアは気絶しそうな痛みに立ち上ることはできずにいた。
「うぅぅ…ん、みんな…来てくれたんだ」
立ち上れないながらも人形達の戦いを見ていたソフィアは加勢しようと呪文を唱えてはみたが既に何一つ術を使うことはできなかった。

（法力が尽きた…みんな、御免な…もう動けへん）
仰向けに転がったソフィアの目に映る上空からソフィア目掛けて急降下してくる光龍。
（精一杯、やった…そやろ？）
光龍が口を開けて近づいている。

アコライト・ソフィア２９（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
２９／３０話目です。次が最終話となります。
投票、感想などいただけると有り難いです。

アコライト・ソフィア３０（完結）（前書き）

ソフィアは旅立つ。杖と共に…

アコライト・ソフィア３０（完結）

（ワタシがあの光龍に喰われたら、それで術が解ける…壁と霊龍は暫くは残るやろけど、ヒュドラを喰いつくして霊龍が消えた時に、壁も消える。それで終いや…）

『終りではない！　杖がある限り光龍は残る』
不意に脳裏に声が響いた。

（誰？　龍が残る？　杖が？　なんで？）
『光龍を倒さねば、大地が…世界が光龍に荒らされるぞ』
（荒らされる？　あかん！　それだけはあかんっ！）
『ならば杖を掴め！　掴んで光龍と戦え！』
（掴む？　杖は？）
首を動かすと、右の方に杖が転がっている。
（…う…ぐ…）
動かぬ身体を…痛む身体を、法力を吸い取られ、最後の術をも使い、力が果てた身体を動かし…必死になって身体を動かし杖を掴んだ。
「…やった！　掴んだ！」
『杖を龍に向けて意識しろ！　我こそは光の化身。杖の支配者。光の杖を支配する者と』
「我こそは…光の化身？　何で？」
『意識しろ！　意識が光龍を上回った時、光龍は退く。意識しろ！
気合を入れて！』
（気合？）
《…ソフィア。喧嘩はな気合じゃ。気合で負けたらあかん》

脳裏に浮かぶ父の言葉。その言葉がソフィアに最後の力を与えた。光龍がソフィアを呑み込む寸前に。

「我こそは光の化身！　光の杖の支配者！　光龍よ、我が杖の前に退け！」

ソフィアの叫びと光龍の叫び声が響き渡り、全てが眩い光に包まれた。

やがて…眩い光が消えた時…

残ったのはソフィアとその上で眩く輝きながらゆっくりと空中で回っている光の杖だった。

「杖…貴方が…私を守ってくれたの？」

問い掛けるソフィアに杖は何も応えず、上空の金竜の鳴声だけが夜明けの空に響いていた。

56．東の峠の道

『★なんや、何日も居なかったんに懐かしいな…』

峠の道端で一休みしながらソフィア達は村を見ていた。

あの後、ソフィアと人形達はヌーラ姫達に救われ、みんなの看護を何日か受けて元気になった。それでも肩口から覗く右肩の水衣の包帯はまだ痛々しかったが。

『◎…ソフィア。傷跡…痛む？』

「うぅん。大丈夫よ」

鎖骨の間を手で押さえているソフィアをウェンディが心配して尋ねた。

あの時、光で射抜かれた跡には聖痕紋様のような蒼い七芒星が遺っていた。

（これは一体…？）

考え悩むソフィアの気を紛らそうと人形達が誰にともなく話し始めた。
『★ヒュドラ達が神界への回廊が閉じられると萎んでいったんは…霊体が向こうへ行った所為やろか』
「そうかもね。無事に神界へ旅立ったのかも…ね」
『☆金竜のおっちゃんがヒュドラの残骸と生き残りを平らげてくれたし…』
『○歯ごたえが無いとか文句言うけたけどな』
『★ほんまや。来てたんならさっさと助けとくれんと』
あの時、杖を掴めと言ってくれた声が金竜のものか、それとも杖自身の声かはソフィアにも判らなかった。
『☆アィヒェ婆さんは…村の門、鳥居っていうん？　それになるらしいし』
「鳥居っていうのはもっと東の国よ。でも役に立てるって喜んでたね」
『○変なヤツが来たら、小鳥達に騒ぐようにいうって言ってたから、合ってるんとちゃうん？』
『☆そや。合ってる』
『★余ったんで道案内看板を作れって注文してたね』
『○何処の世界に自分で何を造るんか言う樹があるやろ？　ずうずうしぃわ』
「いいじゃない。それで誰も迷わなくなるわよ」
『☆なんか…間違ったら変な婆さんが出て来て、叱られたりして』
『○きゃはは。ええな、それ』
人形達の笑い声に少しだけ…ソフィアも懐かしげな笑顔を浮かべた。
『☆ヌーラ姫さんとネゼさんが結婚したし』
『○侍女の人達が側室やて。姫さんも気丈夫やわ。「爺、こんな若い娘と一緒になれるばかりかこんな美人の側室付きだぞ！」って』
『★ネゼ爺さんは姫さん一筋だといってたけどな』

「ニクシーさん達にはニクシーさん達の法慣習が在るもの…それにネゼさんはヌーラ姫様の母様の代から仕えていたらしいから大事にする筈よ」
『☆歳は大丈夫なんやろか？』
「…大丈夫でしょ。ネゼさんも見た目ほどの歳ではないそうだから…」

元気になったソフィアがしたことはヌーラ姫とネゼとの結婚式。それと種を守る為に侍女達が側室となる為の儀式。それと…

『〇ノランさんもミクラちゃんも嬉しそうやったな』
「うん。みんな、ちゃんと自分のなりたい職業の石を引いたもんね」

…それと、ノラン達の選礼式を行ったのだった。

『★ミクラちゃんは白い石、ギゼルくんは緑の石、ノランさんは紅い石…』
『☆やっぱりなりたい職業になるんが一番やもんな』
「そうそう…そういう事」
『〇ソフィア…ずるしなかった？』
「ずるなんてしていないわよ。ただ、持ちやすいように位置を変えたけどね」
『◎…それってずるだと思う』
「いいの。誰もが望む事が実現しただけよ」
『★そか』
『☆そだね』

峠から村に続く道を駆降りていく一人の青年。その背中には鍛冶屋の道具。
『〇あの人、ギーゼさんだよね？』

「たぶんね」
『☆9年の修行を6年で修めたんか。凄いな』
『★戻って二人の結婚式挙げないん？』
「それはミクラちゃんの役目よ。私が出る幕じゃないわ」
ミクラとノランの記憶は一部消えていた。それは歪空間結界に魂が包まれた時の後遺症だろうか。それとも神の計らいであろうか。
『☆ちょうどノランさんが魔岩を置いたという事だけ忘れるなんて…』
「忘れるというのも人間の能力の一つなのよ」
『〇ほんま？』
「…たぶん。ね？」

ソフィアは杖に問い掛けた。杖は応えず…ただ銀白色に輝いているだけ。

「みんな、御免ね。私だけ思い込んで先走って」
『★ほんまや』
『☆これからも一緒にやっていこうで』
『〇あんまり一人で背負込まんと』
『◎…みんな仲間だもの』
「頼むわよ。これからも…ずっと」
ソフィアが微笑みながら人形達を見つめ、そして杖を見つめた。
「ずっと一緒よ。ね？」
『★ソフィア…やっぱりちゃんと治療した方がええで』
『☆ほんま、杖に話しかけるなんて…ボケたんとちゃう？』
「ボケてなんていないわよ。じゃあ、麓の街まで駆けっこしましょ。ヨーイドン！」
『★えっ？　何、急にッ！　ソフィアぁ。アタイ達は人形だぞ！』
『☆駆けっこなんてボケたんと関係無いし』
『〇待って…待ってったらぁ』

『◎…みんな頑張れ！』
『★あっ！　こらウェンディ！　何一人だけ肩に乗ってるん？　ずるいぞぉぉ！』
『☆待ってったらぁ。ソフィアぁぁぁ』
去り行くソフィア達を村の樹々と沼の波が見送るように静かに煌めいていた。

手を振るかのように、煌めいていた。

（終了）

２００２年、ニフティＳＦフォーラム創作の部屋、優秀賞受賞作
これは２００７年に改稿したモノです。

アコライト・ソフィア３０（完結）（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これは光と闇の挿話集　長編の１作目になります。
最終話です。

時系列的には、この後は「アリアとソフィア」、別の流れで、「闇の剣」、「岬岩城の姫」（未公開）となります。
そして、「アリアとソフィア」の後が「精霊の街」（未公開）となっています。

投票、感想などいただけると有り難いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7728d/

アコライト・ソフィア

2010年10月8日14時40分発行